
月の裏であいましょう。

山田木理

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

月の裏であいましょう。

【Nコード】

N1024E

【作者名】

山田木理

【あらすじ】

仲間の一人に勝手に“怪盗ハットリ”と名付けられた上、予告状を出され、気がつけば、すっかり有名人になってしまった天才的ドロボー、服部。しかし、その素顔を知る者は少ない。手相見のじいさん、謎の美女ロビン（男）と共に、盗みを繰り返すのは、中学生の少年だった。“怪盗ハットリ”を追う刑事長谷川、その息子で同級生のテツ、3姉妹の盗賊、そして、服部の命を狙う者。物語は冬から始まる。冬は偽物のダイヤモンドに込められた想いとテツの妹。春は桜の中の絵に眠る夢。夏は盲目の少女と命の短い少女。秋は口

月の裏であいましょう。

ピンの真実。そして、また冬が来る。巡る季節の中で、何かを探し、何かを見つけ、何かを盗み、そして、最後に見つけた真実は…？

プロローグ

File 1 (Winter) No. 051 ダイヤモンド (偽物)
File 2 (Spring) No. 064 絵画 (名称及び作者不明)

File 3 (Summer) No. 079 角膜

File 4 (Autumn) No. 080 自筆遺言状

File 5 (Winter) No. 00X XXX .

老人は、ファイルを整理しながら、ファイルをめくっていく。
依頼品はいつも本当にほしいもの。

月の裏であいましょう。

File 1: 偽りのダイヤモンド(1)

「あのヤロー。また、やりやがったな！」

服部太一は暗闇の中、呟いた。

パトカーのサイレン、キビキビとした警察官達の声を耳に、大きな溜息をつく。

彼の顔を覆っているのは某アニメの主人公のお面である。

祭りで見かける安物のお面だ。

服部が親指でそれをクイツと持ち上げると、彼の素顔がパトカーの赤い光に揺れた。

「まだ見つからんのか！」

いらいらした調子で長谷川宣雄は、部下に怒鳴りつけた。

「はっ。只今全力でこの付近一帯を搜索しておりますが、それらしい気配は見あたりません。おそらく午前零時に来るのではないでしょうか？警部」

ぴくりと長谷川の眉が動くのを見て、まだ若いこの部下はびびりまくり、汗をたらだらと流し始めた。

「ばっつっつかもん！当たり前だ。これで何回目だと思っているんだ」

「はっ。5回目であります」

この部下は律儀に答えた。

「そうだ、3ヶ月の間に5回だ。よりによってヤツは、毎回毎回丁寧に、盗む場所と、盗むモノと、盗む時間を予告してきやがる。もちろん今回もだ。ふざけた名前で、何が“怪盗ハットリ”だ」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「ったく。何が“怪盗ハットリ”だ」

と、怪盗ハットリこと服部太一は今回の仕事場である趣味の悪い洋館を見上げ、深い溜息を吐いた。

泥棒は勿論、悪党といった言葉の類からはかけ離れた容貌。

短い黒髪に僅かに幼さの残るその小柄な少年からは、近所の中学生といったイメージしか受けない。

敢えて言うなら、ちよつとジャーニーズ系で、まあまあ年増好みの男の子といった感じである。

服装は黒いシヨートのダツフルコートに濃いめのジーンズ。至って普通。

服部は腕のGショックをチラリと覗き、脳裏に開いた屋敷の見取り図を確認する。

未だかつて彼のメモリは彼を裏切ったことはない。

「さて、と」

ポーン。ポーン。ポーン。ポーン。。。。。

12回響く。

つまり、午前零時を知らせる時計の重い音が近所迷惑を考えず鳴り響く。

「おいつ。ハットリは現れたか？」

門外に駐車した覆面パトカー備え付けの無線マイクを握りしめ、長谷川が怒鳴り散らしている。

ギリギリとマイクを握りしめ、遂にバキツと音を立てて壊れた。

「クッソー。ごうつくばりのくそジジイめ！俺達を中に入れやがれ」
門を閉ざした金田邸を苦々しく見ながら、唾を吐いた。

パツと唾を避けた部下が長谷川を宥めるように言った。

「それにしても、怪盗ハットリは毎回毎回つまらないモノばかり盗みますよね。今回もダイヤモンドの指輪って言っても、偽物らしいですよ。だから、このくそジジイ…金田さんも警察は必要ないと判断したんでしょうね」

月の裏であいましょう。

「けつ。どうだかな。警察には見せられないヤマシイものがどっさりあるんだろうよ。だがな、警察に予告状が届いた以上、来ないわけには行かん。被害者宅じゃ、捜査令状で無理やり押し込むわけにはいかんし、…しかし、よりによってこんな所に来ることになるうとは」

「警部？」

「いや。なんでもない。それよりヤツは現れたのか？」

「警部。たいへんです！」

部下が何かを握りしめ走ってくる。

「来たか？」

「こ、これを…」

そう言つて、部下は何やらカードのようなモノを長谷川に渡した。

裏庭に面する屋敷の屋根に一瞬、影が過ぎる。

警官達は慎重に辺りを見渡しているようだが誰一人としてその影には気付かない。

暗闇の中、その影は無造作に手をポケットへ突っ込み、剥き出しのままの指輪を指で転がす。

服部の口元がゆつくりと弧を描き、音もなく屋根を蹴る。

冷たい風が僅かに頬を撫で、月明かりに“ハットリ君”が微笑む。降り立った裏庭には警官の姿はない。

予定通りだ。

彼のパートナーの仕業である。

服部は静かに庭を走り抜け、暗闇の中、軽々と塀を飛び越える。

飛び降りた先に予定外の警官が現れた。

そこは金田邸の塀の外だ。

想定範囲内。

驚いた警官が声を発する前に服部は走り寄る。

誰もが知っているトレードマーク、“怪盗ハットリ”のお面が近

付き、我を忘れた警官は銃を抜いた。

警官は平常心を失っている。

約670グラムのリボルバーを震える手で服部に向ける。

真正面である。

しかし、服部はそれが見えていないかのように警官に走り寄る。

銃口から僅か1メートルの距離で乾いた音が響く。

外しようがない距離。

が、服部の足は止まらない。

弾倉が回転し、二発目が銃口から放たれる前に、服部の手刀が警官の銃を叩き落とし、素早く相手の背後に回り込んだ。

後ろからアームロックをかけ、反対の手で白い布を力任せに警官の鼻から口にかけて押し当てる。

「ヤダな」。忘れちゃったの？お巡りさん。一発目は空砲でしょ」

警官は膝を付き、服部の前で気を失う。

「取り出すな。指を入れるな。向けるな人に、でしょ？」

服部は日本の警察が掲げる拳銃事故防止三大鉄則をボソリと呟いた。

日本の警官が持つ銃は、一般に暴発事故を防ぐ為に一発目は空砲である。

犯人と撃ち合う可能性より暴発の可能性の方が高い日本らしい策。

服部はお面をポケットにしまい腕時計を眺めやる。

「そろそろだな」

と、歩きだそうとした所で、足下に何か引っかかる。

「あっ？」

眉を顰めた服部に、引っかかったモノがムクリと立ち上がり深々と頭を下げる。

「これは失礼いたしました」

「いえいえ、こちらこそ……」

丁寧な挨拶に服部もつられてペコリと頭を下げる。

月の裏であいましょう。

しつかりした、でも、幼い声。
沈黙。

暗闇に慣れた服部の視線と、推定年齢7歳の女の子の視線が数秒間、固まる。

「失礼」

服部はくるりと右に回った。

子供？

想定範囲外。

どこまで見られた？

そこは扉の外だ。

顔は暗闇でどこまで見えたか？

いや、相手はガキだ、ガキ。

あー。でもなー。

今まで顔は勿論、年齢も性別も全てバレてなかったのに、ヤバイかなあ。

ま、いつか。

何とかなるか？

「ハットリ。こっち、こっち」

そう呼んでいるのは別の警官である。

服部は迷わず、その警官に導かれる。

その他の警官は既に倒れている。

眠らされているのだ。

服部は警官の後に続く。

暫く走ると目立たないように、目立つ車が止めてある。

二人は素早く真つ赤なフェラーリに乗り込んだ。

「ロビン！何だ！このクソ目立つ車は！ふざけんな。それに、また予告状なんか、出しゃがって。仕事がやりにくくて仕方ないじゃね

月の裏であいましょう。

えか！」

「あら。だって、つまんないじゃない。フツーに盗んだって。ハットリもそう思うでしょ？」

そう微笑むのは、深いルージユの唇、長い艶やかな睫毛、長い黒髪、まさに計算されて作り上げられたような美貌に、すらりと伸びた二本の脚を持つ、さっきまで警官姿をした男だった男だ。

女ではない。

通称、ロビン。

服部のパートナーであり、変装と声帯模写の天才である。

そして、“怪盗ハットリ”の名付け親でもある。

服部はロビンの質問には答えず自分の質問を投げる。

「ロビン、まさかまた“アレ”を置いてきたんじゃないだろうな」

ニッコリと微笑むロビンは派手な顔がさらに華やかになる。

「だって。鬼平ってば、かわいいんだもん」

ぐぐぐー。

長谷川宣雄の握りしめた手の中で、“アレ”が潰れていた。

「長谷川警部、悔しそうですね…」

長谷川の後ろでこそそこそと部下達の会話がする。

「また、盗られたからな。しかも例のカードが残されていたらしいな」

「ああ…アレな」

“Dear オニヘーちゃん

ダイヤモンドはイタダキきました。

From 怪盗ハットリ”

「何か完全にコケにされてますね〜」

泣く子も黙る警視庁捜査1課長『鬼平』こと長谷川宣雄は、寒い冬にも関わらずプルプルと熱い怒りに燃えていた。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

古ボケたビルの一室。

古ボケたドア。

その古ボケたネームプレートには手書きで、

『日本占い師協会本部』

と、書かれている。

作務衣を着た占い師らしき老人がまじまじと虫眼鏡で指輪を見てから言った。

「偽物じゃ」

「はあく？偽物？テメイの指示通りのトコロから盗って来たんだぞ」

「ワシが言った通り？そこにあつたのか？この指輪は」

「……いや。本当はじいさんが指示した金田の奥さんの部屋には行かなかった」

ロビンは、その事実を初めて聞いた。

「じゃあ、どこにあつたの？依頼の品は確か『奥さんが結婚する前から持っていた唯一の指輪』の筈よね。じいさんの指示は、『奥さんの部屋』でしょ？予告状出したから場所変えたのかしら？まあ、当然よね」

服部は納得いかないように続けた。

「普通、そうだろ？だから、その指輪はあの屋敷の中で一番警備が厚かつたところから盗ってきたんだ。まあ、子供騙しみたいなモンだったけどね」

「私が調べたセキュリティシステムと違っていたの？」

「外はロビンが調べたとおりだった。ただ、屋敷の中には急いで作ったようなトラップがかなりあつたよ。まあ、だから、絶対、それが本物だと思っただけだなあ」

ロビンは黙って服部を見た。

服部は屋敷に入り子供騙しのトラップを見た瞬間に経路を変えた

のだ。

そして、敢えて警備の厳しい方へと向かいこの指輪を奪取してきた。

しかも、ロビンとの待ち合わせに遅れることなく。

「あのトラップ、罠だったのか。あのジジイが、そんなに頭の切れる奴だったとは計算外だ」

老人は白髪の見事な顎髭を撫でながらチラリと服部を見て笑った。

「ホ、ホ、ホ。偽物が本物なのじゃよ」

「つんだよ。それは」

服部はムツとしたように口をとがらせた。

その表情はかなり子供っぽい。

「フーン。つまり、私達に偽物を盗ませた訳ね」

ロビンは偽ダイヤモンドを手に取り、照明の光にかざした。

「ホント。偽物ね。つまり、金田はこの指輪が偽物だとは知らなかったってことかしら？」

「知らないってわけないだろう？知っていたが、オレ達と遊びたかつたんじゃないか？意味分かんねえ」

服部はもう興味無さそうにクシャクシャと髪を掻き上げる。

老人はニツと笑って服部に向かい、何かを投げた。

服部はそれを右手で受け取り、目を落とす。

五百円硬貨だ。

「何？これ」

「今回の報酬じゃ」

「へ？五百円？」

「そ」

事も無げに老人は言った。

服部はパシッと五百円を弾く。

「ま、いつか。金が目当てじゃねえしな」

それを見て、ニツとロビンは笑う。

そして、後ろから服部に抱きつき、耳に息を吹き込むように囁い

月の裏であいましょう。

た。

「へ。お金じゃないなら、ハットリは何が目的なの？」

「何がつて…。退屈しのぎだよ」

面白くなさそうにブツブツと言って、服部は力尽くでロビンの顔を遠ざける。

File 1: 偽りのダイヤモンド(2)

「太一。起きなさい」

朝の儀式。

母の声。

「もう少し……」

服部太一は片腕を伸ばし目覚まし時計を掴んだ。7時…。2時間しか寝てない。

「太一。いつまで寝ているの？遅刻するわよ」

目を擦りながら階段を降りると、父が新聞を読んでいた。

息子に気づくと新聞から目を離して言った。

「受験勉強のしすぎじゃないのか。あんまり無理するんじゃないぞ」

「うん」

「高校なんて別にどこでもいいだろう。学歴が欲しいなら、高校生になってから大学受験で頑張ればいい」

「お父さん。受験生のやる気無くすような事言わないでよ」

「ははは。そりゃそうだ」

服部は父の笑い声を耳に聴きながら、ふとその手元の新聞に目が行く。

『怪盗ハットリ。またまた現る』

「全く人騒がせな泥棒だな。しかし、実に痛快だ。太一もこのぐらい大物になれよ」

「彼は犯罪者だよ。僕が捕まってもいいの？」

「そりゃ、困る」

父の笑う顔が好きだと思う。

「ほらほら。早くしないと遅れるわよ」

母の優しい声が好きだと思う。

だから、嘘が少し痛い。

月の裏であいましょう。

自分が何者なのか知りたかった。

「よう。服部太一」

弁当を食べ終わった頃、人の名をフルネームで呼ぶ声に振り返り、服部は顔を隠すように掛けていた眼鏡に手を掛けた。

「おはよう。テツ」

中学に入学した時から、出席番号が近いせいで、腐れ縁というべきやっかいな仲の長谷川鉄郎は全くうざったい奴である。

その彼が午後からの御登校である。

服部は前の席に腰を下ろしたテツを見て、物珍しそうに訊いた。

「何かあったの？」

日本が沈没しようと、コイツが学校をさぼる事はある事はないだろうとの確信は、今日崩された。

「ああ、ちよつとな」

テツはほんの一瞬だけ翳った顔を見せたが、すぐにいつもの奴に戻った。

後ろで女子が、ある噂話を始めたからだ。

「ねえ。また、『ハットリ』出たね」

「テレビ見た。見た。マジかっこいいよねー。正体不明っていうのが、またいいよね」

「うん。うん。警察、なめているトコロとかね」

「でも、案外ブツサイクな奴だったりして」

「そんなことないよ。絶対かっこいいって」

テツの眼がキラリと光った。

服部は嫌な予感がして、後ずさりしてしまう。

テツがいつものテツに戻っている。

「ところで、服部。お前、昨夜、深夜十二時、何していた？」
出た！

「家で寝ていたよ」

半ば諦めたように答えてやった。

「それを証明する者はいるか？」

「親…」

「両親は本当にお前が寝ているのを見ていたのか？」

「お前なあゝ。中学生で睡眠中の証人がいる方がやばくない？ いろんな意味でさ」

なんて、言っている服部を完全に無視し、テツが人差し指で真っ直ぐ服部を差す。

「怪盗ハットリはお前だ」

鬼平ジュニア。

つまり、長谷川宣雄警部の息子殿は勝ち誇ったように言う。

「名前が一緒なだけで、人をドロボー扱いしないでよ」

「いいや。オレには確たる自信がある」

「何だよ。それは？」

「名前が一緒だ」

「人の話聞いている？」

三年生になり野球部を引退し、ようやく伸びかけた角刈りの頭の中は、いったいどうなっているのだ…

「まだ、ある…」

その続きは、午後の授業が始まるチャイムに遮られた。

自分の正体？

オレは服部太一。

そして、怪盗ハットリである。そんなこと、わっかてる。

オレが知りたいのは…

午後の授業も終わり、帰る準備をしていると、テツが大真面目な顔で近づいてきた。

「服部。つきあってくれ」

とつとつ壊れたか。

「嫌だ。僕にはそんな趣味はない」

「オレは真剣に言っているんだ」

「僕も真剣に嫌だ」

月の裏であいましょう。

「病院についてきてほしい」

「病院…。そうか。確かに早めに診て貰った方がいいよ」
「行ってくれるか？」

「そう言う事なら早いほうがいい。これ以上ひどくなる前に」

「そうか。よかった。妹も喜んでくれる」

「妹？」

「妹がお前に会いたかった」

「え？何で？診て貰うのは、テツの方だろ？」

「何、言っているんだよ。何でオレが…」

「テツに思いつきりどつかれ、服部は無理矢理病院に向う羽目となった。」

「わがまま一つ言わないデキた妹だけど、今日の朝、見舞いに言ったら、妹がお前に会いたかったって急に言いだしたんだ」

「何でだよ」

「今朝、オレ達の修学旅行の写真見せてやったんだ。それで、その写真の服部見て、絶対逢いたかったって言い出して…。もうすぐ妹の誕生日なんだよね。」

「僕ってかっこいい？」

「今まで一目惚れされた記憶はない。」

「冗談で言っただつもりの質問にテツは足を止めた。」

「ソレ、伊達眼鏡だろ。それにテストや体力測定でも、いつも何でも手エ抜いてるだろ」

「知っていたのか。」

「普通の奴にはわからないだろうけど、オレから見れば、充分怪しいんだよ。お前は」

「服部はクスツと笑った。」

「気のせいだよ」

「なるほどね。」

「それがオレを怪盗ハットリと思うワケね。」

「やっぱり、テツは面白いヤツだ。」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

病院内の小児科は、子供達の笑い声と泣き声に満ちていた。

「美雪。連れてきたぞ」

テツは妹に服部を紹介した。

その瞬間、服部は言葉を失った。

もちろん、テツは気づかなかつたが。

「はじめまして」

長谷川鉄郎の妹、美雪は丁寧に挨拶をした。

「はじめまして」

服部もニツコリと返す。

昨夜を思い出させるような丁寧な挨拶。

何が『はじめまして』だ。

コイツとはアソコで会っている。

あの屋敷の裏でぶつつかつたのは、美雪だ。

間違いない。

だから、オレに会いたいと言ったのか？

「うれしい」。服部君だ」

まだ7、8歳でおさげ髪的美雪は、服部の事を知ってか知らずか、大袈裟な程、はしゃいでいる。

多少顔色が悪いようだが、無邪気に喜んでいる美雪には病気の陰が見られなかった。

ベッドのそばにある重々しい機械は今も動いていない。

二人部屋の隣のベッドは使われてはいないようである。

壁は騒々しいほどに子供向けのキャラクターで飾られているが、

この部屋に一人は淋しいだろう。

美雪の笑顔にテツもつられて微笑んだ。

「のど乾いただろう？オレ、ちょっと飲み物でも買ってくるよ」

テツは部屋から出た。

それを見届けた美雪は、さっきの可愛い妹から一変、ふてぶてしい表情を見せ、ニタリと笑う。

「昨夜は、どーも」

美雪はゆっくりと語気を強め言った。

小学生とは思えぬ豹変ぶりにも、服部は笑顔を崩さず答える。

「昨夜つて、何かな？」

「私も、仲間に入れて欲しいの」

仲間ア？

想定外の言葉にさすがの服部も一瞬言葉を失った。

このくそガキは！

と思いつつも、あくまでも子供に話しかけるように優しく問いかける。

「仲間つて、お友達つてことかな？」

「あんたと友達になる気なんてないから」

冷ややかに美雪は言い放つ。

服部はこのウルトラスーパー二重人格娘に開いた口が塞がらない。

そして、美雪は付け加えた。

「昨夜の仕事、失敗でしょ。偽物の指輪盗んだでしょ」

失敗ではないが偽物だったのは本当である。

服部は美雪の真意を測りかねた。

からかっているようにも思えない。

それより、何故、入院している美雪がああ屋敷の裏に夜にいたのか。

しかし、それを確かめるわけにはいかない。怪盗ハットリと認めることになる。

「やっぱり、テツの妹だな。僕を『怪盗ハットリ』だと言いたいんだろう？」

怪盗ハットリが偽物の指輪を盗んだ事は新聞でもテレビでも知る事が出来た。

「私はお父さんともお兄ちゃんとも違う。私つて言う証人もいるしね」

「証人つてなんの？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「もう！とぼけないでよ！お願い。仲間に入れてよ。またあの屋敷に忍び込むんでしょ」

やけに必死になる美雪に少し戸惑いながらも服部はやっぱりとぼけた。

「ごめん、遅くなって…」

テツの声に美雪はハツとして振り向き、すぐに元の可愛い妹に戻った。

「ありがとー。お兄ちゃん」

全て秘密らしい。

可愛くジューズを受け取る美雪を服部は釈然としない様子でみつめた。

全くこの家族とは本当に縁がある。

服部は心の中で深い溜息を吐いた。

服部と兄のテツが帰り、美雪はひとり冷たい風が吹いているであろう外を眺めた。

ガラリとドアが引く音とともに元気な声が聞こえた。

「美雪お姉ちゃん。はい、これ！」

隣の病室の男の子が、美雪のベッドに走りより、小さな袋を差し出した。

「何？これ」

首を傾げながら、袋を逆さに振ると美雪の小さな手に指輪が一つ転がった。

「変なおじいちゃんが美雪お姉ちゃんに、って。それからね。ボクね、今日、退院だよ。ママが向かいに来てくれるんだ」

「よかったね。たっちゃん、頑張ったモンね」

「あ。ママだ。じゃあね。バイバイ」

嬉しそうに母親に走り寄る男の子に、美雪は淋しそうに手を振った。

風の音が美雪の耳を掠り、指輪をグツと握り締めた。

月の裏であいましょう。

時を遡ること二週間前。

クリスマススの飾り付けに賑わい始めた町中に、初雪がフワリフワリと舞い始めた。

その中を、赤いダツフルコートに身を包んだお下げ髪の少女が、白い息を弾ませながら走っている。

お目当ての人を見つけ、少女は近づいた。

「ねえ。おじいちゃんは占い師でしょ。ちょっと捜し物してるんだけどさ。そういうのも分かんのか」

「もちろんだよ」

手相見のじいさんは前に乗り出し、にっこり笑って答えた。

小さな商店街の一角、墨で書かれた手相図の横にゆったりと座っているじいさんは水戸黄門を思い出される容姿だ。

「何か探して欲しい物があるのかね」

「うん」

少女はポケットから一枚の写真を取り出す。

「これを捜して欲しいの」

File 1：偽りのダイヤモンド（3）

トントントントン…

まな板をたたく音がリズムカルに長谷川家に響いている。

包丁の持ち主はテツである。

母親のいないこの家では、家事はテツと美雪の二人の仕事であったが、美雪の入院中は全てテツの仕事である。

今日は珍しく父親の長谷川宣雄がいた。

捜査一課の鬼平こと長谷川宣雄も、家に帰ればただの親父である。テツは慣れた手つきで沸騰しかけたみそ汁にサツとネギを入れた。電話のベルが鳴る。

おたまでぐるりとみそ汁をかき回し、左手に持ったお椀にテツは豆腐のみそ汁を注いだ。

父親の話声がテツの耳に届く。

それは次第に大きくなっていき、ついに怒りが加わった。

「何度言えば、分かるんだ。あんたに美雪を渡す気はない」

テツは電話の相手が分かった。

美雪の母親だ。

五年前、美雪がまだ二歳の時、捜査二課にいたテツの父に結婚詐欺で逮捕された女だ。

彼女は余罪があつたため、暫く刑務所での生活を余儀なくされ、身よりのなかつた美雪は親戚の間をたらい回しにされた後、長谷川家に落ち着いた。

十歳だったテツは、その時の事をよく覚えていた。

1年後、母親は刑務所から出ても、娘を迎えには来なかつたのだ。そして、あれから5年過ぎた今になって、急に連絡をよこしてきたのである。

父、宣雄は怒りにまかせて、ドスンとちゃぶ台の前に座った。

ちゃぶ台にはテツの作った夕飯が並んでいる。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

沈黙で食事がしばらく続いた。

テツは箸を置き、思い切ったように言った。

「親父さ…。美雪を母親に返してもいいんじゃないか？」

宣雄は黙ったまま、テツの作ったみそ汁をすすった。

「あいつ、何も知らないし、何も言わないけどさ。母親ってもの、欲しいんじゃないかな」

「お前は欲しかったのか？母親」

みそ汁の豆腐が宣雄の箸の中で壊れた。

「オレは男だからいいんだ。でも、美雪は女だから、母親が必要だと思う…」

テツは言葉を止めた。

沈黙が二人を包む。

宣雄は何も答えなかった。

テツは沈黙に耐えられなくなり、ぬるくなったみそ汁を、一気に飲み干した。

この家がこれ程まで静かだったことはなかった。

テツの母親は心臓が弱く、入退院を繰り返していたが、美雪が引き取られて暫くは嘘のように元気になった。

しかし、1年後、美雪が正式に長谷川家の一員となったと同時に息を引き取った。

まるで、美雪を自分の身代わりのように残して。

だから、テツは美雪は血が繋がっていないと知っていても家族にしか思えなかった。

血の繋がっていない美雪が母親と同じく心臓病を患っていた事実が皮肉としか言いようがない。

1年前、心臓に痛みを訴えた美雪は、心室中隔欠損症と診断された。

先天性の心疾患である。

右心室と左心室の間に穴が開いているのだ。

美雪はギリギリまで我慢していたのだ。

もし、母親がいたなら…。
テツはいつもそう思った。
そうすればもっと早くに美雪の異変に気付いたはずだ。
テツはグッと両手を握りしめた。

ピピピピピ…

服部のポケットから、軽快な電子音がした。
徐に手をポケットに突っ込み、その音を止めてから、内容を確認する。

仕事だ。

「なに？なに？」

帰り道、テツが興味深そうに訊ねてくる。

「何でもないよ」

さり気なく答える。

「今度は何を盗むんだ？」

またか。服部は深く溜息を吐いた。

「ほんつとに、しつこいな。いい加減にしるよ。だいたい僕達受験生だよ。そんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

「そう言えば、オレ、志望校変えたから。西高にした」

唐突に話を変えるのはテツの得意技だ。

「え？僕と同じじゃないか！」

近所の公立高校である。

テツは某有名私立高校志望だった。

思いつきり顔を顰めた服部には気付かずテツは笑っている。

「だって、高校なんてどこでもいいような気がしてさ、近い方がいいよ。やっぱり」

熱血少年なテツは何でも一番を目指した。

成績もスポーツも優秀で、生徒会長もしていた。

目立たない服部とは対照的な存在だ。

月の裏であいましょう。

しかし、最近元気がない。
無理矢理明るく振る舞っているのが服部にはイヤでも分かる。
あの妹のせいだろうか。

「今月の25日のクリスマス、美雪の誕生日なんだ。外出許可が下りたから家で祝おうと思っっているけど、服部も来ないか？」

テツの申し出に服部は首を横に振った。

「家族水いらずすこせよ」

これ以上この家族には関わりたくないと思つてニッコリ笑って本音を隠す。

不意に服部の指がぴくりと動いた。

服部はテツに気付かれないように後方へ神経を集中させた。

そして、息を吐いてからテツに言った。

「じゃあ、僕、ちよつと用あるから」

服部はいつもの帰り道とは違うT字路でテツを見送り、足を止めた。

後ろから赤いフェラーリが静かに服部の横に滑り込む。

「つけていたのか？ロビン」

フェラーリの窓からこの車に似合いすぎるほど似合った女が、サングラスをかけたまま、ニツと笑った。

「いやね。人聞きが悪い。迎えに来てあげたのよ」

服部は少しムツとしたように車に乗り込んだ。

ロビンは神出鬼没である。

教えてもないのに、こうして服部の前に当然のように現れる。

それに引き替え、服部はロビンについて何も知らない。

本当の名前も、顔ですらも。

ただ、この誰もが見とれるほどの絶世の美女が実は男であるという事実以外は。

そして、じいさんはいつもの小汚いビルの一室で服部を待っている。

月の裏であいましょう。

「今回の仕事じゃ」

そう言って老人は三枚の写真を見せた。

服部は写真を一枚一枚じっくりと眺めた。

三枚の写真は同じ女性が違うアングルで撮られている写真であった。

服部はふと一枚の写真に目を止めた。

一枚だけ他の写真より古く、しかも、赤ちゃんを抱いている。

「この女、確か前回の仕事先の金持ちジジイの奥さんだよな。ガキなんかいた？」

「ふうーん。まあまあね」

ロビンは女を値踏みするように、まじまじと写真を見つめた。

「今回盗むのはこの女性じゃよ」

「おい。待てよ。誘拐はごめんだよ」

「誘拐じゃない。依頼主はこの女性自身じゃ」

水戸黄門のようで、水戸黄門よりも油断ならないジジイだ。

服部とロビンは、にっこり微笑むじいさんに視線を送る。

「この女性は離婚したがっているのじゃよ。ところが、ここの御主人はごうつくばりなジジイでな。一度手に入れた物を離れたがらない。この女性はほとんど軟禁状態で、外出するにも、常に見張りがついておる」

「弁護士とかいるだろ？」

「そんなまともな手はこのジジイには通じんのじゃよ」

自分もジジイのくせに。

「どうせ金目当ての結婚だろ。自業自得」

突き放したように、服部は言った。

「でも、面白そうね。やりましょうよ」

ロビンは興味津々で言った。

ロビンは本当に趣味だけでこの仕事をしているようだ。
本職は何か知らない。

一度訊いたら、ゲイバーでじいさんにスカウトされたと言っていたが、何処まで本当か服部は知らない。

「まあ。別にいいけどね」

この服部の一言で決まりである。

全くこのジジイはどこからこんな仕事を仕入れてくるのか。

それは全くの謎だ。

「で、いつ？」

「12月24日じゃ」

クリスマスイブ。

幸せな人間には最高の日。

それ以外の人間にはこれ以上に最低の日はないだろう。

服部太一は母親がこの日のために作ったケーキやら、チキンだのを目一杯食べていた。

幸せが詰まったこの家で服部は息が詰まりそうになっていた。

クリスマスとか誕生日とか、そんな特別な日、自分の幸福や両親の愛情を、特に強く感じる日は、酷い自己嫌悪に苛まされた。

服部は時計をチラリと見てから立ち上がった。

「そろそろ勉強するよ」

「真面目だな。太一は。クリスマスイブぐらいゆっくりすればいい」

父親は息子を止めようとした。しかし、息子はそれに苦笑いで答えた。

「受験生にはそんな物ないんだよ」

自分の部屋のドアを閉めてから、大きく深呼吸をした。

それからベランダの窓を開ける。

冷たい空気が流れ込んできた。

十二階建てマンションの最上階。

それが彼の家だった。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

夜のイルミネーションはいつもより輝いて見える。
遠くにそびえるクリスマスツリーは特に煌びやかだった。

辺りをぐるりと見渡してから、手すりに足をかけ、ぐいっと体を
持ち上げる。

それから、屋根に手をかけ屋上へと上った。

File 1: 偽りのダイヤモンド(4)

「ハットリはまだか？」

寒さに震える部下をよそに長谷川宣雄は燃えていた。

「午前零時に来るのではないでしょうか？ やっぱり」

予告状を眺めている愚かな部下を見下ろし鬼平は怒鳴った。

「くそつ。怪盗ハットリ！ 俺はお前を見失ったぞ。よりによって誘拐をしてくすとは。今度という今度は首洗って待っている！」

コートの襟を立てながら、部下は大きな洋館を見上げた。

「今回も中に入れて貰えなかったですね」

「ふん。こんな家になんか入りたくなんかないね。こんなクソジジイとクソ女の居る家なんか」

今回いつもの鬼平の燃え方と少し違うのを感じ、部下の一人が隣の仲間を肘でつついた。

「なんかいつもより、長谷川警部の怒り方が激しくないか？」

「何でも、ここの奥さん前科あるらしい。それも警部に逮捕されたって話だ。その奥さんと話をしてから、ずっとああだ」

「それにしても、なぜハットリはあの奥さんを誘拐しようとしているんだ？」

「だよな。金目当ての誘拐には無理があるしなあ」

「でも、ハットリも少しはイブに働かされるこっちの身になって欲しいよな」

「まっただ」

そうやって彼等は星のない夜空を見上げた。

「本当に申し訳ございませんわ。私の為に」

唐突な謝罪の声の主に、部下の二人は慌てて振り向いた。

この館の、しかも、誘拐されようとしている女だった。

「奥さん。外に出ていいんですか？ そろそろ現れますよ。怪盗ハットリが」

月の裏であいましょう。

「そうですね。中に入りますわ」

彼女は軽くお辞儀をして洋館の中に入っていった。

刑事達は彼女が中に入るのを見送り囁いた。

「うわー。間近で見ると結構きれいだな。30過ぎには見えないぜ」

「うん。うん。アレ？でも、今、外から来なかったか？」

「そうだった？」

とぼけた部下達である。

パタン

彼女は長谷川の部下の声を後ろに聴きつつ、ドアを後ろ手に閉め、ゆっくりと屋敷の中を見渡した。

中には金田が雇った黒服のごろつき共がうようよといた。

イヤらしい目つき之年食ったジジイが、その中から姿を現し声を掛けた。

「お前は、部屋に居ると言っただろう！」

「そうするわ」

くるりと後ろを向いて階段を上って行った。

「ええつと。三番目の部屋だったわね」

中には誰もいない。

「どうやら。本物はうまく逃げ出せたようね」

クスツとロビンは微笑んだ。

それから、腕につけた時計を見た。

携帯電話に繋がっているマイクに口を近づけて呟く。

「こつちは、OKよ」

同じく携帯電話に繋がっているイヤフォンを耳にかけた。

『こつちも。今からモノをとどける』

服部の声だ。

この辺にはまだ警察が厳戒態勢を取っているので、少し遠くまでモノ、つまり、女を送り届ける手はずになっている。

「了解」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

ロビンは、棚にある高価そうな置き時計に目をやった。

「さん・にい・いつ」

ボーン。ボーン。ボーン。

一階大広間の大時計が午前零時を知らせる。

「は〜は！は！はっ！！！！さすがのハットリもこれだけのボディガードがいては手も足もでまい」

ドアを開けてこここのジジイが、大威張りで入ってきた。

警備は以前の倍以上に増やされていた。

前回、偽物とは言え指輪を盗まれたのを、相当根に持っているらしい。

「ハッターリ怪盗”め”」

ムカツ。

ロビンはこのジジイを睨んだ。

ジジイはイヤらしい眼をして、ロビンに近づいて来た。

もちろん自分の奥さんだと信じて。

「お前も、もう別れるなんて言うな」

げげげげげ…。

ロビンは後ずさった。

男が汚らしい顔を近付けてきたのだ。

（や、やめて〜。わたしっつば、こんな格好しているけどノーマルなんだから）

ロビンは心で叫ぶ。

男がグツと腕を掴んだ瞬間。

「ハットリがでたぞ〜」

大きな声が屋敷に響き渡る。

「ウソ！」

ロビンは思わず叫ぶと同時に、腕に掛けられた男の腕を捻って投げ飛ばした。

あまりの速さに、男は自分が投げ飛ばされたことすら気付かぬ内に気を失っていた。

「あら、つい」

気を失った男を見下してロビンは可愛く首を捻った。

そして、男に駄目押しの催涙スプレーを掛けて、近くのクローゼットに押し込みながら呟く。

「何でハットリがここに帰っているのよ」

ロビンは腕時計からここにいるはずのない服部に携帯電話で連絡を試みた。

「どこだ？どこだ？ハットリはどこいった」

中に入れてもらえない警官達がわらわらと動いている。

長谷川はその中の一人の襟首を掴まえ、長谷川は叫んだ。

「どつちだ」

「そ、そ、それが、その…」

その部下はそう言っつて、あるモノを指差した。その先には、ハットリのトレードマークであるお面が落ちていた。

祭りなどで見かける某テレビ番組の愛らしいお面である。

「え？オレは外だぞ」

イヤホンから聞こえるロビンの声に耳を澄ました服部は、ついさつき、依頼人の女と別れ、一人でいた。

『じゃあ。ここにいるのは誰なの？』

服部はイヤな予感がした。

(仲間に入れて。もう一度あの屋敷に忍び込むんでしょ)

美雪の言葉が頭に浮かぶ。

「まさか、な…」

とりあえず服部は屋敷へと戻った。

警官の動きが確かに前とは違う。

蜂の巣をつついたような大騒ぎだ。

「障らぬ神に祟りなし。ロビン。検討を祈る」

と、服部が帰ろうとした時、後ろから聞き慣れた声でした。

月の裏であいましょう。

「服部！」

「テツ。どうしてこんなトコロに？」

予告状は出しているが、報道はされていない。

今夜、ここに怪盗ハットリが現れるのを知っているのは、この館の住人と警察と怪盗ハットリだけである。

怪盗ハットリと自分を結びつけたがるテツの煩さを思うと服部は焦った。

しかし、落ち着いてよく見るとテツは寒いのに汗をびっしょりとかき、肩で息をしている。

「美雪が。美雪がいなくなった。ついさっき病院から電話があつてテツの顔は真っ青で、服部がここにいる不審さえも気付かないほどに動揺している。」

「あいつは…、あいつは、長くない。絶対安静なんだ。ほんの僅かな運動でも命取りになるんだ」

絞り出すようなテツの声。

嘘だろ。

あのくそ生意気なガキが、か？

テツは、悪い夢でも見ているかのように、一人で呟いた。

「アイツ、ずっと無理して元気な振りしていたのに。オレ、全然気付かなくて」

「テツ…」

テツの体から冷たい汗が流れ出し、震える体を鎮めようとするように両腕で自分を抱きしめた。

「もっと早く気付いていれば、助かったかも知れない。母親さえ、いれば…」

テツはそのまま跪き、両手で顔を隠した。

「違う。オレが悪いんだ。オレが気付いてやらなきゃ、いけなかつたんだ。早く気付いていれば、間に合ったかも知れないのに。アメリカとか、どこにでも行って移植手術受けていれば助かったかも知れない！いや、チガウ！」

月の裏であいましょう。

テツは焦点を失った目を彷徨わせ髪を掻きむしる。

「オレは心のどこかで美雪のことが邪魔だったんだ。アイツさえいなければ、母さんが死ななかつたかも知れない。アイツさえいなければもつと自由に為れたかも知れない。そして、美雪の病気が悪化したのを全て母親がいないせいにして。心の中で全部親父のせいにしてたんだ！オレが、オレがアイツを殺したんだ！」

優等生で自信過剰なテツがギリギリで保っていた大事なモノ。

それは妹に対する愛情。

スキなのも本当。

キライなのも本当。

いて欲しいのも本当。

いて欲しくないのも本当。

全部本当だから苦しい。

でも、秤に掛けて決めないで。

全ての感情はゼロにならないから。

服部は黙ったままテツの胸ぐらを掴むと力任せに頬を殴った。

「落ち着け。美雪は死んだわけじゃないだろう？」

道路に倒れたテツは殴られた頬を押さえ、呆然と服部を見上げた。服部は視線を屋敷にチラリと投げてから、テツの腕を取り立ち上がらせた。

「父親に伝えに来たんだろう。警部は正門にいる筈だ」

「服部？」

「早く行け。まだ、間に合うさ」

祈りのような服部の言葉を最後まで聞かずにテツは正門に走り出していた。

服部はジーンズの後ろに突っ込んだお面を取り出し、ハットリ君を見つめた。

「全く、世話の焼けるヤツ。もう死ぬって？全然そんなの似合わねーよ。どうして命を懸けて、この屋敷にこだわるんだよ」

月の裏であいましょう。

服部には全て分かった。
分かってはいたけど、言わずにいられなかった。
その問いは美雪にではなく自分への疑問だったから。
服部は短く舌打ちし、いつもの面を掛け素早く屋敷へと忍び込んだ。

File 1：偽りのダイヤモンド（5）

「はあ。はあ。お面、落としちゃったな」

屋根裏部屋の片隅で美雪は蒼白な顔でうずくまっていた。

「どこにいるの。母さん…」

ガタン

屋根裏部屋の窓が開き、静かに冷たい風が入り込んできた。

「よく警察やあの警備の眼を盗んでここまで来たな。仲間に入れてやっていいぜ。『怪盗ハットリ』のな」

フワリと目の前に、自分が持っていたお面と同じモノをつけた男が飛び降りた。

「ハットリ？」

服部は面に手を掛け、ソレをクイツと上げ、顔を露わにした。

「そうだ。服部だよ」

ほらね、と弱々しく美雪は微笑んだ。

服部はしゃがみ込んで、美雪の顔を見つめた。

「バカ。どうしてこんな無茶するんだ。病人だろうが」

「母さんに、会いたくて…」

服部は目を細めた。

事務所でこの奥さんが子供を抱いている写真を見てから全てのカードは揃っていたのだ。

いつ止まるか分からない心臓。

隠されていた筈の本当の母親。

美雪の頭は回転が良すぎる…。

全てを知っていたのだろう。

「どうして…」

月の裏であいましょう。

そんなに会いたいと思うんだ？
口から零れる答えの分かり切った質問。
だから、美雪は答えない。
冷たい風にまじり白いモノが目の前にちらつき始めた。
雪だ。

「あの夜も屋敷の外まで来たけど…。中に入れなくて。仲間になれば、入れるって思ったんだけど…。ハットリ、とぼけるんだもの」
「悪かったよ」

「…だから、自分で頑張っちゃったよ。時間がもうないから」
明日は美雪の誕生日。

「わたしね、捨てられたの。母さんに。覚えてないんだけど。1年ぐらい前かな、大人達が話してるの聞いて、父さんのダンスから写真見付けて…」

開けっ放しの窓から、次から次へと雪が舞い散ってきた。

「もう、死ぬって思ったら、何だか会いたくなかったの。でも、お父さんにもお兄ちゃんにも誰にも、絶対知られちゃいけないって思ったの。だって、コレって裏切だよ。最低の裏切だよ」

「うらぎり…？」

「だってさ、お父さんも、お兄ちゃんもあんなに優しいのに『母さんに会いたい』なんて」

「本当の親に会いたいと思うのは、育てて貰った親への裏切りだよ？」

「そっだよ。最低だよ。ちゃんと両親のいるハットリには分かんないよ」

最高の娘、妹を演じる美雪が自分と重なる。

演じるのは、愛しているから、愛されたいから…。

服部の瞳の中に、白い雪が舞い散り、しだいに降り積もっていく。

白い雪が、いくつも、いくつも。

月の裏であいましょう。

暗い闇から次々と生まれる雪を服部はぼんやりと眺め、思わず口を付く。

「オレも…。親に捨てられたんだ。こんな雪の日だった」

「え？」

ハツとして美雪は服部を見た。

その深い瞳の奥からは、冷たい闇が広がっていた。

「この仕事をしていると、いつか会えると聞いたんだ。だから…。別に愛して欲しい訳じゃない、文句を言いたい訳でもない」

「じゃあ。どうして」

美雪は優しく訊いた。

「知りたかったんだ。自分の存在の意味を、…たぶん」

哀しく微笑んだ服部見て、美雪は寂しそうに言った。

「わたしは、ただ恋しかつただけかな」

ブルツと美雪は震えて、両手で自分を抱きしめた。

その仕草に服部は正気に戻った。

「おい。大丈夫か？」

服部は自分の着ていた上着を脱ぎ、美雪に着せた。

「とにかく、ここを出よう」

美雪がこの屋敷にこだわった理由、それは母親、つまりこの奥さんに会うため。

本当の事を言わなかったのは父と兄への思いやりだろう。

しかし、ここには母親はいない。

服部はあの女がああ後どこに行ったかは知らない。

「動けるか？」

美雪はうずくまったまま、首を横に振った。

ガクガクと小刻みに震えている美雪を見て、痛い言葉を思い出す。もう時間がない。

美雪はポケットから大事そうに何かを取り出した。

偽物の指輪だった。

服部はグツと拳を握りしめた。

「オレが盗んできてやるよ。美雪の大事なモノを」

服部は唇を噛みしめて、携帯電話を取り出した。

充電切れだった。

仕事にかける時間がオーバーしているのだ。

「そのかわり、また、しくじるかも知れない」

また、『偽物』を盗ってくるかもしれない。

立ち上がるうとした服部の服の裾を美雪の手が止めた。

「アンタなんか任せられない。自分で行く」

ふてぶてしく言い放った美雪の綺麗な瞳が服部の心を貫いた。

服部はゆっくりと頷いた。

「分かった。オレが右に行き人目を引く。お前は、左へ行け。突き

当たりの階段を下りて三番目のドアだ」

そこには、『偽物』がいる。

服部はニツと笑い、トレードマークのハットリ君で顔を隠した。

「お前も怪盗ハットリだろ。捕まるなよ」

「この私がそんなへマするわけないでしょ！」

強がって見せた美雪の精一杯の輝きを、服部は眩しそうに見た。

ドアを開く。

廊下から光が漏れる。

そして、走り出す。

「おい！ハットリだ。ハットリがでたぞ」

警備の男達のわめき声があちこちから拳がった。

服部は一人目の男をかわし、後頭部を蹴飛ばした。

そして、次に来た男の懐に潜り込み、溝うちに一発。

素早いその動きを、ドアの隙間から暫く美雪は見つめていた。

「かっこいいじゃん」

美雪は胸を押さえながら、歩き始めた。

月の裏であいましょう。

ドスン。ドダダダダ…
2〜3人、まとめて階段から蹴飛ばしてから、服部は溜息を吐いた。

「次から次へと、いつたい何人いるんだよ」

「あつちだ。あそこにいるぞ」

「また〜？」

階段の手すりを掴み、体を浮かし、一気に三階から、吹き抜けの一階ホールへと飛び降りた。

「ハットリつてば、なにやってんのよ。動けに動けないじゃないの。どうなってんのよ!」

服部からの連絡が来ず、ロビンはイライラしながら、外の様子を見やる。

ガタン

ドアの音に、ビクッとロビンは振り返った。

そこにいたのは子供だった。

「お母さん？」

ロビンに向かい美雪はおそろおそろ尋ねた。

美雪は写真でしか見たことのない母親をじっと見た。

もちろん、それは母親ではない。

ロビンはジッと少女を見た。

この家に子供なんて居たかしら？

居ない筈である。

「お母さん」

青ざめた顔でブルブルと震える少女の着ている上着に気付いた。服部のモノだ。

「美雪だよ。お母さん。会いた…か…」

息苦しさに美雪は膝をつき床へと座り込んでしまった。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

それでも美雪は笑顔を見せようとした。

「みゆ…き？」

ロビンは暫く弱々しく微笑む美雪を見てからゆっくりと近づいていった。

「お母さん」

そして、膝をつき、その震える声を聞きながら美雪を抱きしめた。

ロビンは1枚の写真を思い出していた。

「みゆき」

小さな体を抱く腕にぐつと力を込めた。

「お母さん。お母さん。お母さん」

ロビンにしがみつき何度も何度も繰り返す言葉は次第にかすれていき、代わりにその瞳からぼろぼろと大粒の涙が溢れ出る。

あらゆる可能性を考え、ロビンは行動する。

そしてこの状況は、ロビンに初めて見る、少女の名前を繰り返させた。

「みゆき」、と。

File 1：偽りのダイヤモンド（完）

「美雪」

病室の空のベッドを呆然と見つめ、本当の母は、へなへなと膝から崩れ落ちた。

「皮肉なものですな」

聞き覚えのある老人の声に彼女は振り返った。

偶然、町の商店街で出逢った不思議な手相見。

どうしても、美雪の誕生日を祝いたかった自分をクリスマスイブに救い出してくれると彼は言った。

「美雪は、美雪はどこへ行ったのですか？あなたのおかげで、ようやく夫から自由に為れたのに、どうして肝心の美雪がここにいないのですか」

老人は哀しげに涙する女性に呟いた。

「遅すぎたのかもしれませんが」

「私は、ただ美雪に何不自由のない生活を送らせてあげたかった。だから、そんな家を見つけたら迎えに行こうと思っていたの。でも、違っていた。お金があっても幸せになんかなれない。美雪さえいれば良かったのに。こんな当たり前の事今頃気付くなんて」

唇をかみしめた哀れな母親に老人は語りかけた。

「…あの子にとって指輪が本物か偽物かは関係なかった。ただ、持ち主を知りたかった。しかし、あの子が本当に欲しかった物は…」
何を言われているか分からない女性に、老人は一呼吸置いてから、さらに続けた。

「私もあの子がこの日に動くとは思いませんでした。あの子もあなたに会いたがっておりました」

「あの子が私に…？」

ゆっくりと老人は首を縦に振る。

彼女は立ち上がった。

月の裏であいましょう。

その時、小さな音を立て床に何かが転がった。しかし、彼女は気付かず、病院を後にした。向かったのは逃げ出したばかりの家。

老人は彼女を見送ると、床に転がった小さなモノを取り上げた。

「ダイヤモンド…」

老人は目を細めて白い菱形の錠剤を見つめた。

MDMA。

エクスタシーの名で知られる非合法ドラッグの一種である。

彼女が娘を引き取れなかった理由。

現実を逃避するしかなかった母親が今になって娘を欲しがる。

「…そう、あの子にとって本物も偽物も関係なかったのですよ」

悲しい微笑は老人の顔に一つ皺を増やす。

「お母さん。コレ返す。お母さんでしょ？」

美雪はポケットから指輪を取り出し、ロビンに手渡した。

「お母さん。ごめんね。コレ、盗んでもらったんだ。でも、これ偽物でしょ」

ロビンは見覚えのある指輪を握りしめた。

「ふう」

服部は手を払いながら、溜息を吐いた。

その周りにはごろごろと男達が倒れている。

とりあえず、美雪のいるロビンの部屋に戻ろうとした時、勢いよ

く正面の扉が開いた。

2階の廊下から吹き抜けの玄関を見下ろした。

長谷川宣雄とその息子のテツである。

テツは訳が分からず父親に怒鳴った。

「どういうことだよ！」

「だから、この家の奥さんが美雪の母親なんだ」

父はそう言って辺りを見た。

月の裏であいましょう。

一瞬、男達が皆倒れているのに驚いたが、すぐに美雪を捜し始めた。

服部は急いでロビンが居る部屋に戻った。

ロビンは美雪を抱きしめていた。

美雪は服部に気付き、ほほ笑んだ。

「ハットリ君。ありがとう」

美雪の笑顔に服部は頷く。

「お母さん。ありがとう。それに、ゴメンね。急に押し掛けてきて私、幸せだから。お母さんも、幸せになって」

美雪はそう言うと、ロビンからそっと離れた。

「みゆき…」

別れ難そうなロビンを、服部はベランダへと引つ張った。

それと入れ替わるように長谷川親子が入ってきた。

「美雪。しっかりしろ！」

長谷川宣雄は美雪を見つけると、すぐに抱きかかえ外へと走ろうとしたが、美雪はテツに向かって振り絞るように言った。

「待つて。お願いがあるの。ハットリに伝えて欲しいの。私はハットリがいてくれて嬉しかったって。ハットリの存在は私への最高のバースデープレゼントだって」

「どっちのハットリに？」

美雪はニツコリと微笑んだ。

それが服部の見た美雪の最後の笑顔だった。

「バースデープレゼントか…」

ベランダでそれを聞いていた服部は、ボソツと呟いた。

それから、隣のロビンに小さな声で言った。

「ありがとな」

「…賭けにでたわね」

自分が美雪の母親に成り済みますかどうかは服部には分からなかつ

た筈である。

にもかかわらず服部がロビンの部屋を美雪に教えたのは賭以外何物でもない。

「いや」

服部は首を横に振った。

そして、ロビンを見て小さく微笑んだ。

ロビンは肩を竦めて微笑みを返した。

ロビンの行動を確信をもって予測したというわけだ。

「…かなわないな」

ロビンは一人呟いたが、服部には聞こえていないようだ。

老人は懐から一枚の写真を取り出した。

そこには赤ちゃんを抱いた若い女性が幸せそうな顔で写っていた。指には偽物のダイヤモンドが光っている。

その赤ちゃんの今は亡き父親から送られたモノだ。

たとえそれがイミテーションでも、そこに込められる気持ちは本物である。

あの少女は、それを知っていたのかもしれない。

老人は初雪の舞う中に現れた少女を思いだしていた。

あれは初雪の日だった。

商店街。

お下げ髪の少女はポケットからこの写真を取りだし老人に渡した。「お嬢ちゃんが捜して欲しいのはこの人かい？」

「え？えーと。違うよ。えーと、その…。指輪だよ。その人がしている指輪」

手相見の老人は虫眼鏡でじっくりと写真の中の指輪を観察した。

そして、にっこりと微笑み、

月の裏であいましょう。

「ここだけの話じゃが」

そう前置きし、小さな耳に皺だらけの手をそつと添えて囁いた。

「ワシは、怪盗ハットリと知り合いなんじゃよ。彼に盗ませるとしよう」

「ウソ臭いな」

「ハットリはハデな奴だから、きつと予告状を出して世間を騒がせるはず。そうすれば、指輪が、いや、指輪の持ち主がどこにいるか、すぐ分かるじゃろ」

「違つて。私が欲しいのは指輪だつて」

「ところで、依頼料の事じゃが…」

「エー。いたいけな子供から金取るの」

「当たり前じゃ」

「チツ」

美雪は舌打ちして、小さな財布を開け、逆さに振った。

小銭が机の上に転がった。

「私の全財産。誰にも内緒だからね」

「約束じゃ。きつと、見つかるよ」

「うん。絶対ね」

欲しい物は、指輪だと偽るその少女はおさげ髪を揺らし目一杯の輝きを残して、雪の降る商店街の中を駆けていった。

美雪はクリスマスの午後、病院で父親と兄そして、本当の母親に見守られ、眠るように旅立った。

しかし、その時すでに意識はなかった。

「しけた面してんじゃねーよ。新年だつちゅーに」

そう言って来たのは、テツの方だった。

冬休み、テツには一度も会うことはなかったが、その落ち込みようは、容易に想像できた。

月の裏であいましょう。

服部にはその空気が少々痛々しかった。

「ああ。そう言えば、美雪からの伝言があるんだけど。と言っても、お前宛かどうか分かんねーけど。なんかバースデープレゼントがどうとかって…」

そう言ってから、テツが何やら考え出した。

嫌な予感。

「そう言えば、服部。どうしてクリスマスの夜に、あそこにいたんだ。それに、オレの親父のこと知っていたような…」

適当な言い訳が思いつかず、服部は話を変えることにした。

「テツ、知っているか？クリスマスって、イエス・キリストが生まれた日って云うのは、嘘っぱちなんだってさ。本当は、太陽が生まれた日なんだって」

「太陽が？」

「冬至さ。太陽が一度死んで、蘇る日。キリストなんか生まれるずっと前から、その日は、みんなに祝われていたんだよ。太陽の復活を祝って」

暖かな日差しが、ゆっくりと二人を照らし始めた。

File 2：微睡みの少女（1）

「桜が咲き始めましたね」

老人ホームの裏庭にある数十本の桜の木が、うつすら色づき始めていた。

その桜の木が眺められるように備えられている一脚のベンチに二人の老人が並んで腰を下ろしている。

片方の白い顎髭を持つ老人の隣には、お婆さんが座り、咲き始めた桜を懐かしそうに眺めていた。

「昔、正太郎さんがね、私の絵を描いて下さいましたの。桜がいっぱい咲く中で」

隣に座る老人が、そう呟くお婆さんを振り返って見ると、コックリコックリと居眠りし始めていた。

「森本さん」

後ろから介護士が彼女を呼んでいる。

彼女はお婆さんを見つけると近づいてきた。

「また、こんな所で寝てしまつて。森本さん。森本さん。息子さんがいらつしやっていますよ」

その介護士の後に付いてきた50歳過ぎの男性は、母親の隣に座る老人に気がつくやと軽く会釈した。

お婆さんが介護士に付き添われ、中に入るのを見届けてから、男はその老人の隣に腰掛けた。

「参りますよ。時々、私の顔ですら忘れてしまつんですよ。父は親孝行する前に亡くしましたし、せめて母は、本当はこんな病院ではなく、家で面倒見てあげたいんですけどね。家内にも先立たれ、一人息子は定職にも就かずフラフラしているし、とても痴呆症の母の世話なんてできる状態じゃないんですよ」

「そうですか。それは大変ですね。ところで、“正太郎”というのは、6年前に亡くなつた絵画画家の池畑正太郎のことですか？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「母はまたその話をしていたんですか…。本当かどうかは分かりませんが、恋人同士だったとか。私自身、絵画などには全く興味が無いもので、知らなかったのですが、確かに池畑正太郎とは同郷ですよ。でも、どうなんでしょう。何しろ戦前の事ですし…。2年前ぐらいから呆けはじめたんですが、そのころからでしょうか…。急に自分がモデルをした絵を見たいと、言い出しましてね。それまでは、そんな話一度も聞いたことはなかったんですよ」

「ほほう」

「最初は、痴呆症の母の話だからあまり本気にはしてなかったのですが、あんまりしつこく言うモノですから、実は、少し池畑さんの作品を調べたんですよ。そうしたら、あつたんですよ。母の絵が」

「どうして、その絵がお母様を描いた絵だと分かったのですか？題名がお母様の名になっていたとか？」

「いえ…。実は、小さい頃、アレと同じ絵を押入の中で見たことがあるんですよ。その頃は何も知らなかったし、手入れもろくにしないような汚い袋に入っていて、そんな大事な物だとは思っていませんでしたよ。気にも止めてなかったもので、いつ家の押入から消えたのかも知りませんでした」

「その絵は今どこにあるのかご存じではないのですか？」

「何年か前に倒産した会社の持ち物だったらしくて、差し押さえられた後、どこに行ったか、さっぱり…。」

「見せてあげたいですね」

「そうですね。値段から言って、買い取るなんて不可能ですけど、少しだけでも見せてあげられれば、と思います」

「桜の中での美しい油絵らしいですね」

「桜、ですか？」

春の生暖かい風が桜の葉を揺らした。

「ふあゝ」

窓から入り込む心地よい風に服部は大きな欠伸をした。

「うっわー。この窓からの桜満開だぜ」

テツは嬉しそうに満開の桜を眺めて叫んだ。

服部は、無事高校に入学したと思ったら、中学三年間に続き、またもや長谷川鉄郎と同じクラスになってしまったのだ。

もちろん席は服部の目の前だ。

「服部、部活決めた？決めてないなら甲子園行こう」

「勝手に行つてよ。電車賃はチャンと払っとけよ。ちなみに、僕はもう決めているんだよ」

「どこだよ」

「決まつてんだろ。帰宅部だよ」

「やっぱり、仕事に差し障るからか？怪盗ハットリの」

発展のないやり取りに、またか、と頭を抱える服部の頭上で穏やかでない声がした。

「怪盗ハットリ？あのインチキ臭いドロボーのこと言っているの？
テツ」

話を割ってきたのは、瀬戸内理真。

テツの幼なじみだ。

入学式にテツと10年ぶりの再会を果たしたのだ。

「理真には関係ないだろ」

テツはどうやらこの女が苦手らしい。

パイとそっぽを向いた。

話を終わらすと言う賢明な方法にでたテツの努力を無視するように理真はテツに食らいついた。

「何よ。テツ。子供の時あんなに面倒見てあげたのに私に逆らう気？」

「面倒だと？オレがいつ、どこで理真に面倒見て貰ったか？」

「あげまくったわよ」

「いらぬモノを無理矢理押しつけたんだろーが。そんなモノ、熨斗つけてクール宅急便で返してやるよ」

月の裏であいましょう。

「いくらクール宅急便でも、10年前のモノは腐っていんじゃないの」

思わず口を挟んでしまった服部を、理真はじろりと睨んだ。

その眼光の鋭さに服部は引きながら、呟いた。

「こわ〜」

真剣に怖がっている素振りの服部を見下ろし理真は苦々しく言う。

「服部君って言ったわね。怪盗ハットリと名前が同じってだけでもむかつくわ」

「僕もあんなの名前はキライだね」

服部は小声で呟く。

思い出したくない、よく似た名前を思い出す。

「大体、怪盗ハットリに恨みでもあるの？」

「ないわよ」

きっぱり、理真は言い放った。

「ないけど、あの自信過剰な手口が気に入らない」
「はあ〜？」

服部は度の入っていない眼鏡を掛け直し、無意味に大胆不敵な態度で人を見下している理真をマジマジと見た。

かなり自己主張の激しいすっかりとした瞳に、今まで一度も色を抜かれたことのなさそうな健康的な黒髪が少し掛かっている。

「黙っていればかわいいのに」

正直な感想をボソツと呟いた服部の一言に、理真は頭に血を上らせ、教室から出ていった。

勿論、怒って。

「変わってないな。理真は」

「昔からああなのか？」

あんなヒステリックな小学生はかなり嫌かも。

「アイツ、いろいろ苦労したらしいからなあ」

テツの話では、彼女は母子家庭に育ち、小学生の頃、一家の大黒柱であった母親を亡くし、祖母に育てられていたらしい。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「それより明日マラソン大会だな」

嬉しそうにテツは言う。

そんなものを楽しみにしている奴は、コイツぐらいである。

服部は明日のマラソン大会にウンザリしながら、春の太陽の下で、思い切り咲いている桜を見て、今夜の獲物を思い出した。

桜に栄える美しい少女の絵だと老人は服部に教えた。

「まひる“微睡みの少女”か…」

File 2：微睡みの少女（2）

深夜、まだ新しいビルは閑散とし、『テナント募集中』の張り紙だけが目立っていた。

「今回の仕事は簡単だな」

服部は懐中電灯でノブを照らし、先がL字型の金具を突っ込んだ。事前に下調べは済んでいたが、新しいビルの割には単純な鍵で、セキュリティシステムさえ働いていない。

カチャン

「ロビンもいないしな」

にんまりと微笑み、開いたドアの奥へと広がる闇へと向かった。

目的地は5階、2年前に倒産した会社の社長が裏で経営している会社の事務所である。

「あれ？」

5階にさしかかったところで、人の気配だ。

誰もいないはずのその場所から聞こえる声は、一人や二人ではない。

そして…。

「…この臭いは、もしかして」

鼻をひくひくと動かし、嫌な事態が発生する予感が服部の中に過ぎる。

「きゃ〜」

予感はその一秒後に的中した。

女の悲鳴が聞こえたと思ったら、暗闇の向こうからこっちに向かって走ってくるではないか。

そして、女の後ろからは数人の男が追ってくる。

冗談。

月の裏であいましょう。

こつちに来るんじゃないよ。

しかし、服部は女が持つ長方形の板のようなものに気付いた。

「まさか」

微睡^{まごころみ}みの少女？

服部は何故か携帯してしまつハットリ君の面を取りだし、素早く顔を隠した。

「待て」

と、意味のない言葉を発しながら、男達が女を追ってきた。

「待つわけないでしょ。ばつかじゃないの」

聞き覚えのある声。

その声の主が服部に気付いた。

「怪盗ハットリ？何でこんな所に」

理真だ。

後ろから追いかけてきた男達も服部に気付く。

「かいとうはつとり〜？」

「まじかよ。超ウケる〜」

「ひゃ〜ははは。こりゃ、い〜や」

服部は冷めた目で男達を見た。

廊下中に広がる嫌な臭いに、服部は顔をしかめた。

マリファナだけではなく、覚せい剤の臭いも混ざっている。

「にん。にん。にんじゃーはつとりくん」

大声で笑う男達を服部は一瞥した。

「やりすぎだ。てめーら。程々にしろよ。」

半ば呆れながら無駄な事を言った。

今の此奴らに何を言っても無駄だ。

「なにかいった？はつとりくん。ボクたち、今、さいつこくに、はつぴ〜なの。おんなのこも、いるし〜。いっしょに決めちゃいた〜い」

一人の男は理真の腕をくいと引っ張った。

月の裏であいましょう。

その拍子に理真が抱えていた長方形のモノが落ちた。
「ねえ。ねえ。ハットリくくん。ボクたちのパーティー。邪魔してくれちゃってさっ」

言い終わらない内に男が服部に殴りかかってきた。

服部は難無くそれをかわし、後頭部に肘鉄をくらわした。

理真は、始まった殴り合いを見て呆然とした。

それはすぐに終わった。

床に倒れ込んだ五人の男達を見下ろしていた服部の目が、理真の落としたモノに移った。

「おゝい。どした？」

異変に気付いた仲間達が、近づいてくる。

服部は床のモノを拾い上げた。

「ちよつと。ソレ、私のだって」

我に返った理真が叫んだ。

「誰だ？お前等、何しているんだ？」

後から来た仲間が二人に気付く。

服部はガラリと廊下の窓を開いた。

仲間の内の一人が服部の持つ絵に目を止めた。

その目は、他の男達と明らかに違う。

「ソレ、オレの絵だよ」

取り返そうというのか、その男は走って服部に向かってくる。

「絵？んなモン。どーでもいいだろ。アキラ。」

ラリった男が、後ろから面倒臭そうに言う。

「よくなーよ」

アキラと呼ばれる二十歳ぐらいの男が、走り寄ってきた。

短い髪は透き通るほどの金髪、耳には三つのリングが光る。

外見は他の仲間と変わりないが、その目は正常である。

服部は窓の外を見る。

月の裏であいましょう。

「ハットリ？ここは5階よ。飛び降りる気じゃないでしょうね」

理真は叫んだ。

ニッコリ笑うハットリ君の面の下からはみ出る口元がにやりと笑う。

その瞬間。

「うっそ」

理真は窓から身を乗り出した。

服部は隣の3階立てのビルの屋上で理真に手を振っていた。

片手には絵を持っている。

「来いよ。受け止めてやる」

服部の自信満々の言葉に理真は考える間もなく、跳んでいた。

「おい！」

後ろでアキラの声が聞こえた。

ドサツ

「重い」

理真の体重を全身で受け止め、そのまま後ろに倒れ込んでしまったのだ。

「そんなに重いわけじゃないでしょ」

真っ赤になり理真は服部から離れた。

「絵、返してよ。ソレ、私のだから」

「さっきのおにいさんも同じ事言っていたよね」

「知らないわよ。そんなの。それないと、あたしんち、ホントに」

ホントに、路頭に迷っちゃうんだって

目がマジだ。

「ひとつだけ、聞いていい？これ、“微睡^{まどろみ}みの少女”？」

理真はコックリと頷いた。

冷たい風が、理真の長い髪を揺らした。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「ほらよ」

ビックリした顔で、理真は放り投げられた絵を受け取った。

「これ以上、嫌われたくないしな」

「え？」

「じゃあな」

「じゃあなつて、ここ3階…。また、跳びおり…」

もう、服部の姿は消えていた。

下の桜の木を、クッションに飛び降りたのだ。

「オレ、何やってるんだ…」

付けていたお面を取り外し、桜の木の下を、歩きながら服部はボソリと呟いた。

理真からはもう見えない。

「待ってくれ。ハットリだろ？頼む。返してくれ」

アキラだ。

後ろから息を切らしながら、訴えて来る。

しかし、もう服部は絵を持ってはいない。

「あの女のほうか？」

アキラが去ろうとした。

「ちよつと待てよ。あの絵はなんなんだよ」

「アンタが盗んでも仕方のない絵だよ。でも、オレにとっては大事なモノなんだ」

そう言つて、アキラは去って行った。

「どんないい女が描かれているんだか」

服部は写真でしかその絵を見ていない。

服部は、“微睡^{まひ}みの少女”を見たい衝動に駆られた。

File 2：微睡みの少女（3）

「ほほ。絵を取り損ねた」

「やっぱり、私がないとだめね」

古ぼけた4階建てビルの4階の一室。

ドアには『日本占い師協会本部』の文字。

「うるさい。取り返せばいいんだろ。ソレより、その“微睡みの少女”ってのは、なんなんだよ」

服部は、いつものように老人から大した説明を受けていない。

「ハットリ、知らないの？6年前に死んだ有名な画家が描いた絵よ。その画家の絵には1億円以上する絵もごろごろあるんだから。“微睡みの少女”は、彼がまだ売れていない頃の作品で、確か彼が死んでから発見されたのよ。で、2年前に盗難されているわ」

ロビンがざつと説明し、ズイと服部に詰め寄る。

「どうやって取り返すのよ。もしかして、誰に取られたかわかっているとか？」

「いや。別に…」

何となくごまかす服部である。

「偽物ですって？私はお姉ちゃんの言うとおりの所から盗ってきたのよ」

理真は持ってきた絵を見下ろした。

「どうせアンタが間違えたんでしょ」

姉も負けてはいない。

「絵里お姉さまも、理真お姉さまも落ち着いて下さい。ソレは偽物ではありません」

「ちよつと。麻美が本物じゃないって言ったんでしょ」

と、長女の絵里は、怒鳴る。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「本物ならいいじゃん」

と、次女の理真は、ムツとする。

「本物ではありません」

一番末の妹の麻美は落ち着いて言った。

「じゃあ、何なのよ」

絵里と理真はイライラして麻美を睨み付ける。

「偽物以前の問題です。そもそも絵が違うんです。ほらよく見て下さい」

麻美が本物の絵の写真と理真が盗ってきた絵を並べて説明し始めた。

「中央の少女は同じですが、背景が全然違います」

理真は盗ってきた絵と写真を見比べた。

「あ。ホントだ。本物は赤いや。紅葉かな」

「そして、こっちはピンク色です。絵のタッチもよく見ると違います」

自分の盗ってきた絵を眺め、理真は呟いた。

「このピンクって、桜みたい」

「で、本物はどこにあるのよ」

絵里はムツとしながら麻美に訊く。

「知りません。確かこの情報は絵里お姉さまのモノでしたね。どこで手に入れたんですか？このいい加減な情報」

「インターネット。おかしいと思ったわよ、あんなビルにこんな高価な絵があるなんて。でも、他に情報がなかったんだもん」

「まさか、私のマルチャン使ったんですか？」

マルチャンというのは、麻美愛用のパソコンの事らしい。

麻美は自分のパソコンを使われることを嫌がるのだ。

ほんの少し難しい顔でマルチャンを眺めている。

理真はそんな麻美を無視して絵里に突っかかる。

「そんないい加減な情報でいちいち私を動かさないでよ」

月の裏であいましょう。

「この仕事いくらになると思っているのよ。あの絵は1億よ」

「絵里お姉さま。それはバブル期だと仮定した場合の値段です。今はせいぜい二千万ぐらいですわ」

美術年鑑を見ながら、麻美がすかさず、訂正する。

「でも、池畑正太郎マニアには、1億の価値があるの」

「お姉ちゃん。こんな仕事やめようよ。ドロボーまでする羽目になるなんて」

理真は情けない声で言った。

絵里はきつと理真を睨み付けた。

「仕方ないでしょ。今夜までに私が霊視した場所にそれがないと、この仕事もだめになるの。私達姉妹が路頭に迷ってもいいの」

「でも、違う絵を置いたら、結局、偽霊能力者ってばれちゃうじゃないの」

「はあ〜。とりあえず、これで時間稼ぎするしかないわね」

絵里は、ピンクの中の幸せそうにの中で寝ぼけている少女を一睨みした。

古ぼけた4階建てのビルの3階の一室。

扉には『全国霊能力協会本部』とある。

4階の『日本占い師協会』も3階の『全国霊能力協会』も実在の団体とは関係がない。

川岸の桜並木が続く道を次々に、ジャージ姿の学生達が走り過ぎていく。

もちろんトップに行くのは長谷川鉄郎だ。

一方、服部はぼんやりと桜を眺めながら走っていた。

「どうしたものか。一度あげたものを返せというわけにはいかないし、そもそも理真に直接訊くわけにもなあ〜」

あの絵を取り戻したいが、でも、何故理真があの絵を欲しがったのか分からない。

大体理真は何者なのだろうか。

普通の女子高生が夜中に、泥棒まがいの事をするわけがない。

と、普通の男子高生ではない服部が呟く。

あつ。

理真だ。

男子より先にスタートしていた女子の中で、やる気なさそうに足を進めている。

服部はギクリとした。

不意に理真が振り返ったのだ。

「や、やあ」

理真のジツと服部を見る目に、どぎまぎしてしまいきまりの悪い挨拶をして、理真に近づいた。

「どうせ、テツが先頭だろうな。少しは陸上部の立場を考えてあげればいいのに」

服部は昨日の理真の胸の感触を思い出して、理真を見られないまま、無意味な会話を始めようとした。

それを無視し理真が呟く。

「声が似てる」

「え？」

「えつと。その、昨日の夜、何してた？」

「テツみたいなこと訊くなよ。昨日は家に居たよ。お父さんもお母さんも居たし…」

「お父さんにお母さん…。どんな人？」

「普通だよ。サラリーマンと主婦」

「普通だね。そうだよな。アンタが、…なわけないものね」

桜がさらさらと揺れる。

ピンクに染まった花びらが風に合わせてながれ、川面にそっと着

月の裏であいましょう。

陸し、今度は川の流れに身を任せる。

ゆっくりと理真の足が止まった。

「私、ハットリ、嫌い」

「僕のこと？」

理真は首を横に振り、ピンクに染まった川を見やった。

「ドロボーのほう。自信過剰で、きつと何でもできると思ってるのよ。世の中そんな甘くないのよ。早く捕まっちゃえばいいのよ」

「…どうして、そんな風に思うんだよ」

二人の横を次々に学生達を通り過ぎていく。

「昨日ね、ハットリにあったの。信じられる？予告状を出さない仕事もしてるんだよ。怪盗ハットリって。知らなかったなあ」

「嘘だろう…。模倣犯ってヤツじゃねえか」

服部の言葉は理真の耳には入っていない。

「どうして、あんなに自信過剰なんだろうね…」

勝ち気な瞳が翳る。

理真は怪盗ハットリと名前が同じ自分に何となく話しているだけかも知れない。

しかし、服部はハットリだ。

理真は知らない。

どうして、彼は自分に絵を譲ったのか。

そして、服部も知らない。

何故自分は理真に絵を譲ったのか。

今日の理真はいつもと何か違う。

「私ね、小さい頃、怖いものなんて何もなかったの。何でもできると思ってた。でも、大人になるにつれ、できるものと、できないものがあるって分かってきた。叶う夢と叶わない夢。必要なもの、不必要なもの。打算的になって、他人にも、自分自身にも受け入れられるよう、猫を被ったり、ピエロになったり」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「…そんな風に見えないよ。僕には理真の猫もピエロも見えない」
「嫌いだから。そんなの自分じゃないから」
「無理して強がってたいの？でも、猫も道化師も理真の一部だろ。気にする事なんて…」

「誰でもソウなんだって、自分を納得させるのも嫌い」

「『誰でも』じゃない。『自分が』だよ。猫と道化師で演技と嘘を続けるのも、やっぱり自分なんだよ。それでいいじゃないか」

ソウ思わないとやっていけない。

どうしてそんなこと訊くんだよ。

しかし、理真は服部の言葉を無視するように言葉を重ねる。

まるで服部がハットリであるように。

「だから、嫌い。ハットリは何でもできるって思ってる」

違う。

ソウじゃない。

私は、ハットリが嫌いなわけじゃない。

ただ、ハットリみたいに為れない自分が嫌い。

違う。

ソウじゃない。

オレは何でもできる訳じゃない。

淋しそうな理真の横顔に服部は耐えられなくなった。

「似合わない。全然。何シリアスになってんだよ」

ハツとしたように理真が服部を振り返る。

「ばっかみたい。どうして、こんな事アンタになんか話したんだろ
いつもの理真の憎まれ口にホツとした服部は、自分たちがマラソン大会の途中だったことを思い出した。

走りだそうとした服部を車のクラクションが止めた。

「は〜い」

月の裏であいましょう。

軽く陽気なその声。

真つ赤なフェラーリの窓からロビンが現れた。

「なんだよ。こんな所に来るなっていつも言ってるだろ」

慌ててロビンに近づく服部とモデル並の顔とプロポーションの女を見て、理真は言葉を失った。

ロビンが理真を見てクスツと笑った。

理真は、何故か自分が恥ずかしくなった。

「私、先行くから」

服部は溜息を一つ吐いて、走り去る理真を見た。

「何しに、来たんだよ」

「あら。お言葉ね。“微睡^{まじろみ}みの少女”の場所を教えに来たのに」

「あー！」

理真に探りを入れようと思っていたのに、思わぬ彼女の反応に、服部はその事をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「で、どこだ？」

「それが、すごく面白い話があるの」

ロビンの微笑みが、冴えるほどにろくな事にはならないと経験で知っている服部はゲンナリと桜を眺めた。

File 2：微睡みの少女（4）

その日の夜は昼間の天気が嘘のように風が吹き荒れた。

強い風の中、一台のフェラーリがすり抜けていく。

「フーン。それで、その信心深い池畑正太郎コレクターは、靈に導かれ“微睡みの少女”を手に入れた訳か」

革のシートに深くもたれかかり、服部は運転席のロビンを見た。

「今から訪ねるそのコレクターは盗品でも何でも見境なく池畑作品を買いあさってるんだけど、とうとう幽霊にまで救いを求めたって噂なの。ハットリが絵を盗られたって相手はその霊媒師じゃないかしら」

「昨日の今日だぜ。それに、霊媒師が絵を盗むのか？」

「インチキだからに決まっているでしょ」

面白そうにロビンが微笑んでいる。

「インチキ霊媒師か…」

服部は理真の霊媒師姿を想像してみた。

そして、さらにロビンは続けた。

「それから、昼間に予告状出しておいたから」
ぴくりと服部の頬が引きつる。

「でも、そのコレクターは警察には届けないわよ。“微睡みの少女”は、2年前に盗難されているもの。それを手に入れた事なんて警察には言えないでしょうね。まだ彼の手に渡ってないにしても何か情報が得られるでしょ」

「それで、ロビンが警察に予告状を出していたら、意味ないだろっ」

「出してないわ。だって、今回は私が刑事になるんだもん！」

ロビンの声が弾んだ。

「…まさか」

そして、

月の裏であいましょう。

「…ビンゴだ」

「何？何か言った？ハットリ」

「いや。何でもない」

服部はすっかり変装したロビンを、半ば諦めを持って見ながら、携帯電話にイヤホンと小型マイクをセットした。

これでロビンの会話が全て聞ける。

ロビンはチラリと腕時計を見てから、フェラーリのドアに手をかけた。

時計の針は7時を廻っている。

「それにしても、風が酷いわね。せつかくの桜、散っちゃうわ」

残念そうにロビンは呟き、車のドアを開ける。

生暖かい風が、びゅうと中に入り込み、服部の頬にぶつかった。

音を立てながら吹き荒れる強い風は、桜の木をへし折ろうとしている。

ピンク色の花びらが宙を激しく舞い踊る中、ロビンは頭を押さえ、カツラが飛ばぬ様に歩いた。

不意にロビンは玄関に先客を認め、足を止めた。

客は20歳過ぎの若い男だった。

「ちよつと、話だけでも聞いてくれよ。“まどろみ微睡みの少女”持ってんだろ。その絵は偽物だって」

「何のことだ。帰ってくれ」

男は門前払いを喰らわされ、ドアの外で舌打ちしてから門から出ていった。

ロビンは男を見送ってから、ベルを押した。

「夜分失礼します。お宅に怪盗ハットリから予告状が届いたとの情報が入りましたね」

ロビンはコレクターの男に懐から黒い手帳を見せて続けた。

「警視庁の長谷川と申します」

「何も鬼平に化けなくてもいいのにな」

月の裏であいましょう。

服部はイヤホンから聞こえる鬼平そのものの声に溜息を吐き、闇に舞う桜を眺めながら耳に神経を集中させた。

『怪盗ハットリですか？さあ、知りませんね』

コレクターはとぼけているのか、本当に知らないのか…

『困りましたね。今夜、あなたの家に池畑正太郎の“微睡みの少女”を怪盗ハットリが盗みに来ると言うのはデマだったと言うわけですか』

わざとらしいロビン、いや鬼平の声。

『ソウみたいですね。“微睡みの少女”は2年前に会社の倒産のどさくさに紛れて盗難されたと聞いておりますし』

この男は何かを知っている。

これは、しらばっくれる中年の男の声だ。

『実はある霊媒師からの証言がありましたね』
嘘である。

しかし、その言葉にコレクターが動揺したように言葉を詰まらせている様子がイヤホンからでも充分伝わる。

『いや、あの、その、ですね。…私は騙されていたんです。本当です。偽物だったんですよ。偽物っていうか…。偽物とも言えないようなぜんぜん違う絵でした。はあく。だから、怪盗ハットリに盗まれるモノなんて何もありませんよ』

これは本当らしいな。

嘘はついてない。

この男は、それほどの度胸はない。

「偽物か…」

振り出しに戻ったな。

服部はつぶやいた。

『本当ですか？』

『はい。今朝の粗大ゴミの日に捨てましたよ』

『…らしいわよ。ハットリ、聞いてる？』

月の裏であいましょう。

ロビンの声が、耳をついた。

「ああ。聞いてるよ……。あっ」

向かい風を受けながら車の横を通り過ぎる男に服部の目が止まった。

「アキラ？」

昨日の夜に会った奴だ。

確かアキラもあの絵を欲しがっていたな。

何か知っているのでは？

服部は急いでドアを開けた。

強い風に顔をしかめつつアキラを呼び止めた。

「ハットリ？」

思わぬ人物の登場にアキラは驚いている。

「アキラって言ったっけ？ “微睡^{まどろみ}みの少女” を捜しに来たのか？」

「ああ……」

風にあキラの声は吹き飛び、服部の耳には届かなかったが、その表情で答えは伝わった。

「オレには、どうしてもアンタが、絵画鑑賞なんて高尚な趣味を持っているようには見えないけど、そんなイイ女なのか？ その“微睡^{まどろみ}みの少女” ってのは」

眼に砂が入ったのかアキラは少し目をこすってから、風に向かった。言った。

「ハットリって思ったより、全然子供なんだな。子供のくせに随分と態度でかいな」

笑おうとして失敗したアキラの表情が風になぶられる。

言葉自身が服部に届くトコを拒否したのだろうか。

アキラの声は風の鳴く声に遮られ服部には届かない。

「え？ 聞こえない」

アキラは風にいらついたように吐くように言った。

「…好きなように何でもできるアンタには俺の気持ちなんか分かんねーよ」

アキラは言葉を投げつけていた。

「へ?...」

なんでもできる...?

ダブって見えるのは、昼間の理真の顔。

「俺なんかどうせ、たいして頭も良くなくて、三流の大学中退して、何がやりたいわけでもなくて、中途半端で。親父だっしてしがないサラーマンのくせに世間体ばかり気にして...」

昼間といい、今といい。

オレはお子様お悩み相談室か？

何故、コイツらはくだらないゴミみたいな愚痴をオレに投げつける。

一際強い風がハットリの髪をグシャグシャにかき乱す。

命を持った桜は昼間の優しさを忘れたように乱れる。

だから、何を言いたい？

だから、何を苛立っている？

「だから、あの絵は、何なんだよ？」

あの絵が、アキラを苛立たせているのか。

「あの絵の少女はお祖母ちゃんなんだ」

「お祖母さんのためなのか？」

嵐は一向に弱まる様子を見せない。

その中、アキラは弱弱しく首をひねる。

「さあ...。よく分からない。ただ、お祖母ちゃんがぼけたのは俺のせいだから。本当はお祖母ちゃんのこと、大嫌いだったんだ。6年前...、呆ける前のお祖母ちゃんは、いつも、母さんと喧嘩ばかりしていたよ。母さんが、亡くなるまでね。それから、オレのせいでボケ始めて...」

まとまらないアキラの話の黙って聞いていた服部に気付いて、アキラもまた黙った。

「オレ、何言っているんだ？とにかく、あの絵を取り戻さないと...」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「それで、そのコレクターの家に行ったのか？」

「門前払いだよ。何か知ってると思っただけだな」

「偽物と言えないような粗末な絵画だったって話だ」

「え？じゃあ、やっぱり奴が持っていたんだ。で、まだ奴の所か？」
アキラに生気が戻った。

「捨てたってさ。今朝の粗大ゴミの日に」

「捨てた…」

一瞬、落胆した表情を見せたが、次には強い意志がアキラの顔に表れた。

「ケジメだもんな。俺の」

桜は人を酔わせるのだろうか？

しかし、アキラはスッキリした顔で服部に笑いかける。

熱しやすく覚めやすいタイプらしい。

「愚痴って悪かったな。安心しろよ。アンタの事は誰にも言わねえから」

昨夜も今夜も素顔を見られているのだ。

「サンキュー。アキラも負けんなよ」

桜吹雪の中、勢いよく走り出したアキラの後ろ姿を見送った。

何に勝つと言うのだろうか？

自分の吐いた台詞にハットリは嗤った。

「どうして、偽物の絵にあんな一生懸命になるんだ…」

容赦なく風は服部に吹き付ける。

大量の桜は闇の中まるで雪の様に降り続く。

「まるで、雪だな」

雪…

あの夜も、こんな風に雪が降っていた。

最高のバースデープレゼントだよ。

美雪の笑顔。

月の裏であいましょう。

偽物が本物なのじゃよ。

それは、じいさんの言葉…

「偽物が本物？」

まさか、また？

服部は目をつむり、顔に手を当てた。

「あのジジイ。いつも言葉が足りないんだよ」

服部は風を全身に受けて、空を仰いだ。

桜の花弁はまるで命を持っているように激しく舞う。

服部は、大きく深呼吸をし、マイクでロビンに呼びかけた。

「ロビン。聞こえるか？オレ達が追っているのは、おそらく、その偽物らしい」

File 2：微睡みの少女（5）

調度コレクターの家の玄関の扉を閉めたロビンは足を止めた。
ロビンも小型のイヤホンを付けている。

「どういうこと？」

小声で訊く。

『そう言うことだよ』

そうだ、あのじいさんは何も本物だと言っていない。

あのビルの場所を教え、桜に映える美しい少女の絵と言っていただけ。

ガタン

玄関の扉が開く音にロビンは振り返った。

先ほどお茶を出してくれた中年の家政婦が顔を覗かせていた。

「あの〜。刑事さんは絵をお探しになっているとか」

「はい。そうですか」

「今朝、旦那様に絵を捨てるように、頼まれたのですが、その絵の事でしょうか？」

「何かご存じなのですか」

「えっと、あの、私の弟が絵画教室に通うほど、絵が好きで、それで捨てないで今朝そのまま弟にあげたのですよ」

家政婦はおずおすと答えた。

「弟さんは、今どこにいらっしやいます？」

「おい。ねえぞ、どこにも」

服部は小型マイクに向かってロビンに話しかける。

家政婦の弟のアトリエはピカソとゴッホとルノワールと手塚治虫が混ざったような絵が無秩序に置かれていた。

『今、家政婦の弟に確かめたわ』

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「二手に分かれ、ロビンは弟の居場所を捜していた。

家政婦から聞いた自宅には、絵も本人も見あたらなかったのだ。

「で、どこだ？」

マイクの向こうのロビンに尋ねる。

『絵画教室の先生に渡したらいいわ。とりあえず、服部はその絵画教室に向かつて』

「ずいぶん忙しい“微睡みの少女”だな」

服部はロビンから借りたバイクに跨ると、グツと右手に力を込めた。

ロビンの愛車SRはさらに激しさを増す嵐の中、走る。

ロビンが絵画教室の先生を見つけたのは、午後9時近かった。

居酒屋から出てきたばかりのその男は、ほろ酔い気分で答えた。

「絵？もほろみのほーほ？」

「“微睡みの少女”です」

「“まあ、トロ身の処女”？」

「“微睡みの少女”です」

鬼平の変装したままのロビンは辛抱強く繰り返した。

「あー。池畑正太郎氏の？ヒック。彼の絵には愛があります。力強い筆のタッチから漲る生命力。ヒック。そして、繊細な色使いからは、対象物への愛情が感じられ……」

『おい。ロビン。いつまで酔っぱらいの戯言聴いているんだよ』

イヤホンから服部の声が響く。

目の前では酔っぱらいがいまだに池畑正太郎の絵の素晴らしさを説いている。絵画教室は空振りだったのだ。

手がかりはこの酔っぱらいだけ。

ロビンは溜息を吐いて質問を繰り返した。

「絵画教室の生徒さんから絵を頂きませんでしたか。“微睡みの少女”によく似た絵を」

「“アドレナリンのホモ”？はて？知りませんな。ヒック」

『だめだ。こりゃ…』

服部の溜息がイヤホンから聞こえる。

「ですから、今朝…」

「いや〜、まじろみ“微睡みの少女”は、すんばらしい〜、ヒック…」

突然、目を輝かせ話し始めた酔っ払いに鬼平姿のロビンは目を点にする。

「え？ご存じですか？まじろみ“微睡みの少女”を…」

『さすが酔っぱらい…。話を聞いてない』

服部はイヤホンから、酒の臭いがしたように顔をしかめた。

「ヒック…で、…アドレナリンをお探しですか？ヒック」

服部はバイクに跨り、嵐にさらされながらこの間抜けな会話に耳を傾けなければならなかった。

「だからですね……」

「そう。そう。今朝、生徒さんからもらったまじろみ“微睡みの少女”のオマーージュもすんばらしかった…」

「オマーージュ！」

『オマーージュ！』

二人は声をそろえた。

作品へ敬意をこめたパクリ作品。それが、オマーージュだ。

ロビンはようやくたどり着いた言葉に続いてせかすように尋ねた。

「今、その絵は？」

「さつきから、何を言っているんですか。長谷川さん。…ヒック。

今日は非番でしょう。午後の絵画教室の時、気に入ったから欲しいつて。…ヒック。あなたにあげたでしょう」

嵐はさらに激しさを増す。

「厳しい冗談だ。あの鬼平が絵画教室だって？しかも、奴が絵を持っているとは…。あの絵画教室の先生が酔っ払いで助かったぜ。…

…ロビン、お前さつきから、何書いているんだ？」

月の裏であいましょう。

すっかり美女に戻ったロビンは車を止め、何かを書いていた。服部は窓の外から運転席のロビンに近づき、ソレを見た。

“DEAR 鬼平ちゃん

午前零時に“微睡みの少女”を
まじろみ
頂きに参ります。

FROM 怪盗ハットリ”

「できた」

ニッコリとロビンは笑った。

服部は頭を抱えた。

「ハットリ君の出番作ってあげたの」

ロビンはウインクした。無駄にウインクが似合うロビンである。

ファン！ファン！ファン！

パトカーが続々と長谷川家に集合し始め、慌ただしく警官達が動き回る。

「はっ。はっ。はっ。ハットリめ。年貢の納め時だ。まさか我が家にやって来るとは、その度胸は褒めてやる」

本物の鬼平は興奮を抑えきれず、大声で叫んでいた。

時計は午後11時半を示している。

「今日は非番だったのに、大変ですね」

隣にいた婦人警官が、長谷川に同情したがその言葉は無意味だった。

長谷川宣雄の顔に同情するべき物は全くない。

あるのは『喜び』の表情のみである。

そして、もう一人。

「親父。ついに怪盗ハットリに会えるんだな。早く来い。オレが捕まえてやる」

テツである。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

二人はこの嵐の中、玄関の前で待ちかまえていた。ソレを見て、部下達が囁き合っていた。

「なにもこの嵐の中、来なくてもいいのに」

「そうだよな。しかも、こんなに突然……」

「長谷川警部は嬉しそうだな」

「ああ……」

「あつ。あの婦人警官、めっちゃ好み」

「おお。ミニスカポリ〜ス！」

嵐の中、婦人警官のミニスカートに思わず目が行ってしまつ。

婦人警官は視線に気付きニツコリと微笑んだ。

「今度は看護婦にでもなるうかしら」

ボソリと呟いた。

『何言つてんだよ。ロビン。早く絵を探せよ』

耳のイヤホンに響く服部の声に、ロビンは自分の仕事を思い出した。

近くでは長谷川親子が燃えている。

「ところで、親父、家に服部から盗まれるような物なんかあったか」

「おい。息子。バカにするな。我が長谷川家は代々トウゾクアラタ

メガタをだな」

「分かつたよ」

テツは早々に父親の長くなりそうな話を切り上げた。

服部はロビンから借りたYAMAHA、SR400のエンジンを止め、連絡を待った。

「理真に絵を譲ったせいであつちこつち動き回されたぜ。やっぱり、ドロボー的に譲るつてのは、なしだな！まあ、これで最後にして貰うぜ」

ハットリ君の面を後ろポケットから取り出し呟く。

「どんないい女だが知らないが、これ以上男換えるなよ。尻シビ軽女」

「警部。後5分で、12時ですわね」
11時55分。

婦人警官に化けたロビンは長谷川に近づいた。

「ハットリ。今日こそ貴様の首根っこを捕まえてやる」

「そ、そうですわね」

「ところで、君」

不意に長谷川が真剣な目でロビンを見つめた。

ロビンはギクリとした。

「何でしょう？」

「“微睡みの少女”とは何かな？」

「は？」

時計の針は、午後零時を差そうとしていた。

「どづいことだ？」

長谷川家の屋根の上でロビンからの連絡を待っていた服部は、イヤホンから聞こえるロビン達の会話にピクリと頬を引きつらせる。

『ああ。あの絵ならここにはない』

事も無げに長谷川は言う。

怪盗ハットリの登場に我を忘れ、肝心の事は忘れていたらしい。

『絵画教室の帰り美雪の墓参りに行ったんだが、その寺の住職が
気にいったのでお譲りした。いろいろ世話になっている方だからな』
これ以上男を惑わずに、ゆっくり寝てな。

服部は跳んだ。

目的地変更。

美雪の墓のある寺。

スツと路地に下りる。

「ハットリ？」

聞き覚えのある声に振り向くと、風に髪をなびかせて理真が息を切らして立っていた。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「私、あの。どうしても知りたくて。どうしても、あの時、ハットリは私に絵をくれたの……」

不意の突風が服部の面をさらった。
ハットリ君の笑みが風に舞う。

時刻は午前零時を差した。

一人の警官の目に服部のお面が映った。

「ハットリ発見しました！」

服部の顔は後ろから来たパトカーのライトで逆光になり、理真の眼にはシルエットのみがはっきりとした。

「分かんねえよ」

服部はバイクに跨り、フルフェイスのヘルメットを被りながら答えた。

「でも、分かんなくていいんじゃない？オレ達ってカッコイイ感じしね〜か？」

「…カッコイイ？」

「なかなかオレ達みたいな高校生いないぜ」

オレ達って、私とハットリのコトで。

ってコトは、私もカッコイイってコト？

理真は不思議な気分になった。

スツキリとモヤモヤが晴れて、ウキウキとワクワクとドキドキがいつペンに來たような、

だから、理真は訊いた。

「また逢えるよね」

「たぶんねっ……」

右足で地面を蹴り、アクセルをグッと回す。

単気筒のSRはものすごい呻りをあげ、パトカーに向かい走った。服部は嘲るように何台ものパトカーの間をすり抜けて行く。

慌てふためく警官達を面白そうに理真は眺めた。

月の裏であいましょう。

「絶対、会える……」
根拠のない確信が、
理真に確実な自信を与える。

File 2：微睡みの少女（完）

パトカーのサイレンを耳にしながら、服部はアクセルを全開にした。

SRは凄まじい排気音の呻り上げ、軽々と車と車の間をすり抜けていく。

「ハットリは桜林寺だ」

長谷川は叫んだ。

“微睡みの少女”は今日の夕刻に住職に譲ったのだ。

ハットリがどういふ経緯でソレを知ったかは不明だが、ハットリが次に行くのはそこしかない。

人影のない寺から叩き付ける強い風の呻りに単車の排気音が殴り込みをかける。

どうやら警官はまだのようだ。

服部はエンジンを止め一気に寺の長い階段を駆け上がった。

強い風に寺中の戸板が軋んでいる。

「起きろ。じじい」

服部は寺の住職の枕元で息を切らしながらでっぴりと太った坊主を叩き起こした。

ビクツと飛び起きた住職は肉を揺らしながらあちこち見渡し、服部を見つけた。

「ひえ！ド、ド、ド、ドロボー。い、い、い、命だけは、た、た、助けて下さい。ナマンドブ。ナマンドブ」

「テメイの命なんかいらねえよ。絵だ。今日、長谷川から貰った絵を出せ」

住職の襟首を掴んで、思わず服部は凄む。

「これで最後にしてもらうぜ」

住職は、障子からの薄い明かりにシルエットで見える見知らぬ訪

月の裏であいましょう。

問者に脂汗をかきながら声を絞り出した。

「ここにはない……」

ピクリと頬が引きつる。

時刻はすでに深夜零時から15分を回っている。

風の鳴く声とガタガタ騒ぐ障子の音との隙間に、パトカーのサイレンの音を服部の鼓膜が捉えた。

「どこだ？」

「人にやった」

「どいつに？」

服部は、早口で質問をぶつけた。

「エー誰だったかな？……ああ。そう言えば……」

「誰だ？」

「知らない」

「は？」

「知らないんです。句会で知り合ってたまにお茶を飲むようになって。でも、名前聞いてなくて。本当です。本当です」

終わった。

確実に服部はソウ思った。

何人もの男の手に渡りついに行方知れずか。

「そういえば……」

住職は不意に何かを思いだした様に考え込んだ。

服部は期待せずに答えを待った。

「水戸黄門……」

「水戸黄門だと??」

「そう、昔の少し痩せた水戸黄門に似ていて……」

水戸黄門……か。

がくんと肩を落とした服部は、不意にハツとして住職をもう一度見てから言った。

「それって、痩せて、白髪の顎鬚を持ったジジイってことか？」

住職はこくんと頷いた。

月の裏であいましょう。

「あのくそジジイ。俺に無駄足踏ませやがって」

中央防波堤最終埋立処分場。

通称、夢の島。

遠い昔、夢の中にいたその住人達は、今はガラクタと呼ばれる代物になっていた。

強い風の泣き声を聞きながらじっと耐えている彼らの上に、一人の男が立っていた。

「ない。ない。ない。どこにあるんだ。粗大ゴミは全部ここに来るんじゃないのか」

アキラは服部に会ってから、ずっとここで一つの物を捜し続けていた。

「バカみたいだ。こんな事をして、見付かるわけない。何やってんだよ。…俺。見付かったとしてもソレでお祖母ちゃんが元に戻る訳でも、俺の罪が消えるわけがないのに…」

一人、座り込んで呟いたアキラの目の前に、突然“微睡みの少女”が現れた。

「これは、あなたの描いた絵ですね」

“微睡みの少女”の絵を見せるように立つ人物をアキラは見上げた。

白い顎髭が印象的なその老人は優しく淋しい瞳でアキラを見下げた。

「6年前、あなたがお祖母さんから盗んだ本物の“微睡みの少女”の代わりに描いた絵ですね」

冷たい海の風がアキラの頬にぶつかり、髪を僅かに揺らす。

「知らなかったんだ。あの絵が、そんな有名な人の描いた絵だったなんて…、だから質屋では1万円にもならなかった。その後すぐテレビで知った。その少し前に死んだ画家の作品で、もの凄い値段だったな」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

ポツリ、ポツリとアキラは自分の描いた“微睡みの少女”まじろみを見つめながら喋った。

「高校生の時、画家になりたかったんだ。でも、父親に相手にもされなかった。結局、それで簡単に諦められたんだ。それ程の強い夢でもなかったんだろう」

「でも、これは素晴らしい絵ですよ。これを見た何人もの人々が本物ではないと知りながら欲しがりました。おかげで随分手間取りました」

「俺も2年かかった。自分の絵を見つけるのに。持ち主の息子に近づき、絵を取り戻すため、息子のドラッグパーティーにまで参加し、もう少しのところでハットリに持ってかれた」

「それは苦勞した様だね」

老人はゆっくり答えた。

「本物の絵が無くなった頃から、ばあちゃん元気なくなつて、俺の事、責めなかつたけど、責任感じて、絵を取り戻したかつたけど、金もないし、それでできるだけ思い出して描いたんだ。その時、ばあちゃん、すごく喜んでくれて。でも、2年前、親父の奴、何も知らずに誰かにやつたんだ。アイツはどうせ本当に家族の事なんか心配してないからな。大事なモノが見えてない。それから、だから、…ばあちゃんが呆けたの。…結局、それって、俺のせいだろ？」

「違います。あなたのせいではありません。丁度その頃、あなたのお母様もお亡くなりになられておりますね」

「…そうだな。すぐ仲悪かつたから…、どうなのかな…？」

「お祖母さんは、若い頃の正太郎氏との時間より遙かに長い時間をあなたのお母様やアキラさんと過ごしておられます」

「それって…？」

「おばあさんにとつて、池畑氏が描いた絵、そして、アナタが描いた絵。どちらが、本物なのでしょうが…」

「…そうか。だから本物より、俺の絵だったんだ。間違つて描いた桜が背景の、…この絵なんだ」

月の裏であいましょう。

アキラの瞳に桜の中で幸せそうに微睡む少女が写っている。

「アキラさん。三番瀬と言う名の干潟をご存じですか？人々に翻弄された浅瀬です。ゴミの廃棄場として次々と埋め立てられました。

美しい自然をガラクタで潰し、三番瀬の自然は永遠に夢の住人になる。しかし、人々は夢の島のように潰した夢の住人を再び起こそうとする。必死で夢にしない夢を見る。愚かですが、美しい夢だとは思いませんか？」

「夢にしない夢？」

「彼らの夢は眠っていては、見られない夢です」

「起きていなければ、みられない夢……」

アキラは自分で描いた微睡み続ける少女に、昔見た自分の夢を見る。

「……でも、眠っているからこそ美しい夢が見られるのかもしれないが……」

老人は深い皺を眉間によせる。少しだけ目をつむって、再び優しい目を開いた。

「ところで、アキラさんは本物がどこにあるか知っているんですか？」

東の空がうつすらと白み始め、アキラは凶暴に吹き付けていた風が、いつの間にか穏やかな優しさを含みつつあるように感じた。

「2年前からずっと老人ホームのばあちゃんが寝てるベッドの側に飾られているよ」

ガラクタ達が徐々に色づき始め、夢の島にゆっくりと穏やかな朝が訪れようとしていた。

「昨日の風で桜全部散っちゃったわねえ」

ロビンがビルの外に投げていた視線を部屋に戻す。

月の裏であいましょう。

視線の先で服部が事務所のパソコンを何やら弄っている。服部の指の速さに感心しつつ、画面を肩越しに覗く。

「何やってるの？って、コレ、ってウイルス？」

「そ。微睡眠まいんみの少女を起こさないように例の霊媒師さんに頼もうとね」

かなりの速さで画面を流れていく英数字にロビンは顔を顰めた。

「…ハットリって、結構イヤな奴？」

「そう？イエローカードみたいなモンだから、お手柔らかなのを選んで上げようと思っっているんだけど」

「このウイルスメールがお手柔らか？」

霊媒師のアクセス制限つきのホームページをなんとなく突き止めた服部であったが、それ以上の手がかりはつかめなかった。

理真と霊媒師の関係もはつきりしていない。

「ちよつと、これに手を加えて…」

ホームページを眺めながら、キーを打ち続ける服部はやけに楽しそうだった。

それをそばで見ていたロビンは、コイツだけは敵には回したくないと思いつながら、呟いた。

「こついつ、嫌がらせて地球の裏にいても関係ないのよね」

その真下。

「あら、池畑正太郎に関するメールが届いているわ」

と、絵里が麻美の愛用パソコンであるマルチャンを触ろうとする。調度部屋に入ってきた麻美が、すかさず画面を覗き、サツと顔色を変える。

「お姉さま。止めて…」
が、遅い。

メールは開かれてしまった。

麻美が頭を抱える。

月の裏であいましょう。

「何？どうしたの？」

「ウイルスボム…」

何やらマルチャンが楽しげにサイレンを鳴らし始め、画面の中に救急車が走り始める。

そして、次はアメリカ版正義のヒーローが画面を走りまくる。

絵里はコンピューターウイルスが忍ばせてあったメールを開いたのだ。

「お姉さまが不用意にマルチャンで情報を集めようとするからです。池畑正太郎のファイルで送ってきたと言うことは、こっちにこれ以上、関わるな、と警告しているんでしょう。きつと、お姉さまが見境なく池畑正太郎の情報を集めたので、こっちの情報をつかんだのでしょう」

「誰なのよ。相手は」

「こんなコトするのに、無防備に名前を教えてくれるわけありません。このネット社会では、世界の裏側からでも攻撃できます。きつと、相手はプロでしょう。たとえ、私でも相手を突き止めるなんて…」

「あ。怪盗ハットリ…?」

後ろからいつの間にか画面を覗いていた理真が呟いた。

「何言っているんですか？どうして、怪盗ハットリがこんなコト…」

ピーと煩い警告音の後に現れた文字に3人は呆気に取られた。

『怪盗ハットリ参上』

そして、画面に青い忍者衣装を纏ったアニメチックな忍者が現れ、立てた人差し指をもう片方の手で握るといってお決まりの忍者のポーズを取る。

そして、

『忍法隠れ身の術！』

と、画面に出ると共に煙を貼ったように画面が潰れていった。

マルチャンに入っている情報が破壊されていく。

麻美は、なすすべもなく大きな溜息をついた。

絵里は、今回の失敗のフォローを計算し、次の作戦を考えている。理真は、嬉しそうに画面を眺めた。

木漏れ日の光る老人ホームの庭で、お婆さんは、幸せそうに微笑えんでいた。

「その絵はどうなさったんですか？」

後ろから介護士が話しかけた。

「孫が持ってきてくれたの。私の宝物ですよ」

「まあ。綺麗な絵ですね」

お婆さんは目を細めて頷く。

穏やかな風が、緑色に輝く桜の葉をさらさらと揺らし、微かに介護士の髪を靡かせた。

そして、お婆さんの手の中では、満開の桜に囲まれ、幸せそうに一人の少女がいつまでも微まじろ睡すいんでいる。

月の裏であいましょう。

File 3：永遠の瞳（1）

印象的な瞳だった。

その瞳は褪せることなく、今でも、そしてこれからも永遠に輝くだろう。

一年前の夏。

楽しそうに走り行く子供達、買い物カゴをぶら下げ主婦達の長話は尽きない。

その商店街の遙か上空は真っ青な空が広がっている。

町を歩く人々の汗は、蝉の声にさらに暑苦しさを増す。

「見てよ」

その強気な声に、商店街の片隅にゆったりと腰を下ろしていた老人の手相見は、涼しげな顔を上げた。

そこには一人の女子校生が、右手を差し出している。

日サロに焼けた女子校生は、近くの工業高校の限界まで短くした制服のスカートを翻し、真夏には蒸れそうなルーズソックスをだぶつかせている。

肩より少し長い髪は先に行くほど茶色く日に輝き、根元からはオリジナルの黒い髪が伸びていた。

まさに“女子校生”と言う寿命三年の生き物だ。

老人は使い古された虫眼鏡を取りだし、安物のアクセサリで飾られた手首から伸びる掌をじっくりと見た。

「ほほう。これは随分長い生命線ですな」

ピクリとその小指が動いた。

手相見はニッコリと微笑みその手の持ち主を見上げ、言葉を続けた。

「ですが、お嬢さんの命は後一年です。」

月の裏であいましょう。

女子校生は、ニツコリと微笑む手相見を暫くじつと見てから、その綺麗な瞳を輝かせた。

「気に入った。じいさん。どこで見て貰っても、この生命線を見て長生きするとぬかしやがる。さっきの女霊媒師なんか百歳まで生きると言い切りやがった」

白い顎髭を持つ老人の手相見はクスツと笑って言った。

「長生きしますよ。その綺麗な瞳だけは」

思い出すのは、子供達のはしゃぐ声。

おばさん達の長話。

蝉の泣き声。

そして、その印象的な瞳。

「目？」

服部はぱちくりと瞬きを繰り返した。

老人はいつもの笑顔を崩さない。

「目なんて殺さないと盗めないだろ？冗談きついで」

「何かあるのでしょうか」

ソファに座っていたロビンがたばこに火を付け、ゆっくりと吸い始めた。

「じいさんは、いつも説明が足りないんだよ」

「それはお前自身が見つけるのじゃ」

「はあ？意味わかんねえ？」

窓の外には、真っ青な空が広がっている。

「きゃ〜。テツ君だ」

黄色い声の女の子達がテツを見て騒いだ。

テツは嬉しそうに手を振った。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「すごいね。テツ。さすがにあの弱小野球チームを準決勝まで一人で持っていっただけあるなあ〜」

服部は今や学校中の有名人になったテツを感心しながら眺めた。
「すごくねえよ。甲子園いけなかったからな」

テツは残念そうだったが、あの万年一回戦負けチームをあそこまで勝たせただけでもすごいことだ。

服部はつくづくテツの根性に頭が下がる思いがした。

「それにしても、服部、英語の補習だった？」

「期末テスト赤点だった…」

英語の答案用紙を眺める服部は、深い溜息を漏らしていた。

テストはいつも平均点狙いで回答してきたが、期末テストの前日に仕事をしていたため迂闊にも、テストの途中、居眠りをしてしまったのだ。

「ついてないな」

そして、もう一人。

「理真お姉さま。現在完了と過去完了とは違います。現在完了は現在も続く結果、経験、継続を表しています。過去を基準として…」

「あ〜。もういいわよ。麻美。分かんないものは分かんないの」

理真は参考書を忌々しげに閉じた。

「補習は決まっているんだもん。もう手遅れだよ」

「全く理真は夏休みだというのに！アンタには仕事があるのよ。呑気に補習なんてしている場合じゃないのよ！」

手前にある書類をてきぱきと片づけながら、絵里は理真に言った。

麻美は小さな首を傾げ、理真を見遣る。

「でも、どうして理真お姉さまは他の教科は決して悪くないのに、英語だけはできないのかしら」

「英語って理論的なようで、そうでなくて。記憶力も必要だし。例外はあるし」

「でも、私は、英語は日本語よりも遙かに簡単な言語だと思います

わ

嫌味の欠片もない表情で麻美は言っただけ、理真は唸る。

「さてと。私は仕事に行つて来るから、麻美は続けて栗原の調査を続けて頂戴ね」

黒装束に身を包んだ絵里の言葉に、麻美は渋い顔をした。

服部にマルチャンを破壊されて以来、麻美は外に出向く仕事を任されるが多くなった。

麻美は外が苦手だ。

霊媒師の仕事は、主に顧客先に出向く出張という形をとっている。

お客は、ほとんどが常連客である。

事務所を出た絵里はエレベーターのボタンを押した。

ガーガガタン

さび付いたエレベーターはそれでも、ちゃんと開いた。

「あら」

上から下りてきたエレベーターには先客がいた。

「こんにちは。占い師さん」

絵里はにこやかに挨拶をし、エレベーターに乗り込んだ。

相手もにこやかに答える。

「これは、これは三階の霊媒師さんではありませんか。最近は商売繁盛らしいですね。かなりの腕前との噂だ」

「いえ。そんな」

「そんな謙遜なさらなくても。客はほとんどが上客の固定客。完全予約制の完璧な仕事」

相手の言葉に、黒い衣装の隙間から絵里は意味深に問う。

「何が言いたいのかしら」

「いえ、いえ。いい仕事だと。本当に素晴らしいですよ。完璧なりサーチなくてはああは行きませんから。たまにミスられるのも、ご愛敬ですな。ほ、ほ、ほ」

「あら。お宅ほどではありませんわ」

月の裏であいましょう。

真夏に全身を黒で身を包んでいる絵里は不快な笑みを漏らした。

チン

電子レンジのような音を立ててエレベーターがぐらりと止まる。湿っぽいビルの中から昼間の強い日差しへと移行した霊媒師は、軽く会釈し先へと急いだ。

年老いた漆黒の瞳は、その後ろ姿を僅かに追った。それは、偶然だった。

月の裏であいましょう。

File 3：永遠の瞳（2）

みくん。みくん。みくん。

「太一。夏休みだからって、いつまで寝ているのよ。補習があるんでしょ」

母親の声に目が覚めた服部は仕事を思い出した。
仕事と言っても下調べのためだ。

服部が向かったのは学校ではなく、病院だ。

その病院には緑が豊富に茂り、緑の中の蝉の音が暑苦しさをさらに引き立てていた。

しかし、一步、院内に入ると暑苦しさが解放された。

「きや」

若い女の声と共に、白く分厚い本が何冊も床に散らばった。

水色のワンピースの少女が膝をついて見当違いの方向を両手でまさぐり始めた。

右手には杖が握られている。

服部は自分の足下に散らばった本を拾い上げ少女に近づいた。

「はい。どうぞ」

服部はその少女の両手に本を持たした。

少女は声の聞こえる方向に向いて礼を言おうとしたが、その目の焦点は合ってはいなかった。

「ありがとうございます」

少女はぺこりと頭を下げた。

両手に本を抱えていては、杖も役割を果たさないだろう。

「涼子さん。だめですよ。勝手に動いたら危ないでしょう。本は私を持ちますから」

後ろから随分落ちて着いた中学生位の少女が近付き、涼子と呼ばれ

月の裏であいましょう。

る少女の手を取った。

「麻美ちゃん？ごめんね。ちょっと用があつて」

麻美はチラリと服部を見ると無表情で涼子とその場を去つていった。

「アレが栗原涼子か」

水色のワンピースが似合う、透き通るほどの白い肌の女の子だった。

そして、服部は外来を通り過ぎ、今回の仕事の依頼者が入院している病室に入った。

「はじめまして。遠藤沙里奈さんですね」

腕の点滴の針は酷く痛々しく、髪は抗がん剤の副作用の為だろうか少し薄くなっていた。

輝きを失いぼんやりと天井を見つめていた大きな瞳が服部に移った。

「怪盗ハットリ…？本当だったんだ…」

病院のベッドには似つかわしくないこげ茶に焼けた肌はぼろぼろだった。

服部はそれには答えずに、ベッドのそばの椅子に腰かけた。

「もう、あれから1年が過ぎたのね」

一年前を懐かしむように、沙里奈は話し始めた。

「…あつという間の一年だったよ。学校の健康診断で、精密検査を受けるように言われて、受けたら、胃癌で、しかも、手遅れ。父親は隠しもせず、はつきりと言ってくれたよ。それがいつも飲んだくれの父親の優しさだと初めは気付かなかった。ヤケになって、占い師とか霊能力者とか冷やかして回ったの。ホントは、そんなもの信じてなかったけど、あのじいさんだけは、信じた。だから、事故であの子の目を奪ってしまったとき、あのじいさんなら何とかしてくれると思ったの。じいさんは笑って言ったよ。『それでは、ハットリがあなたの瞳を奪いましょう』って。でも、1年前ってまだ、怪

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

盗ハットリなんて知らなかったから、意味がわかんなかった。でも、その後から、ニュースで怪盗ハットリが出るようになって、もしかしたら、じいさんの言ったハットリは、怪盗ハットリなのかな？つて、思った。それでも、あなたが来るまで…、この瞬間までちょっと疑ってたかも…」

沙里奈は、独り言のように、でも、一語一語、丁寧に話す。

誰かに聞いてほしかったのかもしれないし、そうでないかもしれない。

「でも、よかった…。あの子に光を返してあげられるんだね…。お母さんは反対してるし…。もう、説得は諦めたけどね。涼子にも何も話してない。あの子、すごく責任感っていて、絶対納得しないと。思うから。そう言う子なんだモン」

「ねえ、どうして、オレがハットリだと分かった」

二人は、初対面。

服部は自己紹介をしていない。

沙里奈の話だと、それ以来、じいさんにも会っていないようだ。

「…入院してから、最初は友達が毎日のように来た。今は涼子だけ。あの事故に遭わなかったら、一生友達になれないような超お嬢様学校の子だよ。他に誰もこない」

毎日、できる事は病室の天井を眺める事と、考える事だけ。

沙里奈はこの天井を眺めながら、ハットリが来るのを待っていたのか。

それとも、本当は恐れていたのか。

その綺麗な瞳からは読みとれない。

輝きを失っても濁っていない。

澄んだ瞳。

「今は携帯も何もいらぬ。ただ、待つだけ」

何を？

「ハットリは毎日来てくれるの？」

「え？」
「私が死ぬまで」
窓からの光は容赦なく病室に降り注いだ。病院内の気温は常に一定に保たれているため、外の暑さまでは伝わらない。

1年前、夏の暑苦しい部屋で、いきなり父から自分の命の期限を宣告された。

高校生と言うブランドを身に纏い、今を面白く生きていた。いつ、死んでも後悔ないと思っていた。

いや。死の意味など考えたこともなかった。遠い日のことだと思っていた。

でも、目の前に死が突然叩き付けられた。病院で繰り返される検査は、自分の死が現実であると繰り返し囁く。

携帯電話のメモリを押し続け、次々に名前と電話番号が沙里奈の瞳を通り過ぎる。

「誰に言えばいい？誰が私を助けてくれるの？」

母親は娘に癌宣告をした父に向かい二度と来るなど、罵った。

父はそれを守った。

その母親はわけの分からないお守りを持ってきて、沙里奈を見ては泣き続けた。

沙里奈は母親を見る度に、自分が世界で一番惨めな人間に思えた。母親は自分の不幸に泣いているようにしか、沙里奈には見えなかった。

気が付いたら、バイクのアクセルを回していた。不意に1ヶ月前に逢った手相見を思い出した。

命の期限に実感の持てなかった沙里奈がからかい混じりに、街中の占い師を歩き回った時に逢った奇妙なじいさんを。

「瞳だけは、長生きする？」

月の裏であいましょう。

瞳だけ…

歩行者用の信号の点滅に、アクセルを回した途端、目の前に制服が飛び込んできた。

ブレーキは間に合わなかった。

「失明？」

「君のスピードの出しすぎが原因だ」

警官の威圧的な態度に沙里奈はきつと睨み付けた。

「相手が、信号無視してきたんだよ」

「信号は黄色じゃなかったのか？相手のお嬢さんは前途有望な有名女子校の高校生だ。どう責任取るつもりだ？」

明らかに沙里奈を見下していた。

「本当に私が信号無視したんです」

開けられた扉から、目に包帯を巻いた涼子が母親に付き添われてきた。

「私が悪いんです。彼女を責めないで下さい」

必死に訴えるお嬢様育ちの涼子に沙里奈は腹立たしさがこみ上げてきた。

「何を言っているの？自分の目が一生見えないかも知れないのに」

「だって、私が悪いのに他の人が責められるなんて嫌なの」

涼子は叫ぶように訴えた。

彼女の母親は少し驚いたように自分の娘を見て呟いた。

「こんな涼子、初めて見るわ」

月の裏であいましょう。

File 3：永遠の瞳（3）

服部は病院から直接学校に向かった。

午後から始まる英語の補習に出席するためだ。

グラウンドでは真っ黒に日に焼けたテツが、バットを振り回していたが、窓からグラウンドを見ていた服部に気付いて、手を振る。

服部も振り返した。

「今回の期末は簡単にしたつもりですが、二人も赤点が出ました」

インテリな英語の教師は溜息混じりに説教し始めた。

理真と服部は黙ってそれを聞く。

「そんなお二人の為に、バケーションを取られているAETの先生の紹介でケンブリッジから先生がお見えになりました。本場のブリティッシュイングリッシュを二人に聞かせてあげますよ」

この英語教師は気取った様子で、イギリス人を迎えた。

「アルフレッド・ノーランさんです」

服部は少なくとも一秒間は心臓が止まった。

この男は…

典型的なイギリス人の男は碧眼の眼と、綺麗にまとめられた金髪を持ち、親しみやすい笑みを服部に向けた。

「ナイス トゥーミーチューー ホワツチュア ユアネーム？」

「タイチ ハットリ」

ゆっくりと、センテンスを区切った英国人の英語に、少し呆れたように自分の名を答えた。

理真は青い眼にどきまぎしながら、あんぼんたんな事を言っていた。

「アーユー？」

「ミ、ミー？ア、ア、アイム リマ」

「オウ！リマ！イン ペルー？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「イ、イ、イエス！」

「…ドゥー ユー アンダースタンド ワナミーン？」

理真は服部の肘をつついて、助けを求めた。

「何て言っているの？」

「あなたは綺麗ですが、エステに通っているのですかっつて？」

「ノー。ん？ちよつと、服部君。真面目に答えてよ」

この暑いのに真面目に答えられるか。

服部はパタパタと下敷きを動かし、インチキ臭いイギリス人を見た。

授業が終わると理真が服部に文句を言い始めた。

「助けてくれたっていいでしょ」

「僕も英語分からないんだから、仕方ないだろう」

「それも、そうね。服部に助けを求めたって仕方ないわね。本当に服部ってなんの取り柄もないモンね。テツの影で目立たない高校生って感じで」

バカにしているよりも、同情深げに理真は言っただけで帰っていった。

服部は一人教室に残り、グラウンドを見やる。

グラウンドでは今もテツが元気に走っている。

「元気そうだな。タイチ」

後ろから、本場ブリティッシュイングリッシュが飛び込んできた。

「いつ日本に帰って来たんだよ。アル」

不機嫌な服部の答えも日本語ではない。

「ずいぶんなご挨拶だ。一年ぶりの再会を果たしたパートナーに言う台詞か？それにしても驚いた。タイチと英語の補習で会うなんて」

「あのな…。オレは6年間もアルのパートナーしていたんだ。どうせ知っていて、この学校に来たんだろ？何しに日本に来たんだ」

「何って？酷いな。僕達はきつと切っても切れない赤い糸で結ばれているんだよ」

月の裏であいましょう。

「気色悪いこと言つなよ。んなモン、オレがキツパリ切つてやるよ」
「それは楽しみだ」

アルの微笑みはフランス映画のワンシーンのようだ。
それを見ている観客は、スクリーンから笑われているみたいな錯覚を起す。

自分はよくできた嘘を鑑賞しているのだろうか？

服部は自問し、答えはいつも、どっちでもイイっか、だったりする。

「で、じいさんには会つたのか？」

「ミスターにはまだ、会っていない。それにしても大きくなつたな。この時期の1年は大きいな」

じいさんをブリティッシュイングリッシュのサーではなくアメリカンイングリッシュのミスターと呼ぶのは昔の癖だという。

服部が仲間に加わる前にいた男がじいさんをミスターと呼んでいたのだ。

「アルも老けたな。30歳か。年寄りのくせに相変わらずキザなツラしてるな」

「タイチも相変わらずだな。そのベイビーフェイスが見られて嬉しいよ」

「あそ。オレもアルのロンドン下町訛コックニが聞けて嬉しいよ」

「酷いな。タイチはもう15歳だつたな。僕と初めて会つた時は8歳のがきだつたのに」

「アルには、いろいろ教わつたよ」

「タイチは才能あるし、僕が教えなくても立派なドロボーに為れただろうよ」

「立派なドロボーなんかいるモノか」

アルはクスツと笑つて言った。

「血か…」

「え？何？」

「いや。何でもない。それより今どんな仕事しているんだ？」

「目、だよ。もしかしたらアルは知っているんじゃないのか。1年前からその依頼があったらしいから」

夏休みの校舎はシンと静まり返り、グラウンドから運動部の声だけが響いている。

「長谷川あ。もう練習終わろうよあ〜」

先輩の情けない声がテツの耳に入った。

夏の大会から、引退した三年生に代わり何故か一年生のテツが野球部を仕切っていた。

テツは先輩の声に溜息を吐くと帰ろうとする理真の姿を見つけた。

「理真。補習終わったのか？服部は？」

「まだ、教室にいると思うよ」

テツは理真に軽く礼を言つと部室に向かって走り出した。

服部とメシでも食べていくか。

空腹にそんなことを考えながら、テツは素早く着替え、服部のいる教室に向かった。

テツは教室から聞こえる会話に足を止めた。

最初、ラジオから流れている英会話講座かとも思ったが、その一人の声には聞き覚えがある。

授業のリスニングテープよりもスピード感のある英語はセンテンスで区切るような事はしていない。

しかし、テツが教室に近づくとぴたりと、会話が止まった。

おそらく、テツの足音が届いたのだろう。

「夏休みとは言え学校には生徒がいる」

声を落として、服部は日本語でアルに言い、廊下にいる生徒が通り過ぎるのを待とうとした。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

それがテツだとは知らずに、服部はアルに笑顔を見せた。

「タイチ。目立たないバカな高校生を装うのは、仕事のためか？」

「…オレは元々バカだよ」

口元に笑みを浮かべた服部の目の中が、一瞬、深い闇に占拠される。

遠い過去が服部の心の隙間に入り込んだのだ。

度の入っていない安物の眼鏡の奥に、立入不可能な彼だけの闇が蠢いている。

しかし、その闇は急速に消えた。

通り過ぎると思われた足音が止まったのだ。

ガラガラガラガラ…

教室の扉に服部の目が釘付けになった。

「テツ…？」

「一緒に帰ろうと思って」

そう言いながらテツの目は見知らぬ外人に向いていた。

「英語の特別アシスタントの先生だよ。僕、補習受けていたんだ」
不覚だった。

突然のアルの出現に少し動揺していた。

聞かれていたか？

いや、聞かれていたとしても聞き取れるほどテツの英語力はない。
いや、そんなことが問題ではない。

英語の補習を受ける程の成績の人間がネイティブのイギリス人と
対等に話している。

もともと服部が多方面で手を抜いていると疑っているテツが、服
部の英語を耳にしていたらどう考えるか。

服部はテツの目から答えを探そうとした。

テツの瞳は暫く不審を浮かべていたが、すぐにいつものテツの瞳
に戻った。

「もう、終わったんだらう？帰ろうぜ」

月の裏であいましょう。

服部はホツとしたように、頷いた。

教室を早々に出ていった服部を見て、アルの顔から微笑みが漏れる。
「タイチは変わらないな」

File 3：永遠の瞳（4）

夏の青空は、誰もが憧れ、渴望し、決して誰にも到達できない場所を連想させる。

そこに浮かぶ白い雲は届きそうで、誰にも掴むことのできない空への階段なのだろうか。

暑い太陽は眩しすぎて、誰も凝視できない。

眩しいはずの太陽の下、暗闇を歩く。

太陽を肌と臭いで感じながら、涼子は病院への道のりを、一歩一歩大事そうに歩いた。

「ねえ。麻美ちゃん。人は死んだらどこへ行くのかなあ？」

涼子の手を引き、その歩く速度に合わせゆつくりと歩いていた麻美が、涼子の質問に淡々と答える。

「そうですね。肉体は灰になります。そして、精神は生まれる前の状態、つまり“無”と言う状態に戻ります。“無”と言う概念もない“無”へ」

「何も無くなっちゃうのかあ。でも、残された人たちの心の中では生きていられるよね？」

「死んだ人間にとっては、残された人も、世界も、宇宙も全て“無”に帰します。この世界は、全てそれぞれ、例えば、私の五感で感じ、脳で処理されています。つまり、私が死ぬと言うことは世界、この世、全ての死に相当します」

「じゃあ、私が死んだら、キムタクもブラビも、アインシュタインが解いた宇宙も無くなるんだ。沙里奈：友達が死んだら、私も死ぬの？」

「あなたの友人にとっては、全てなくなります」

「なら、残された人たちの心の中には、残れるのね」

「単なる記憶の一部を構成するに過ぎませんが…」

月の裏であいましょう。

「麻美ちゃんは、何か中学生にみえないね。あ。じゃなくて、私には、本当に見えないけど」

涼子は微笑み、麻美の顔を想像した。抑揚のない淡々とした語り口も、時々、フツと漏らす小さな溜息も14歳の女の子からのものとは考えられなかった。

真夏の太陽は涼子の白い肌を容赦なく照らし続け、ノースリーブのワンピースの背中が、僅かに汗ばみ、色を変えていた。

麻美の細い指から感じるひんやりとした冷たさが涼子には気持ちよかった。

「以前の定期診断の際も、ここに来られましたよね。誰かのお見舞いですか？」

「うん。友達が入院しているの」

目の見えない涼子が、ぴたりと一つの病室で足を止める。

麻美は扉の横にある名札に目を向けた。

遠藤沙里奈。

涼子の唯一の友人の名である。

扉を開けると生暖かい風が涼子の髪をフワリと靡かせた。

室内の開いた窓が運んだ風と共に沙里奈の声が届く。

「そろそろ、来る頃だと思った」

一瞬、沙里奈の声が戸惑う。

麻美の存在に気付いたからだだった。

その空気に気が付き、麻美は軽くお辞儀をし、病室から出ていく。

「今の娘は、誰？」

「母の知り合いのボランティアの人らしいわ。二週間前ぐらいから、たまにああして付き合ってくれるの。もう、一人でも平気だけど、助かるわ」

「そう…」

「私の友達は沙里奈だけだよ」

迷いのない涼子の言葉が耳に届く。

そんな不確かで優しい涼子の言葉に、幾度救われただろうか。

涼子の目を奪っておいて、今、平気なのは自分の命が残り少ないからだろうか。

残り少ない命に何も感じないのは、涼子がいるからだろうか。一年前に確かに無くしたと感じた命の光が今尚鮮明に見えるのは、自分が奪った涼子の目の光なのか？

一年前まで持っていた携帯電話のメモリに、確かに刻まれていた電話番号の主達は幻で、残された唯一の現実は何よりも心が安らぐ。楽しいはずの幻達の中で夢見ていた頃は、心の空白を埋めるように、スケジュール帳の空白を埋めていた。

「ここに居る時が、一番安心する」
そう言うのは涼子の方である。

焦点の合っていない目は沙里奈を通り過ぎ、あるはずのない何かを見ているようだった。

そして、涼子は話を続けた。

「私の両親も離婚するかも知れない。前々から仲悪かったって、沙里奈にも以前言っていたよね。お母さんはボランティアに忙しいし、お父さんは会社が相当危ないらしくて、最近、全然家で見ないの」
「涼子の家、金持ちだったモンね。私ん所は、お父さんは働かないし、お母さんは宗教にはまっちゃうし。離婚は時間の問題だったけど、きつかけは私の病気を、お父さんが私に宣告した事だったな」

「私達似ているね」

不幸な境遇でも“似ている”。

それだけで涼子は嬉しかった。

実際、二人は似ていなかった。

二人が出会う事故の前までは、大人しく内向的で友達がいらない涼子に対し、派手な沙里奈の周りにはいつも友達が耐えることなく、彼氏と呼ばれる男は常に二人以上はいた。

夏休みは、昼間でも子供達の声が暖かい風と共に窓から入り込む。「ねえ。ずっと前から聞いてみたかったんだけど、あの事故の時、

月の裏であいましょう。

どうして涼子は急に道路に飛び出したの？
その時、沙里奈の大きな目に微かに紅潮する涼子の顔が写った。

File 3：永遠の瞳（5）

去年の夏の終わり、それは、まだ瞳に光を感じていた涼子の初めての恋だった。

「あなた。涼子を仕事の道具に使うのは止めて下さい」

母はボランティアが趣味の主婦だった。

「これは、涼子の為でもある！」

父は貿易会社社長。

今だに残暑の厳しさを感じる中、涼子は着物を着せられた。

17歳の誕生日に向かう先は決して楽しいものではない。

その日、涼子は憂鬱な面持ちで父と共に、ホテルのパーティー会場に招かれていた。

貿易会社の社長である父は野心家であり、一代で社員数一千人の会社を築いたのだ。

「涼子。嫌なら嫌と、ハッキリ言いなさい。貴女がそんなだから、お父さんはつけあがるのよ。そんなくならないパーティー。分かっているの？世の中にはね、食べられなくて死んでいく子供がどれだけいると思うの？あなたが今から行くパーティーで出る残飯がどれだけになると思うの？」

「うるさい。誰のおかげで贅沢できると思っているんだ」

母は苦々しげに父を睨んでいた。

カンボジアの難民や地雷で足を吹き飛ばされた子供達は、母にはご飯を食べさせてはくれない。

最初、父は母のボランティア活動を利用していた。

欧米の取引先に対し、ボランティア活動をアピールすることはプラスになる。

しかし、母は父に相手にされない淋しさから、徐々にボランティア活動にはまっついていき、そんな母を父は徐々に疎ましく思うように

月の裏であいましょう。

なっていた。

母は涼子を何度もボランティア活動に連れて行った。しかし、涼子はボランティアに興味が持てなかった。母が一生懸命になればなるほど、冷めていった。

いつか、流行った名言。

同情するなら金をくれ。

付け加えるなら。

その代償に、あなたに甘い良心の自己満足と優越感を差し上げます。

「私、パーティーに行くよ」

その一言で、とりあえず、いつもの喧嘩は収まった。

そのパーティーには、各界の著名人が招かれており、たかが一貿易会社の社長が来れるような規模ではなかったが、父はコネを使い何とかこのパーティーへのキップを手に入れたのだ。

高価なキップの見返りは娘の結婚。

この日のパーティーの主演は、若い独身の青年だった。

日本でも指折りの名家に生まれ、大道グループ会長の一人息子。

その日はその息子の大道ホールディングス代表取締役社長の就任披露パーティーだった。

我が娘を嫁に、そう思うのは父だけではなかった。

あちらこちらに、着飾った女達が微笑んでいる。

その中で涼子は一人憂鬱であった。

いつも思ったことを口に出せない涼子は、父の言うがままにここまで来たが、社交界の雰囲気だけで胸が詰まりそうだった。

特に、パーティーは大道グループ会長の趣味に合わせ西洋風の豪華な立食パーティーである。

艶やかなドレスに身を包んだ女達の中で、一人着物を着ている涼子は益々浮いているようで居心地が悪かった。

やがて、辺りがざわつき始めた。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

主役の登場である。

耳から女達の囁き声が入り込んできた。

「相変わらず、イケメン。ハーバードでMBAよ」

「お金も地位もあって、頭も良くて、ルックスも最高。日本中の男にランキング付けるとすると間違いなく、ダントツでトップね。」

「でも、噂だとかかなり女関係派手らしいわよ」

「それでも、構わない。遊ばれたい」

ウツトリとする女達の視線を涼子は何気なく追った。

視線を離すことができなかった。

寸分の狂いなく整えられた美貌、スラリと伸びる肢体、軽やかな身のこなし、何より人を圧倒するカリスマとも言つべき、あの空間

神様は不公平だ。

僅かな嫉妬と共に沸き上がる熱い感情は、初めての恋だったかも知れない。

若い青年実業家は、丁寧に親しみ深い笑みを保ちつつ、一人一人に挨拶をしていく。

経済関係の雑誌では何度も表紙を飾った顔だが、涼子にとっては初めてのその顔がこちらに近づいてきた。

こんなすごい人が自分の父なんか知っている訳がない。

父もおそらくそう思ったのか自分から声を掛けようとした。

しかし、響いた声は青年のモノだった。

「グローバルトレーディングカンパニーの栗原社長でございますね。はじめまして、大道虎之助です。この度は、私の就任パーティーにお越し下さいまして本当にありがとうございます。常日頃から社長の事業展開は素晴らしいと思っております。さすがに一代でここまで社を大きくしただけの事はありますね。現在の取引は主に欧米の方ですが、中国への進出は考えていらっしゃいますか？未だにカントリーリスクを孕んでいるものの、あの国のもつポテンシャルは大変魅力的です。もっとも、多くの企業が中国的なやり方に敗退し、

月の裏であいましょう。

撤退を余儀なくされましたが、だからこそ、未だに可能性に溢れているとは思いませんか。この不況から脱するには、あの広大な中国市場にかけてみる価値はまだまだあるとお思いになりませんか？」
あっけに取られながら、涼子は父との会話を聞いていた。
最初、面食らっていた父だったが、次第に調子に乗っていつもより饒舌になっていた。

この人は違う世界の人なんだ。
いや、違う星の人かもしれない。

父はすっかり娘の事は忘れ、得意になっていた。

あの警戒心の強い父を一分もかからずに脳のない天狗にしたのだ。涼子は時間も忘れてぼかんと口を開けて、現実離れた男を見ていた。

「涼子。何をぼんやりしているんだ」

父の声に、我に返ると青年実業家は、涼子を見つめていた。

「涼子さんは、とても着物がお似合いですね。私は父と違い、どちらかと言えばドレスより着物の方が好きです。亡くなった母もとても着物の似合う女性でした」

まるで涼子の沈んでいた心を読んだように優しく微笑む。

涼子は胸の鼓動の速まりに、返す言葉すら思い付かない。

「今日は会えて嬉しかったです」

おそらく招待客全員に言ったと思われる言葉に涼子は胸をときめかせた。

さわやかな微笑みを涼子に残し、青年は去っていった。

それから、一週間、脳裏にはその笑顔が焼き付いて離れなかった。そんな時だった。

涼子の通う聖マリア学園は、偏差値の面でも学費の面でも、レベルの高い女子校の一つだった。

女子中学生の憧れの制服を身につけた涼子は、いつものように一人、下を向いて歩いていた。

月の裏であいましょう。

信号で足を止め、何の気なしに顔を上げた時に見たのは、間違はなくあの大道虎之介だった。

道を隔てた向こう側、今にも黒いリムジンに乗ろうとしている初めての恋、不思議な力に惹き付けられるように足が向かった。

そして、沙里奈の運転する原付に跳ねられたのだ。

「ホントに沙里奈には悪いことしたと思っているの」

涼子は恥ずかしそうにあの時のことを思い出し、沙里奈に謝った。

「バカだな。怪我させたのは、私だよ」

「…そうじゃなくて、時々思うの。私は、この怪我を利用して沙里奈を無理に付き合わせているんじゃないかなあって」

「無理に？」

少し淋しげな涼子に、沙里奈は点滴の打っていない方の手を差し伸べ、ゆっくりと涼子の手に分かたず自分の手を重ねた。

沙里奈の手の温かさが伝わる。

「涼子。聞いて。こうなってから、初めて分かることがたくさんあるんだ。こんな事話せる友達いなかった。親友いるかと聞かれても、答えることすらできなかった。涼子に会う前までは」

「親友…」

涼子は確かに不確かな言葉の暖かさを沙里奈の手から感じ取った。

File 3：永遠の瞳（6）

「なんだか陳腐な友情ね」

有限の空々しい言葉の契約。

大人になつたら、決して口に出れない言葉での確認。

一生つていう名の不確かな時間には、変わらないと言いつて切れな
い。

でも、これは、期限付き。

有限だから、守られる安心。

ロビンの赤い唇から煙草の煙が吹き出した。

病院内の喫煙席に服部と共に座り、沙里奈の病室に仕掛けた盗聴器に耳を傾けていた。

「それにしても、よく分からないわ。私達にどうしてこの仕事させるのかしら？ そう思わない。いつ死ぬか分からない人間相手に」

「だから、こうして毎日来ているんだろう」

「でも、ずっと見張ることなんてできないわ。そもそも見張る必要なんてない筈よ。角膜は死体から8時間以内に切り取ればいいわけだし、角膜は栄養液の中で数日の保存に絶えられるわ」

「そうなんだ」

ポカンとロビンを見る。

「移植手術が可能って事は、彼女は一生目が見えなくなるわけじゃない。アイバンクに登録すれば、2年以内で移植手術を受けられる。アメリカに行けば遅くても2ヶ月以内で移植手術を受けて目に光が戻るわ。アメリカに行けばだけど。日本のアイバンクのシステムは
いまだ未発達だわ。アメリカのアイバンクは…」

そこまで言つて、ロビンは綺麗な顔を歪めた。

自分が言ってしまったことを後悔した顔だ。

時々、ロビンはそんな顔をする。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「ロビンって、本業はなんなんだ？」

その顔は服部が覚えた数少ないロビンの素顔だ。

「眼科医じゃないわ。ゲイバーのママって言わなかった？それに、私もハットリの正体知らないわ」

煙草の灰がぼとりと灰皿に落ちた。

「何言っているんだよ。いつも人の学校に押し掛けといて」

「平凡な高校生？平凡な中流家庭の一人息子？それはハットリの一部でしょう。私が知りたいのはルーツ」

「ルーツ？」

赤茶色のマニキュアの爪は、イミテーションだろう。

長い爪は煙草の先を灰皿に押し潰し、腕時計をチラリと見た。

「どうでも、いいけどね。帰るわ。じゃあね」

ウインクを服部に投げ、軽やかなハイヒールの音を立てロビンは去って行った。

結局、服部は一人で病院の庭を眺めることになった。

「確かにロビンの言うとおりだ」

いつ死ぬか分からない相手を待っているなんて馬鹿げている。

服部はぼんやりと人気の少ない病棟の喫煙室で老人の指示を思い出していた。

（沙里奈は間もなく死ぬ。院長とは昔馴染みだから、全てを承知で執刀も院長自らする。院長以外は知らない。手術室まで人目に付かないように死んだ沙里奈を運び、涼子を連れてくるのが二人の役割だ。）

老人の指示はそれだけだった。

服部はアルとの会話を思い出していた。

「目だよ。もしかしたらアルは知っているんじゃないのか。1年前からその依頼があったらしいから」

服部の質問にアルはゆっくり頷いた。

「ああ、知っているよ。1年前の今頃だったなあ、ミスターが持ち掛けてきた仕事だ」

1年ぶりに英語のアシスタントティーチャーとして服部の前に現れたアルは、綺麗なブリティッシュイングリッシュで答えた。

「僕はその仕事に気が入らなくて、1年前、タイチ達の前から姿を消したのさ。タイチは知らなかったのか？」

「オレは聞いていないよ。でも、そんな大した仕事じゃない」

そう言いながら服部は、今回する仕事の金の出先が気になった。

おそらく沙里奈からだ。

大した額ではないだろう。

「金か？」

アルは首を横に振る。

「僕は前々からミスターのやり方が気に入らなかったのさ。それより、僕の後釜は随分派手なパートナーじゃないか？」

「アルと仕事していた6年間は警察にその存在すら知られていなかったからな。全く困っているんだ。じいさんが見つけてきた新しいパートナーは派手好きで。でも、オレは奴の正体すら知らないんだ」
「へへ。是非会ってみたいな。予告状のコトといい実に面白いじゃないか」

アルは本当に楽しそうに微笑んでいた。

順番待ち。

アイバンク登録していれば、いずれ光は涼子の瞳に戻るだろう。戻らなくていい。

そう思うのは、いずれ得られる余裕からだろうか？

ボランティア好きな母は、アメリカに行こうと言った。

2年も待てない。

十代の青春を闇で過ごさせるのは忍びないと。

でも、順番を待とう。

光はそこにあるのだから。

とても、暖かな光が、そこにあるのだから。

いずれ、消えるとわかつている光は、とても暖かい。

「涼子は目が見えるようになったら、始めに何が見たい？」

沙里奈の質問に涼子は微笑んだ。

「沙里奈が見たい」

見たことのない親友の顔を涼子は想像した。

事故のとき、涼子は沙里奈の顔を見ていない。

幸せそうな涼子の笑顔に沙里奈はクスツと笑って答えた。

限界までモルヒネを打ち込んだ沙里奈に痛みはない。

苦しいだけの抗がん剤も止めた。

「それは、無理ね。きつと最初に見るのは医者よ」

その声は明るかった。

その明るさに涼子は気付かない。

その言葉の意味に。

そして、これが最後の沙里奈の輝きだと言うことに。

麻美は、携帯電話をバッグから取り出そうとした手を止めた。
病院内に入る前に切っていたのだ。

仕方なく財布から十円玉を何枚か取り出して、公衆電話へ向かった。

「絵里お姉さま。麻美です」

「連絡遅いじゃないの。で、そっちは？」

「離婚は秒読みですね。会社の経営の方もかなり息詰まっています。1年前までは傲慢な経営で他の貿易会社からは異端児扱いを受けていましたけど、かなりの実績がありました。ところが、去年の夏頃から始めた中国進出に失敗しています。後から来た大道グループの貿易会社に、栗原自ら開拓した中国の取引先を全て横取りされてい

月の裏であいましょう。

ます」

『予想通りね。今日の栗原の行動に変更は？』

「ありません。恐らく昼間には知り合いの紹介という形で彼に会いますわ」

そう言ってから麻美は、水色のワンピースに目を止め早々に電話を切り上げた。

「涼子さん。もう、いいのですか？」

「麻美ちゃん？今日は雨が降るらしいからもう帰るわ。また、明日来るから」

涼子の微笑みが麻美の前を通り過ぎる。

涼子の手を取りゆつくりと歩き出す麻美の瞳が、窓の外へと動く。西から威圧的な入道雲が、ゆつくりと流れてくる。

「帰った？」

服部は沙里奈の病室を覗き込んだ。

沙里奈はコクンと頷く。

「彼女、本当に毎日来ているんだな」

「あの事故から毎日よ。最初、あの子の事嫌って、責めて、拒否してたな。なのに、毎日来るんだもの」

凍り付いた心を、時間を掛けて溶かしてくれた。

もう、携帯もスケジュール帳も必要ない。

沙里奈はただ、涼子が来るのを待った。

待つ時間さえも暖かい自分の心を感じられる穏やかな日々だった。

「外は、暖かそうね」

「違うよ。暑いんだよ」

服部は少しウンザリした顔を沙里奈に見せると、窓の側に行き空を見上げた。

キラキラと照りつける太陽を入道雲が呑み込もうとしていた。

「今夜は雨だな」

「ねえ。服部は生きてて、楽しい？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「え？」

突然の沙里奈の質問に服部は何も答えられなかった。

しかし、沙里奈は服部の返事を期待していないようだった。

その瞳は真夏の太陽から零れ落ちる光を嬉しそうに見ていた。

「私ね。夏が一番好き。光が溢れて意味もなく幸せになれるような気がする」

「太陽は一年中輝いているよ」

「でも、夏が一番でしょ。夏に涼子と出会った。そして、涼子が私に生きる光をくれた。∴そろそろ返してあげないとね」

太陽から溢れる光が沙里奈の瞳に反射しキラキラと輝いていた。

眩しい光に晒された深い闇は、さらに暗い影を落とす。

File 3：永遠の瞳（7）

闇の世界が光の渦に包まれた瞬間、忽ち地響きのような雷音が轟いた。

その大音響と共に凄まじい量の雨が地面を叩き始める。

服部の予想通り、その夜は酷い雷雨に見舞われた。

服部は自宅で、ぼんやりと読んでいた本を閉じて、窓に叩き付けられる雨をうんざりと眺めた。

不意に鳴り始めた携帯電話に服部は、沙里奈の顔が浮かぶ。

「…遂に、来たか」

時間は零時を回っている。

土砂降りの雨の中、外にでると、ロビンのフェラーリが行く手を遮るように服部の前で止まり、ドアが開いた。

「ロビンにも、じいさんから連絡が入ったのか？」

「ええ。入ったわ。今回は予告状出せなくて残念だわ」

冗談を言うロビンの顔は浮かない顔だった。

服部も同じ気分だ。

深夜の病院はシンと静まり返り、非常口にある緑色のランプが不気味に光っている。

0.01秒の光の渦が、病室を埋める。

そして、その数秒後に空間を支配していた雨の音を貫き、雷鳴が鳴り響く。

「綺麗だな」

稲光に照らし出される沙里奈の顔は穏やかに眠っているようだった。

「これで、いいの？」

看護婦に変装したロビンは椅子に横たわる沙里奈の母親を見おろ

月の裏であいましょう。

し言った。

クロロフィルムで眠らせたのだ。

「この人には何を言っても無駄だよ。沙里奈の想いは当分分からな
いだろう。沙里奈の遺書も有るし、時間を掛ければ娘が何を考えて
いたのかいずれ分かる時が来るさ。問題は……」

ボタン

開かれたドアから震える涼子が現れた。

肘や膝には擦り傷が数カ所でき、ワンピースも髪も濡れていた。

おそらく走ってきたのだろう。

目の見えない涼子は何度も何度も転んだに違いない。

「知らないおじいさんから電話が来て……。沙里奈が死んだって……」

嘘でしょう。沙里奈？」

病室の先客に気付かず涼子は震える体で、一歩一歩沙里奈に近づ
いて行った。

「沙里奈。沙里奈。返事をして。お願い」

何度も訪れた病室、そしてベッドの位置も分かっていた。

それでも、何も喋らない沙里奈が今そこにいるのか涼子には分か
らない。

「お願い。そこにいるのでしょ。私を一人にしないで」

涼子の震える手があちこちと空を彷徨った後、沙里奈の頬を捉え
た。

「ほら、暖かい。沙里奈、起きて」

涼子は微笑みとも悲しみとも区別しがたい表情を、その顔に浮か
べる。

「沙里奈はもう起きないよ」

静かに服部は涼子に真実を告げた。

「誰？」

誰もいないと思っていた部屋に先客がいたことをようやく悟り、
涼子は声の聞こえる方向を仰いだ。

月の裏であいましょう。

「沙里奈の瞳を盗みに来た泥棒だよ」

「…何、言っているの？」

激しい雨。

地面を叩き付ける雷鳴。

喋ってくれない沙里奈。

瞳を、盗みに来た…、ドロ…ボー…？

頭がグルグル、グルグル。

「沙里奈の最後の望みだ。君に瞳を、光を返してあげよう」と

「沙里奈が…？」

涼子の震える手が沙里奈の頬をゆっくりと撫でる。

見えない目から、涙が溢れる。

「いや。絶対いや」

「嫌でも、時間が無い。早く、手術室へ」

服部が涼子の手を掴む。

稲光がそこに満ち、涼子の右手が空を切る。

パチン！

ガラガラガラ…ダーン。

空気の亀裂が地を貫く。

服部は自分の頬を押さえた。

「あなたに何の権利があつて、そんな事するの？」

「ホントに目が見えないのか…」

そう思える程見事に涼子の左手は服部の頬に命中したのだ。

そして、さらに右手を服部の胸にぶつける。

そして、左手を。

何度も何度も服部の胸を力尽くで、叩いていた。

「返してよ。沙里奈を返してよ。私の光だったのよ」

月の裏であいましょう。

服部は涼子に押されるままに、窓に背中がぶつかるまで後ずさった。

「あなたに何が分かるの？あなたは何でそんな事するの？何の為に？お金？」

涼子の顔に激しい怒りがこみ上げる。

「お金じゃない」

「じゃあ、何？ボランテアでもしているつもりなの？」

焦点の合っていない目は、憎むべき何かを追っている。

涼子の口元が皮肉に笑う。

「教えてあげるわ。それは、偽善よ。私の母さんが大好きな偽善よ。恵まれない子供。恵まれない可哀相な動物達。哀れみを与えて自己満足しているエゴイスト……」

絶望が一瞬冷たい光に包まれ、涼子の濡れた瞳にその光が漂う。

そして、服部の瞳には、さらに深い闇が落ちる。

服部は涼子の両腕を掴んだ。

「じゃあ、涼子。教えてくれ。善と偽善の境目は誰が付けるのか？人が善を施すのは自分が嬉しいからだろうか？それが自己満足の偽善なら本当の善はどこにあるんだ？」

「そんなの……」

凄まじい音が地響きと共に空気を振動させる。

そして、闇が服部の心に忍び込む。

「人が人や自然に優しくしようとするのは、自己満足の為だ。そんな事知っているだろう？何が捕鯨反対だ。可愛くて頭がいいから殺すな、って？ブスでバカは死ねって事か？動物愛護でベジタリアンは、何故植物を生命と認めてやらない。痛覚というラインを引いてギリギリと所で差別しやがる。植物が大好きと詠うヤツは、周りの雑草を平気で除去できる。本当に動物や植物を愛するヤツは、死んで彼等の栄養分になれ。大人達は、子供に小さな生き物を飼わせて命の尊さを教えながら、給食を残すなという。飼っていた兎を給食で出されたら、子供達はどうすればいい？食べるんだったら、野良

猫を殺してもいいのか？矢鴨と鴨鍋の鴨はどっちが偉いんだよ？結局は自己満足だろう？」

闇は夜よりも遙かに深い。

「そんなこと。私には、分かんない。分かんない」

耳にまわり付き不快な言葉に犯されまいと涼子は首を激しく振る。

「分からない？何故だ？お前が言ったんだ。自己満足だと。抱きしめられれば嬉しい。ぶたれれば痛い。全てそこから来ているのに人間の感情が複雑になれば成る程、社会の法律が混沌としていく。もう誰が作ったか分からない意味不明な常識や観念が平気で人を傷つける。秩序と名のついたラインに守られた人間は、自らを守る為、はみ出た人間を除去する。オレには全てがばかばかしいよ。人間は自然に作られたモノだ。その人間が何しようが、核で地球を滅ぼすうとも、それは自然の中の出来事なんだよ。人工は自然という範疇の中の一部に過ぎないんだ」

涼子の鼓膜が容赦なく服部の泣いたような、笑ったような、冷たい声に叩き付けられた。

「それなら、人間達が何とかしようと思揺くのも自然でしょう」

ロビンの声が、やや低い溜息の後、空気を変えるように響いた。

ロビンは服部の腕を掴んで、少し呆れたように服部を見た。

正気に戻った服部はゆっくりと涼子の腕を放した。

「ごめん。君には関係ないことだったね。とにかく沙里奈を」

服部が近付こうと一歩踏み出すと、涼子はビクツと肩を揺らした。

「イヤ。絶対ダメ」

見えない目を真っ赤に腫らした涼子は子供のようにな度も首を振りながら、ゆっくりと後ずさる。

沙里奈が眠るベッドにぶつかると、

目に見えない、わけの分からない恐怖から沙里奈を守るように、か細い声で呟く。

「行かせない。そんな光いららない」

月の裏であいましょう。

「ずっと、そうしているつもり？」

「リミットは8時間よね？ずっとここにいる。どこにも行かない」
もう、分からない。

服部の言葉にメチャメチャに掻き回された脳がグルグル駆け巡る。

「沙里奈の、君に光をあげたいという想いを無駄にするつもりか」

「私の目が見えないのは、沙里奈のせいじゃない。…あの男のせい
よ」

「あの男？」

服部が眉を顰める。

涼子のそれは、単なる逆恨みだ。

自分の浅はかな行動が事故を招いた。

でも、悔しかった。

何が悔しいのか分からない。

心を奪われたこと？

違う。

いとも簡単に、でも、無意識に人を動かしてしまう彼が憎かった。
何も知らない雲の上の人に、少しでも分かってくれたい。

あなたが奪ってしまった心が、しでかした浅はかな行動を。

「彼を連れてきて。彼を盗んできてよ！」

窓に叩き付ける激しい雨の音。

耳が痛くて服部は目を細める。

涼子は正気を失っている。

奪ったのは自分だ。

ロビンはチラリと服部を見下ろし、耳打ちする。

「時間がないわ。そろそろナースが見回りに来る。とりあえず、沙
里奈の眼球から角膜を取り除く手術を先に済ませましょう」

「でも…」

ここで、騒がれてはまずい。

今の涼子の声も誰に聞かれているかわからない。

眠らせてしまうか？

月の裏であいましょう。

だが、だったら何故、わざわざ彼女をじいさんは呼んだんだ。そうだ、涼子を説得しないまま手術をするわけには、今回の仕事は成立しない。

「私達は怪盗ハットリよ」

艶やかなロビンの声で、思いがけない事実を涼子は知った。

見えない目を見開く。

「…怪盗ハットリ」

「私達に盗めないモノはない。栗原涼子の初恋の相手。盗んでくるわ」

「ロビン…？」

「だけど、その前に沙里奈の瞳は頂くわ」

白衣のロビンはベッドのキャスターに足を延ばしロックを解除する。

ベッドはそのままストレッチャーになる。

涼子は沙里奈のベッドが外へと運ばれる音を呆然としながら聴いた。

File 3：永遠の瞳（完）

服部とロビンはナースステーションを避け、院長が特別に用意した手術室に向かいベッドを引いている。

ベッドには、自ら瞼を開くことのない沙里奈が横たわっている。

服部の斜め前を、看護婦姿のロビンが規則正しい足音を立て歩いている。

「ロビン。どうするつもりだ？今から大道グループ会長の一人息子なんて盗めるわけがない。今、沙里奈を手術しても涼子が応じなければ意味がない。ロビンがあんな風に時間稼ぎしても無意味だ。…結局、オレ達は意味のないモノを盗もうとしているのか？」

「…そうね」

服部の視線は、開かれる筈のない瞼に注がれている。輝くことを今にも忘れそうな瞳が、その奥にはある。

「オレが盗むのは、何だ…。人が大切にしているモノ…？オレは、…何者だ？」

ドーン

蒼い光が服部の顔を蒼く浮き立たせた後、遠くに雷鳴が響く。

「オレは、人を不幸にしているのか…」

ロビンは薄暗い闇の中で濡れたように光る黒い瞳を、僅かに服部に向けた。

珍しく大人しめの色をした形の良い唇は、何も語る事はなく結ばれたままだった。

「…当たり前か。犯罪者だからな」

夜の廊下に途切れることなく響く深い雨の音は、カラカラとベッドを引く音を掻き消す。

「ハットリ。忘れたの？私は声帯模写の天才よ」

「え？」

月の裏であいましょう。

「目の見えない涼子を騙すなんて簡単だわ」
「大道グループ会長の息子になりすますのか？でも、声なんて知らないだろう？」

ロビンの顔が稲光に光った。

沙里奈のいない病室には、既にベッドが引きずられる音は聞こえない。

ただ、激しい雨の音だけは未だに病室に響いている。

「分かんないよ。一人残さないでよ」

頭に沙里奈の声が蘇る。

目が見えるようになったら何が見たい？

「バカ。私は沙里奈が見たかったの。言ったじゃない」

無理ね。

沙里奈の笑ったような答え。

「そっか。だから、無理だったんだね。…助けて…。誰か。誰でもいい…。助けて」

それは静かな足音だった。

床に座り込んだ涼子の下でピタリと止まる。

「涼子さん」

聞き覚えのある声に涼子は見えない目を向けた。

目の見える頃の習慣である。

「お願いだから、手術受けて下さい。本心から謝ります。僕のせいで事故に遭ったんでしょ？」

「虎之介さん？どうして、ここに？」

「沙里奈さんは優しい死に顔だったよ。それは、君が作った優しい顔だ」

足音は涼子の元から去ろうとした。

「待って」

その声は激しい雷鳴に押し潰され、聞こえる事はなかった。

月の裏であいましょう。

耳から聞こえた声は幻だったのだろうか。
沙里奈以外は誰も知るはずのない恋の相手。
どんなに優れた泥棒でも盗めるはずがない。
だから、幻。

沙里奈が私に残したメッセージ。

沙里奈…

覚えている？

あの事故の時、暗闇に突き落とされた私の耳にあなたの声が届いたの。

何度も、何度も、あなたは倒れている私を揺すって繰り返したわ。助けて。助けてって。

それは、あなたが周りの人に怪我した私の助けを求める声だったのだろうけど、私には、あなたが私に助けを求めているように聞こえたの。

助けて、ひとりぼっちにしないで、って。

その叫びは、私と同じくらい一人に思えたの。

だから、強く願った。

一緒にいたい。

友達になりたいって…。

涼子はゆっくりと立ち上がる。

今年、最後の蝉の声が絶え間なく響く。

透き通るような青空は光に満ちあふれ、どこまでも続いている。

「久しぶり！元気だったかー」

耳元でテツの声が炸裂した。

服部は今では学校中にその名を知らない者はない人物を見て、つい溜息を吐く。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

夏休みが終わってこうまで元気なのはコイツぐらいだ。

「どうして、テツはそんなに元気なんだ？」

「どうして、服部は元気じゃないんだ？」

本当に不思議そうにテツは服部の顔を覗き込む。

その顔は日に焼けて、真っ黒だ。

「服部、夏休み何していたんだよ。携帯に全然でないし」

「そうだった？」

「何だよ。隠すなよ。友達だろ」

テツの口から白い歯が覗き、服部の耳には未だに校庭の桜の木で騒いでいる蝉の声が残った。

青い空よりも青い瞳が遠くの空のさらに遠くを見つめる。

太陽から与えられた光を髪に掻き集め、そのブロンドはさらに輝きを増す。

「お久しぶりです。ミスター」

聞き覚えのある綺麗な日本語に老人は足を止めた。

目の前にはニツコリと微笑むイギリス人がいた。

「…久しぶりじゃな。アル」

「相変わらず、元気そうですね」

真昼の太陽の下、アルの瞳が翳る。

「タイチに逢いました。例の仕事させたそうですね」

人通りの少ない路地を老人は何も答えず、一度止めた足を進める。

「あの仕事に特にタイチは必要があるように思えません。あなた一人で十分でしょう」

流暢な日本語が淡々と続く。

「本当にあなたは残酷です」

答えは返らない。

「1年前、私に命の短い少女の話をしました。その瞳の綺麗な少女は、その時、まだもう一人の少女の光を奪っていませんでした」

月の裏であいましょう。

「ワシは手相見じゃ。僅かに外に表れる人の運命を見る。しかし、それは絶対ではない。時には、運命は流れを変える」

「貴方は怖い人だ。運命を変えるのは楽しいですか？他人の人生を弄ぶのは楽しいですか？私には貴方があの少女が死ぬ時間さえも知っているように思えました」

「分からない事の方が遙かに多い」

肯定にも似た返答を返し、熱い太陽の光を、老人は涼しい顔で受け止める。

「16年間、私はあなたの元にいましたが、結局、私にはあなたの仕事を理解できなくなり、日本から去りました」

「藤井には会ったのか？」

「いえ。彼は好き嫌いの激しい完全主義者です。盗みに魅力を感じつつ、それを認めない」

「16年前と少しも変わつとらん」

「私には貴方も藤井も理解できません。盗みはビジネスです。貴方のやり方は残酷です」

「では、何故、日本に戻ってきた？」

「もちろんビジネスです」

不意に風がアルの髪を撫で、青々と茂る木々の葉をさらさらと揺さぶる。

アルは眩しそうに太陽を眺めた。

その瞳は優しく太陽の光を反射する。

「私は服部太一の命を盗みに来ました」

ジジ：

一匹の蝉がうるさい音を立て飛び立つ。

老人は足を止め、暫く飛び立った蝉の行く手を見ていた。

その額から僅かに汗が滲み出た。

月の裏であいましょう。

病院の自動ドアが開くと、真っ青な空が涼子を迎えた。

「もうすぐ、夏が終わりますね」

眩しそうに指の隙間から太陽を眺め、涼子は大きな深呼吸をした。横を歩いていた中年の女性が噴水の前で足を止める。

「そうね。涼子ちゃんは明日から学校？」

優しい微笑みで涼子を振り返ったのは、沙里奈の母だった。

その手には娘からの最後の手紙が優しく握られている。

「はい。…光が戻った日、母が言いました。ボランティアは自分の為にするものだ。自分の時間とお金を少しあげる代わりに笑顔と感謝の言葉を貰って自分が幸せになる。上も下もない対等な物々交換みたいなモノだって。おばさん。教えて下さい。沙里奈がくれたこの光の分、私は沙里奈を幸せにしてあげられたでしょうか？」

「勿論よ。沙里奈は幸せだった。涼子ちゃんを見ていると分かるわ。人が人を幸せにするのは案外簡単なのかも知れない。ねえ、教えて。沙里奈があげた光は、どのくらい涼子ちゃんを幸せにしてくれるかしら？」

そして、涼子はハッキリと言った。

「永遠にです」

噴水から湧き出る水は光を反射し、キラキラと輝いた。

光に揺れる水面を涼子が見下ろすと、静かな微笑みを浮かべる自分がいる。

そして、水面の瞳にはさらに自分が写る。

涼子を見つめて、幸せそうに微笑む沙里奈の瞳がキラキラと輝いている。

涼子は飽きることなくその澄んだ沙里奈の瞳を見ていた。

File 3：永遠の瞳（完）（後書き）

長い連載をお読みいただき、ありがとうございます。もうしばらくお付き合いくださいm（）（）m

月の裏であいましょう。

「結婚ですか？」

大道虎之介は整った顔を曇らせ、自分の父親を見た。

日本の経済界に君臨する大道グループ会長。

最も近く、最も遠い存在。

「驚くこともあるまい。お前ももう27歳だ。相手は隈田代議士の末娘だ。文句あるまい」

「……」

「浮かない顔だな。好きな女でもいるのか？それでも構わん。愛人は何人作ろうが自由だ」

老いた父に虎之介は静かな眼差しを向け、穏やかに微笑む。

「あなたがそうしてきたように？着物の似合う物静かな母より、イブニングドレスが似合う華やかな女性にいつも心惹かれておいでしたね。それとも、外へと心が向かうのは先代が建てた純日本風の家がお嫌いだからですか。お父さん」

「これは、手厳しいな」

大声をたてて笑う父親から虎之介は僅かに目を反らした。

今日は少し口が過ぎたな。

いつもより皮肉めいた言葉に自嘲した虎之介だが、目の前の父親は未だに笑っている。

ようやく父親が出ていくと、虎之介は煙草に火を付けた。

25階建て大道グループ自社ビルの最上階、社長室に煙草の煙が漂う。

「どうなさるおつもりですか？ご結婚」

美しい秘書が虎之介に近づき、細い腕をその首に絡ませた。

虎之介は煙草の火を消し、秘書の短いスカートの中に手を滑らせた。

「結婚したら、私も愛人の一人に加えることを忘れないで下さいね」

「勿論。ゲームはみんなで愉しむモノだ。私はこれでも父に感謝しているのだよ。人生のゲームを愉しむに最高の舞台を用意してくれ
たからな……」

言葉の続きを秘書の唇に奪われる。

去年の夏に社長に就任して以来、大幅に事業を拡大し成功を収めてきた虎之介は、業界のプリンスとしてその名を知られていた。

カコーン

獅子脅しの叩く音が秋の風を引き締める。

静寂に一本筋の通った音が響き、高級料亭の庭園に秋の香りが漂う。

虎之介はにこやかに、目の前に座る代議士の娘を見た。

「ユ、ユニークなお顔ですね」

仲人の二人が顔を引きつらせた。

虎之介らしくない失言だ。

(あちゃー)

虎之介は目の前に座るユニークな顔の見合い相手を申し訳なさそうに見た。

(褒め言葉が思いつかない)

社交辞令。

お世辞。

虎之介の左脳がフル回転しても、この見合い相手に合う美辞麗句が見付からない。

虎之介は心の中で溜息を吐く。

カコーン

広々とした庭園は静かに時が流れる。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

見合いの席と庭を挟んだ部屋には、老人と初老の男が座っていた。
「結構なお手前で」

初老の男は老人が立てたお茶を作法通りにすすり、ゆっくりと茶碗を置いて自分よりも遙かに年の離れた人物に礼を払って言った。

老人は涼やかに微笑み、立派な庭園に目を向けた。

「この庭の紅葉は見事ですな」

老人のその言葉に、男は静かに頷き咳払いを軽くしてから話をし始めた。

「実は、私がお世話させて頂いている若旦那様のお見合いがこの料亭でありまして、お相手は隈田代議士のお嬢様なのですが…」

老人は大袈裟に驚いて見せた。

「ほほう。大道グループと、政界の大御所が手を結ぶ。これは大スクーブですな」

「はあ。私もまたとない縁談だと思つて下りますが…」

「何か問題でも？」

「虎之介様があまり乗り気ではないのです。あの方は幼い頃から帝王学を始め、ありとあらゆる学問を修められ、大道グループの跡継ぎとして育てられた方です。冷たいとお考えになるかも知れませんが、結婚はビジネスにおける戦略の一つに過ぎません。虎之介様もそれは承知の筈です。血の繋がった父親にすら一線を引いて向かい合うお方です。その様な事に私情を挟む方ではございません」

「小柴殿は何か理由があるとお考えですか？」

小柴と呼ばれた初老の男は難しい顔で、老人と向かい合う。

「実は、ここ一年程虎之介様に不審な行動が見受けられまして、興信所に素行調査を依頼したのです」

「それで何か分かりましたか？」

小柴は首を横に振る。

「全く掴めません」

「では、小柴殿の考え過ぎなのではありませんか？」

「会長も、その様におっしゃいました。おそらく女のところにでも

行っておるのだらうと」

「虎之介殿は女性関係が派手らしいですな」

「それは構わないのです。しかし、もし別の女性との結婚を考えていらつしやり、それが理由で結婚を渋っておられるのなら、かなりの問題です。結婚相手と愛人の区別が付いているのなら問題はありません」

「父親がそうであつたように？…これは失礼」

「いえ。いいですよ。公然の秘密ですが、虎之介様も会長の愛人の子供です。本妻は子供の出来ない体ですから仕方なかつたのです。しかし、本妻である奥様は自ら立派に虎之介様を育てられました」
今は亡き婦人に小柴は敬意を払つた。

「会長は華やかな舞台や女性が随分お好きらしいとお伺いしておりますが、虎之介殿の美貌はモデルの愛人譲りのものですね」

「さすがに、よくご存じですね。そこで、先生に虎之介様の素行調査を御依頼したい。先生はその道のプロだとお伺いしております」
老人の瞳が赤い紅葉の色に染まつた。

カコーン

「冗談じゃねえよ。何でオレがあんなクマと結婚しなきゃなんないんだよ」

一時庭園へと避難した虎之介は、池の側でしゃがみこみ、中で泳ぐ一千万円相当の鯉を睨み呟く。

「これは見事な鯉ですな」

静かな声の先を見上げると、一人の老人が池を覗いていた。

「先ほど小柴殿に相談を受けましてね」

「小柴に？」

カコーン

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

一葉の紅葉が池に舞い落ちる。

「…と言っわけで、小柴殿に素行調査を依頼されたのじゃが、どうする？ロビン」

老人は微笑みながら虎之介を見下ろした。

「素顔の時にその名前で呼ばないで下さい」

虎之介は苦笑いを浮かべ老人に言った。

「だいたい、あなたが一番よく知っているでしょう。僕がその時何をしているかは。あなたが僕をこのゲームに誘ったのだから」

「そうじゃったな」

「ところで、あなたはこんな所で何をしていたらっしゃるのですか？まさか、小柴の愚痴を聞きに来たわけではないでしょう？」

「少し調べたいことがあってな。小柴殿には偶然会った」

「あなたにも分からない事があるんですね」

秋の穏やかな風が素顔のロビンを静かに撫でる。

「たっ、大変です。虎之介様」

不意に静寂がうち破られ、振り向くと血相を変えた小柴が走って来る。

「会長が倒れました」

「父さんが？」

カコーン

ジリリリリリリリ……

凄まじい警報音が店内に鳴り響く。

服部は次々に現れる警官達に頬を引きつらせた。

「げっ。マジ？」

警官達から素早く身をかわし、今夜の獲物を握りしめた。

「ロビンの奴、しくじったのか？」

高級デパートの紳士服売場は、警官の制服でこった返した。

「はっ、はっ、はっ、はっ。これでハットリも袋の鼠だ」

長谷川宣雄は意気揚々と、ハットリのいる紳士服売場へと走った。

「自分で予告状出しといて、そりゃないぜ。ロビン」

ハットリ君のお面が、ライトでその顔を露わにする。

この時間に来るはずのない警官達と、来るはずのロビンにイライラしながら、内ポケットに手を突っ込んだ。

大勢の警官達の後ろに長谷川が追いつき、ハットリに向かい叫ぶ。

「観念しろ」

長谷川が服部を威嚇するため、銃を構えた。

ポケットに突っ込んだ服部の右手が空を切る。

カッ

目が潰れるほどの光の渦と共に轟音が長谷川の耳の鼓膜を振るわした。

光と音のみの爆弾である。

特殊閃光音響弾はかなりの威力だ。

「太一。昨日の夜どこか行ってたのか？」

父親の思いがけない言葉に、テレビの画面から服部太一は顔を上げた。

「夜中に長谷川鉄郎君から電話があつて、部屋に起こしに行ったがいなかったぞ」

「その時間、たぶんコンビニに行っていた。お腹空いたから……」
嘘が自然に口をつく。

「そうか……」

父親は納得したように読みかけの新聞に目を戻した。

新聞には『怪盗ハットリ』の記事の隣に大道グループ会長入院の記事が並んでいた。

水晶が暗闇に不気味に光る。

黒に身を包んだ女が目を瞑り、両手を重ね合わせぶつぶつと口の中で何かを呟いている。

その女と水晶を挟んだ向かいには、落ち着かないように中年の男が座っていた。

「大きな霊の力があなたを包んでいます。今はその力に身を任せるときです。さすれば、迫り来る波に呑み込まれる事はないでしょう。しかし、油断はなりません。今は大きな変革の時です」

中年の男は固唾を呑み込んだ。

「先生の言つた通り、女房と娘には逃げられました。今まで何とか会社を潰さずやってこられました。ありがとうございます」

男の自分に対する畏怖と敬意を読みとると、女はゆっくりと頷き、袋に入った札束を受け取った。

「実は、夏頃知り合いに紹介された方に先生の事をお話ししましたら、是非お会いしたいとおっしゃりまして」

女の目がキラリと光った。

そこに入って来たのは、贅肉で満たしたお腹重たそうに抱え、どこかおどおどした目つきの小物だった。

「大道グループ会長の弟、大道健次郎さんです」
女の口元が僅かに弧を描く。

自分の判断の正しさと妹の調査の正確さに満足し、絵里は頭の中で新しい獲物の顔を値踏みした。

全てが予定通りだ。

(次は理真にも、働いて貰わないとね)

大道グループ自社ビルの最上階、社長室の椅子に座った大道虎之介が、新聞をパサリと投げつけ一人呟いた。

「怪盗ハットリ本人でさえ出したことのないオレの専売特許を。いい度胸じゃないか」

虎之介は新聞を投げつけた拍子に舞い落ちた一枚のカードを、睨み付ける。

「おい。ロビンはどこだ？」

服部は景気よく『日本占い師協会本部』の扉を開いた。

「どうした？ハットリ。ロビンはいないぞ」

「どうしたも、何も……」

服部は今日付けのスポーツ新聞を、老人のデスクに叩き付けた。
老人はその見出しに目をやり記事を読み上げた。

「怪盗ハットリ。次は大道グループ会長の遺言状か。先日、入院した大道グループ会長宅と警察に、怪盗ハットリから予告状が届き、会長が万が一の時のためにしたためた遺言状を盗むと……」

「オレはこんな話聞いてねえぞ。ロビンか？」

「私も知らないわ」

ロビンの声に服部は振り返った。

「ロビン！前はよくもバックれてくれたな。お陰でかなりやばい状態だったんだよ」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「悪かったわね。急用が出来たのよ。でも、あんな仕事ハットリなら余裕でしょ。それより、その予告状は……」

ロビンはソファにその美しい肢体を滑らせた。

老人は白い髭に包まれた口元を動かす。

「怪盗ハットリの名で、大道家に予告状が本当に出されており、ロビンが何も知らないとなるといつたい誰が」

老人がロビンに対し言葉を選び尋ねる。

珍しく少しいらだったロビンはその美しい顔を歪めた。

「だいたいの想像はつくわ。ただ、問題はあの小心者がそんな事を考えつき、実行に移すか、よ」

「裏に誰がいると？」

老人は顎髭を撫でる。

「何だよ。知ってるのか？誰だよ、勝手に人の名前使った奴」

服部はムツとして、ロビンに突っかかった。

「これは、私達に対する挑戦ね。受けてあげましょう」

ロビンの瞳が冷たく光った。

「何ですって！お姉ちゃんがこの予告状を出したの?!」

「そうよ。ちなみに盗むのは、アンタよ」

「どうして?」

「当たり前でしょ。麻美が頭脳プレーだとしたら、理真は肉体派なんだから」

「にこ…」

理真は返す言葉がなかった。

確かにその通りだ。

表に立ち仕事を取り、指示を与える姉。

情報収集や計画のアイデアを出す妹。

理真は体を使い計画を実行するしか出来ない。

「いいじゃない。キャッツ何とか…に出てくる、次女の主人公みたいじゃないのよ」

絵里は変な慰め方をした。

「どうして遺言状なの?」

どうせろくな理由でないと知りつつ理真は絵里に訊く。絵里は簡単に理真に説明した。

「傾き掛けた貿易会社の社長である栗原に大道グループの弟、大道健次郎を近付けたのよ。今の栗原は昔と違って御しやすい、見事に私のシナリオ通りに動いてくれるわ」

「そんなに弱った人から、お金取っているの」

「何甘い事言っているの。仕事は仕事。その金額に見合う働きをしてきたわ」

絵里なりに哲学があるらしい。

確かに、絵里は栗原に霊視と偽り、会社建て直しの為の情報をかなり与えていた。

その辺の経営コンサルタントより遥かにマシな働きだと自負して

月の裏であいましょう。

いる。

「大道グループ会長の弟は、…弟と言っても義理の弟。もつとも現会長のほうが、大道グループ先代の長女へ婿入りした他人。本当の血筋で言えば、その義弟の方が正式な跡取りだったのだからうけど。しかし、先代は現会長の経営の才能にほれ込み、長女と結婚させ、婿入りさせたの。まあ、先代も後継ぎとして諦めるほど、その弟は凡才だった」

絵真はゆっくり息継ぎをして話を進めた。

「去年の夏、大道ホールディングス代表取締役社長に、その会長の一人息子が就任したのは、知ってる？」

「…知っているわけではないでしょ」

「大道虎之介よ。めっちゃめっちゃ頭の切れる男で、グループ内の組織を整理し始めたの。そこに、負債を抱え込んだ自分の叔父が社長をする子会社が目に付いた。叔父は自分の甥から引責辞任を迫られた。さらに、大道家の財産問題があるわ。大道家は戦前から続く由緒正しい財閥の一つよ。その総資産額は天文学的数字だと、言われているわ。大道家では慣例によってその全財産を頭首が管理することになっている。大道家の人間は多額の資産を所有していても自分はその財産を勝手には処分できないの」

「つまり、大道家の頭首であるその会長は、その天文学的数字の財産の権力を独り占めしているってこと？」

「そういうこと。あらゆる方面に顔が効くから、誰も彼には逆らえないわ。でも、さつきも説明したけど、所詮、現会長は血のつながらないよそ者。それで、先代は死の間際に、現会長に約束させたの」

「何を？」

「大道の血の繋がりが無い人間を次期頭首に選ばないことを。大道虎之助は現会長愛人の子供。大道家の血は入っていない」

「じゃあ、虎之助は後継ぎにはなれないの？」

「結局、そんな約束は無意味なの。虎之助は実子として戸籍に入っているし、それに関して法的に覆せるのは本人か親だけよ。とはい

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

え、大道家の中には疎ましく思う者もいるってこと」

「それで、どうして私が遺言状を盗まなきゃいけないのよ」

なかなか結論が見えない理麻はいらだった。

「だから、虎之助を後継ぎにすることを条件に義理の弟に財産を譲ることを約束したの。それで大道家の人間たちを納得させたわ。そして、それは、遺言状に書かれているの。現会長の死によって弟に財産が入るの！」

「もつとわかんない。だったら、どうして遺言状を盗むの？」

「財産の管理は頭首の仕事で、簡単には勝手に処分できないようになっていて、所有権はそれぞれにあるわ」

「で？」

「…約束をした財産を素直に義弟に譲ると、おバカな義弟が何をするかわからないと、現会長が考え直して、遺言状を書きなおした。」

…って噂が流れたの」

「あくまでも噂よ。でも、その新しい遺言状があれば、そっちが正式な遺言状と認められるわ。だから、その新しい遺言状を盗むのよ」

「でも、遺言状なんて盗まれても、また書き直せば済むことじゃない。入院したって死ぬわけじゃないでしょう？」

「ところが、麻美が調べた処では、会長は意識不明の重体よ。遺言状なんて書き直せるような状態じゃないわ。つまり、新しい遺言状が無くなれば、古い遺言状が効力を持つ」

「でも、その弟に財産残さないとその新しい遺言書に本当に書いてあるかどうかって単なる噂だよな？」

「内容までは、確かめようがないけど、新しい遺言状が存在するのは間違いない。でも、死んで、開けて確かめてからじゃ遅いの。最初の遺言状は、大道家の顧問弁護士が持っているけど、新しい遺言状の在処はわかってないわ」

理真は気が進まない顔である。

問題はそれだけじゃない。

何よりの問題は、

月の裏であいましょう。

「どうして怪盗ハットリの名を使うのよ」

「理真は本当に頭悪いわね。ただ遺言状が無くなるよりも、そっちの方が世間も警察も納得するでしょう。怪盗ハットリは毎回毎回、意味不明でつまらないモノ盗むから、遺言状なんて盗んでもおかしくないのよ。それに、遺言状の場所が分からないから、警察が動けば分かるでしょう」

以前、怪盗ハットリと思われる人物にマルチャンを破壊され、あまり乗り気でない麻美が絵里に呟く。

「でも、怪盗ハットリの名を使い、本物が黙っているのでしょうか」
その瞬間、理真の瞳が輝いた。

「やる。私、やる」

予告当日。

大道家の贅を極めた日本庭園は、先代の趣味に合わせ四季折々の植物が咲き誇る。

庭師に時間を掛けて手入れさせている優雅な木々達は秋の色に染まっていた。

しかし、その夜、その庭に不似合いな制服に身を包んだ警官達が、厳しい顔つきをして立っている。

「遺言状はこの中にあるのですね」

テーブルに置かれた小さな金庫を指差し、長谷川宣雄は、財界のプリンスと詠われる大道虎之介に慎重に確認した。

「はい。確かに」

虎之介は静かに答えた。

その誠実そうな雰囲気、長谷川も気を引き締めた。

ピシッとスーツを着こなし、しなやかな肢体を持つ業界の権力者、見て警官達は口々に囁いた。

「アレが大道虎之介か。かなりの切れ者らしいぞ」

「いい男だな」

警官達に囲まれリビングのソファに腰掛ける虎之介は、圧倒的な存在感でその場にいる者全ての心を惹き付ける。

そこに一人の小物が、肥満体を出来るだけ小さく見せるように、そこそと入り込んできた。

虎之介はその人物にも礼を欠かさない。

「今日はわざわざ、来て頂いてありがとうございます。叔父さん」

虎之介は、今夜、偽怪盗ハットリの手助けをするであろう男に、ソウと知っていて、丁寧な挨拶をした。

そして、虎之介は金庫を指差して微笑んだ。

月の裏であいましょう。

「あの中に、遺言状があります」

大道健次郎はゴクリと唾を呑み込んだ。

(さあ。どう出る？偽ハットリ)

虎之介の中のロビンが不敵な笑みを浮かべた。

服部は時計に目をやった。

「10時か」

予告状の時間は12時だ。

そろそろ家を出た方がいい。

ベランダの戸に手を掛け呟く。

「偽ハットリの顔でも拝みに行くか」

ピンポーン

軽快なベルが鳴った。

(この時間にお客？)

母親が応対しているようだ。

その相手の声に服部は暫く動けなかった。

「太一。テツ君よ」

予想通りの展開に仕方なく玄関に向かった。

「どうしたの。こんな時間に」

服部の質問にテツは笑いながら答える。

「悪いーな。こんな時間に。これから一緒に遊びにいこーぜ」

「今から？」

今夜は困る。

偽ハットリの正体を掴み、そいつの目的を阻止しなければなら
ない。

服部は母親を振り返った。

「もう。夜遅いし、明日にしたら？」

服部の期待通りの母の答えに、テツは一生懸命説明し始めた。

「でも、今日はハロウィンでしょ。パーティーがあるんですよ。今日
でない」と

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「ダメだよ。母さんがああ言ってるし…」

隣で聴いていた父が口を挟んだ。

「いいじゃないか。母さん。太一も、もう高校生だし自分の行動に責任の持てる年頃だ。太一、あんまり羽目を外すんじゃないぞ」

寛大な父にそう言われ、服部は行かないとは言えなくなつた。

「おばさん。明日は休みだから太一君には今晚家に泊まって貰います。じゃあ、行こう！」

「え？」

テツは満面の笑みを浮かべた。

「今夜は一晚中付き合つて貰うよ」

服部はテツが自分を怪盗ハットリと疑っている事実を思い出し、苦笑いを浮かべた。

(そう言う事ね)

「何なんだ。これは？」

「言つたる。ハロウィンだつて」

どこから用意したのか、テツとお揃いの真つ青な忍者の衣装に着替えさせられ、服部は頭を抱えた。

まさか、本当にハロウィンパーティーに連れてこられるとは…

テツは嬉しそうに店内に入った。

店内は怪しい変装をした若者達でごった返している。

「テツは、こんな所よく来るの？」

「こんな所つて？友達にチケット貰つたんだ」

軽快なヒップホップと、お酒に酔つたピエロとチャイナドレスの美女が話しかけてきた。

「かわいい〜。忍者？」

チャイナドレスの女が二人の真つ青な衣装を指差し微笑みながら訊ねる。

「忍者ハットリ君だよ」

テツはどこから調達したのかハットリ君のお面を取りだし、無理

矢理服部に被せた。

(さて、どうするかな?)

服部は溜息を吐き、腕時計に目をやる。

針は11時を差している。

「飲み物、何する?」

バニーガールが服部達に声を掛ける。

「じゃあ。ブルドツ」

と、言いかけた服部を無視し、テツが元気に言った。

「オレンジジュース。2つね」

バニーガールはクスツと笑いチケットの半券の代わりにオレンジジュースを出した。

「ハットリ?」

不意に後ろから声が掛かる。

そこにはウサギが立っていた。

ウサギはその大きな顔を外した。

服部は見覚えのある顔に出会う。

「アキラ」

春に“微睡みの少女”を捜していた青年だ。

アキラはチラリとテツを見てから、グツと服部の首に手を回し耳元で囁く。

「今日は仕事じゃないのか?」

怪盗ハットリが大道家に現れることを新聞が何かで知ったのだらう。

「アレは偽物だよ」

服部は不意に思った。

ソウだ。

アレは偽物だ。

ほっとけばいい。

そうしたら、『怪盗ハットリ』は現れ、テツに疑われる事は無くなる。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

が、…ロビン怒るかなあ。

何故かロビンは真剣だった。

しかし、今夜は何の作戦も立てていない。

出たトコ勝負。

ロビンがどんな変装するかも知らない。

ロビンの変装はいつも完璧だった。

服部さえも本物との区別が付かない。

「その偽物、ほっとくのか？」

にやりとアキラが笑った。

アキラは以前とは、確実に変わっているような気がした。

相変わらず遊んでいる感じはしたが、ある種の迷いが無い。

「なんだよ。何こそこそオレ抜きで話してんだよ」

テツが後ろから服部をどついてきた。服部は頭を抱えてテツに振り返る。

「何でも無いよ」

ウサギの着ぐるみを身に纏いその首を片手に抱えたアキラが不意に思いついたように、指を鳴らした。

「いいコト思いついた！」

肥満した男がトイレの便器に腰掛けて携帯に話しかけている。

「リ、リビングのテーブルに金庫があります。…は、はい。…はい。

…あ、はい。窓からですね。分かりました。やります」

男はびくびくしながら、トイレから出てきた。

後ろから自分を呼ぶ声にすら、ビクツとして振り向いた。

「どうしたんですか？叔父さん」

「虎之介君…。そ、それにしても、何故『怪盗ハットリ』は遺言状なんて盗むんだろっな。ハハハ…」

笑う事に失敗し、顔を引きつらしたまま大道健次郎は虎之介の顔から目を外した。

「何故かは、ハットリが捕まれば分かります」

「し、しかし、相手はあの怪盗ハットリだ。そう簡単に捕まるまい」

「いえ。必ず捕まえます。大道家に、いや、私に刃向かうなんて、どんなに愚かなことか分からせてあげますよ。そうでしょう。叔父さん」

甥の冷たい眼光に、叔父は体を凍り付かせた。

その時、その間抜けな叔父は初めて自分の無謀な試みに気付いた。自分の敵は自分など指先一つで潰してしまう程の人物であったのだ。

しかし、その間抜けさ故に、叔父は未だに、甥にこの陰謀を知られている事実気付かずいた。

服部は二杯目のオレンジジュースをテツに渡し何気なく訊く。

「ねえ。テツは僕が怪盗ハットリだったらどうするの？」

テツはオレンジジュースを口に運びつつ答える。

「もちろん警察に連れていくさ」

明快なテツの答えに服部は笑った。

「テツは、僕が怪盗ハットリの方がいいの？それともソウでない方がいいの？」

「どうしてそんな事訊くんだ？」

不思議そうな顔に、僅かに眠気が見え始める。

服部はそれを確認すると後ろのアキラに肩を竦めてみせる。

そして、グラスに口を運ぶテツにもう一度視線を送る。

「何かこのオレンジジュース苦いな……」

そう言いながら唐突に眠りだしたテツを、服部は優しく抱き上げ、テツの質問に答えるように言った。

「どうしてかって？それも秘密だよ」

服部はゆっくりと隅のベンチにテツを寝かせてから、テツの頬を両手で包み込む。

「ハットリ？」

アキラの聲が後ろから聞こえると、服部はテツの両方の頬をグツと抓った。

「バカ」

テツのどことなく幸せそうな顔に一言投げつけ、テツから貰ったお面を手にその場を去った。

警官の制服を着た理真は木陰から、3階リビングの窓から漏れる明かりを見上げた。

側には理真が睡眠薬で眠らせた警官がいる。

（午前零時にブレーカーが落ちる。窓から金庫が落ちる。それを持って裏口から逃げる。いざとなったら遺言状を灰にして……）

理真は今夜の段取りを頭で整理しながらも、心は別にある。

「ハットリ来るかなあ」

午後11時59分

「後1分」

長谷川宣雄は腕時計に目をやる。

月の裏であいましょう。

広いリビングには、長谷川の他に、大道虎之介、大道健次郎、弁護士、執事の小柴、そして、5名の警官がいた。

虎之介は頭の中で、カウント仕始める。

理真はジツとブレーカーのもたらず闇を待った。

叔父の大道健次郎は手がグツシヨリと汗ばんでいる。

長谷川のカウントが音になる。

「4, 3, 2, 1…ゼロ」

カチッ

闇が広がった。

想定の範囲内だ。

「非常灯を！」

長谷川が叫んだ瞬間だった。

パン！

パン！パン！パン！パン！

「銃声だ！」

誰かが叫んだ。

パン！パン！パン！…

「うわ。避難しろ」

暗闇の中、辺りは騒然となった。

「何の騒ぎ？」

理真は顔を顰めた。

予定通りの闇だが、この銃声は予定にはない。

しかも、金庫は降ってこない。

金庫を落とすはずの人間は、銃声に驚き頭を抱え床に蹲っている。床に蹲っている叔父を、虎之介はリビングのソファに座ったままのんびりと見下ろし、首をひねった。

「どうして、爆竹が？」

この音は銃声ではなく爆竹の音だったのだ。

突然の闇に、爆竹の音。

誰かが『銃声』と叫んだその声に、正気を失った警官達が振り回されている。

虎之介は辺りを見回した。

「静まれ。落ち着くんだ。早く非常灯を」

長谷川の声が、騒ぎに呑み込まれている。

念のために持ったはずの懐中電灯を騒ぎで落としてしまい、他の警官達も銃声を間違えた音にびっくりしてそんなことも忘れている。

未だ警官の騒ぎ声や爆竹の鳴り響く騒然とした中に、違う空気を虎之介は感じた。

「イツツ ショータイム！」

その軽薄な声と共に、闇が一瞬にして光の世界に姿を変えた。

そして、光の中に非現実的な空間が形成されていた。

ピエロ。

チャイニーズ。

タキシードの紳士。

バニーガール。

サムライ。

ウサギ。

インド人

かっぱ。

月の裏であいましょう。

セーラー服。
囚人。
警察官。

高速に点滅するフラッシュライトにスローモーションな世界。
さらにイカれた音量で唸るヒップホップやレゲエが非現実的な世界を盛り上げている。

一人落ち着き払い、呆れたような虎之介の目に真つ青な衣装が飛び込んだ。

…忍者！

それを見付けた途端虎之介は低く笑った。

突然現れた意味不明の集団に理真は、呆然としたが、素早く我に返った。

「なんだかよく分かんないけど。もしかしたらチャンスかも」

「全くアキラはイカれてるよな。こんな事思いつくなんて」

酔いの回った店の連中をアキラはここまで連れてきたのだ。

自分で鳴らした爆竹に、『銃声だ』と大声を張り上げたのはアキラだ。

服部は、ここにはいないテツが用意した忍者の衣装に、ニッコリ微笑むハットリ君のお面を顔に付け笑いをこらえた。

「さて、偽ハットリ君はどこかな？とりあえず遺言状でも捜すか」
不意にロビンの事が気になる。

ロビンはこの状況にどう思うかな。

携帯で教えておくべきだったかな？

まあ、いつか。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「きつと呆れながらも笑ってるだろうな」

服部の目が長谷川を捉え、慌てて非現実の世界に紛れ込み、その途端長谷川の怒鳴り声が聞こえる。

「誰だ！お前等は！」

ニツコリ笑うウサギが答える。

「怪盗ハットリです」

鳴り響く爆竹に冷静さを失った警官達と、お酒と音楽に酔いしれる無国籍なダンサー達の間をすり抜け、警官姿の理真は簡単にリビングに行き着いた。

誰も、金庫に無関心だった。

長谷川さえもこの場を押さえるのに走り回っていた。

理真はリビングのテーブルに、そっとしゃがみ込みニンマリして金庫を手にした。

「怪盗ハットリ参上、なんてね」

カチャ

爆竹やヒップホップに混じり確かに聞こえた撃鉄の音に、理真は顔を上げた。

「アンタが偽ハットリか？」

妹に叩き込まれた知識の中にいる大道虎之介が、自分に銃を向けている。

周りの非常識な空間では、この非現実的な光景でさえも普通だった。

誰も、あの大道虎之介が銃を人に向けている不自然さに気付かない。

「女か？」

虎之介は理真に銃口を突き付けたまましゃがみ込んだ。

「何故、偽物だと？」

理真はこの状態でさえも平静を装う強さを身につけていた。

そんな理真の顔に、虎之介の記憶力から、以前に見た事のある顔が弾き出される。

ハットリのマラソン大会。

一緒にいた女子校生か？

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

理真はそんな虎之介に気付かず続けた。

「怪盗ハットリの正体は誰も知らない。私が偽物だと分かるのは、私と本物の怪盗ハットリだけのはず」

この状況でこんな女子校生にどこからこの強さが出て来るんだ。

不思議そうにこの女子校生を見る虎之介に、理真は瞳を輝かせた。

「もしかして、知っているの？」

「え？」

「怪盗ハットリが誰なのか知っているの？」

虎之介は暫く理真を見ていた。

「教えて。お願い」

この強さの理由に、虎之介は吹き出しそうになった。

「服部…、いや、ハットリが好きなのか？」

爆竹とヒップホップに踊り狂う人々と、逃げまどう小心の警官達の間をすり抜けた服部は、煩わしそうにお面を取り外した。

広がる視界に銃を持つ大道虎之介とソレを突き付けられる警官の姿を発見した。

警官の方は柱に遮られ顔は見えないが、大道虎之介の顔は新聞で確かに知っていた。

虎之介は真つ青な忍者姿の服部に気付き、ニツコリと微笑んだ。

「遅いじゃないか。ハットリ。それにしても今夜は随分派手な衣装だな」

思いかけない虎之介の言葉に目を見開く。

「どうして…？オレを知って…るのか」

肩を竦めた虎之介の隣にいる理真が、身を起こそうとする。

太い柱が警官姿の理真と服部を隔てていた。

「ハットリ？」

警官から発せられた理真の声に、服部はピタリと体を強ばらせる。理真の角度からも服部が見えない。

理真はハットリを見ようと立ち上がるうとした瞬間。

ポーン

凄まじい爆音と共に爆風が大道家のリビングを襲った。

ポポーン

さらに響く爆音は、服部が使った特殊閃光音響弾ではない。

炎は別の世界を構成し始め、踊り狂っていた無国籍な人種達や警官達をさらに混乱の中に放り込んだ。

木造立ての建物は赤い炎に包まれ、見る見る内に逃げまどう人々を襲った。

いきなり響いた爆音を聴き、長谷川は混乱を極める民間人と警官達を、何とか外に避難させようとした。

「全く、今夜はどうしたと言っんだ」

「警部。大変です」

律儀な長谷川の部下が、崩れ落ちる梁の間を潜って長谷川に近づいた。

「たった今。何者かがこの家に爆弾を仕掛けたとの情報が入りました」

「もう、とっくに爆発してある」

「いえ。もっと規模の大きなヤツだと」

「なんだ、コレは？」

凄まじい爆音に、服部は顔をしかめる。

周りの警官達も、服部と共にこの屋敷へパーティに来た仲間達も、

月の裏であいましょう。

すでにリビングから姿を消していた。

服部は辺りを見渡す。

「理真！」

服部の目に、倒れている理真が目に入った。

「大丈夫。軽い脳震盪だろう」

虎之介は倒れている理真の上半身を抱き上げ、服部の視線に気付くと顔を上げた。

暫く服部の不思議そうな視線を受け、虎之介は溜息を吐いた。

「オレが、分からないのか……？」

「え？」

リビングに煙が充満し始めた。

不意に虎之介は体を強ばらせ、耳を澄ませた。

「隠れる。ハットリ」

「つて、どこに？」

火は大分近づいている。

服部には香気に隠れている場合ではないような気がしたが、虎之介に引つ張られソファの裏に手荒に投げ込まれた。

「大道さん。まだ、そこに居たのですか？早く逃げて下さい」

長谷川警部だった。

「大規模な爆弾がこの屋敷に仕掛けられています。犯人からの声明だと、0時15分ジャストに爆発します。後5分もありません」

「この屋敷のどこにですか？」

「分かりません。大道さんは早く逃げて下さい。今、爆弾処理班を呼びましたから。私はこれから爆弾を捜します」

「警部。5分なら爆弾処理班は間に合いません。私が捜します。こ

こは私の家ですから、私の方が見つけだす確率が高いです」

「しかし、爆弾の規模は、半径50メートルに及ぶとの声明です。危険すぎます」

「50メートル」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

あまりの話に、虎之助ですら一瞬戸惑った。

「いえ。では、尚更、私が捜す方がいい。長谷川警部は付近の住人の避難をお願いします。大丈夫です。私は幼少の頃から、護身術を学んできました。爆弾処理もカリキュラムの内の一つでした」
考えている時間はなかった。

長谷川は真つ直ぐに虎之介を見ると、深々と頭を下げた。

「お願いします」

虎之介は静かに頷いてから、倒れている理真を指差した。

「警部。彼女を連れて行って下さい。おそらく先程の若者の内の一人でしょう」

長谷川は理真を背負い、走ってその場を去った。

「どうやら彼女は、ハットリの正体を知りそびれたようだな。さて、と。ハットリ出て来い。今、聞いた通りだ。爆弾を捜すぞ。時間がない」

「オレは逃がしてくれないワケ？」

大道虎之介に向かって服部はブツブツと言った。

「行くぞ」

そんな服部を、無視し虎之介は走り始めた。

「どこ行くんだよ。だいたいこんなだっ広い家、どう捜すんだよ」

「ハットリなら、民家に爆弾を仕掛けるとしたらどこに仕掛ける？」

虎之介を追いかけながら、服部は考えた。

「台所かなあ」

大規模な爆破を企てるのなら、かなりの火薬が必要だ。

火薬の量を最小限にし、大規模な爆破を試みるなら、ガス管のある台所を選ぶ。

これが、テロリストだったらそう簡単には行かないが、とりあえず時間がない。

可能性が最も高い場所から探すしかない。

「1階厨房」

月の裏であいましょう。

「民家に厨房ねえ……」

炎から身をかわしながら、服部はスーツ姿の素早い動きについて行った。

炎に恐れる事もなく軽やかに障害物から身をかわす後ろ姿に、唯者じゃない、と服部の経験が呟く。

虎之介に続き、階段を下りようと足を掛けた瞬間。

服部の足下が脆くも崩れ落ちた。

前に行く虎之介は素早く服部を捉える。

足下は既に火の海だ。

虎之介の手に掴まった服部は、虎之介の真剣な顔に考えるより先に言葉が出た。

「ロビン？」

火はすぐそこに来ている。虎之介の足場さえも危うかった。

「ロビンだろ」

「そんな事言ってる場合か」

虎之介は力一杯、服部の手を引く。

キラキラと赤い火の粉が目の前にちらつく。

「大道虎之介に変装していたのか」

ドサッ

何とか服部を引き上げた虎之介は、少し呆れたような顔をして呟いた。

「意外に抜けているな……。それとも、ロビンが本物でオレが偽物なのか」

バカな、一人嘲笑うと虎之介は立ち上がる。

二人は階下へ行く程増す煙に身をかがめ、ようやく一階の厨房へと辿り着いた。

爆弾はコンロ下のガス管の側に、あっさりと見付ける事が出来た。

「この振動にも耐えられるなら、震撼装置は付いていないだろう」

そう言つて、虎之介は明らかに不自然な箱を引っぱり出し、爆弾の蓋を開けるため慎重にドライバーを回し始める。

「ロビン。コレは偽ハットリがしたのか？それとも経済界をひっくり返そうつていうバカなテロリストか？それか、大道虎之介に怨みを持つモノの犯行つて所か？」

「偽ハットリはさっきの女の子だ。それから、この家を吹っ飛ばしたところで経済界なんかひっくり返らない。だが、大道虎之介に恨みを持つ者なんていちいち覚えてない」

虎之介はそう言いながらゆっくりと蓋を持ち上げた。

「理真が偽ハットリ？」

その質問は、蓋を持ったままその中身に顔を強ばらせた虎之介の耳に届かなかつた。

虎之介の視線を追い、服部も一緒に爆弾を覗き込んだ。

「この爆弾……」

「ふざけた爆弾だが、コレはオレには解体不可能だ。複雑すぎる」

「……こんなふざけたことをするヤツを一人知っている。アルだ……アルのしそうなことだ」

『TRICK OR TREAT』と書かれたカードがプラスチック爆薬の上に添えられ、解体をより不可能にする為の回路は様々な色に色づけされている。

まるで華やかなプレゼントだ。

「液体窒素つてある？」

「あつたら使っている」

月の裏であいましょう。

「粉碎機は？」

「…解体は不可能なのか？」

「時間は？」

汗が服部の額を伝う。

虎之介は腕時計をカウント仕始める。

「30秒。29、28、にじゅう…」

「無理だ」

そう言いつつも、服部はドライバーを握りしめた。

もう、やるしかなかった。

燃えさかる炎を愛おしそうに眺める双眼鏡のレンズが月明かりにキラリと光る。

そのビルの屋上からは大道家がハッキリと見える。

日本の細い月の下、イギリス人がクスリと微笑む。

「どうする？タイチ」

燃えさかる炎の美しさに月の冷たい光が花を添える。

「そこまでだ。アル」

アルは肩をすくめ振り返る。

そこには、自分に標準を合わせ、月よりもさらに冷たい光を放つ

一人の老人が立っていた。

「あなたに僕が撃てるのですか？」

「お前を育てたワシだから、撃てる」

「ソウですね。残酷なあなたなら、撃てるでしょう。ほら、見て下

さい。あなたが僕に作り方を教えてくれた楽しいけど捻くれものの

破壊者が、タイチを困らせている」

アルは楽しそうに笑った。

タイマーの下にあるパネルから出ているコードを服部は注意深く切る。

「クソッ。これ、ラジコン飛行機の部品だ」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「つまり、これには、タイマーの他に遠隔装置も付いているのか？
17、16、15…」

虎之介は正確にカウントしていく。
服部を嘲笑うかのように組み立てられたアルの爆弾から、服部は
苦渋に満ちた顔で信管を捜す。

信管に繋がる線は、青、黄色、赤。

「どれだ」

恐らく二本は起爆線。

一本は絶縁だ。

青か？

いや、信号機じゃないんだ！

アルがそんな簡単なヒントをオレに出すわけがない。

ヒント？

そうか！

アルはオレに何かヒントを与えているはずだ。
だが、

「わからん。逃げるよ。ロビン。オレはお前と心中なんてゴメンだ。
ロビンと心中なんて、コメディにしかならん」

「酷いな。ハットリを残して逃げられるわけがないでしょう？ここ
が私の家なのに…。10,9,8」

ロビンの声で虎之介は、静かに呟いた。

「え？私の家って？」

コードに添えたペンチが一瞬止まる。

半ば諦めたようなロビンの声で、虎之助はふざけたセリフを吐い
た。

「ハットリはそんなに私との縁を切りたいの？私達、赤い糸で結ば
れていると思っただのに」

「え？」

老人は冷静にアルに語りかける。

「お前の事だ。遠隔操作も可能じゃろう？今すぐ止める。アル」
銃を持つ老人の哀れみにも似た目をアルはジッと見つめた。

ロビンは時計に視線を戻す。

「おつと、3、2、1…」

「赤い糸か」

虎之介のカウントが響く。

「ゼロ…」

「タイチは僕との赤い糸を切ったようです。相変わらず、記憶力がいい。夏に交わした僕との会話を覚えていたようだ」

双眼鏡をゆつくりと降ろす。

顕れたアルの青い瞳に冷たい月が翳る。

そして、出口に向かうドアへと足を進めた。

「これで遊びは終わりです。これからが本当のショーの始まりです。
ミスター」

ボタン

ドアが閉まり、老人が一人残される。

冷たい秋の風が冬を予感させる。

「警部。何とか助かりましたね」

腕時計に目をやり部下が長谷川に尋ねた。

長谷川は部下を無視し、一人唸る。

「この騒ぎは、怪盗ハットリの仕業なのか？」

長谷川の目にようやく到着した爆弾処理班と消防車の赤いランプが光った。

月の裏であいましょう。

「助かったのか？」

服部は肩を撫で下ろし、ロビンに訊いた。

虎之介はネクタイを緩めてから、スーツの内ポケットから煙草を取りだし火を付けた。

周りからは未だに火が迫っている。

「…みたいだな」

煙草の煙はゆっくりと周りにくすぶる煙と同化した。

ロビンの口から吹き出る煙を見ながら服部は思いだしたように訊いた。

「遺言状はどうなったんだ。ロビンの…、虎之介の父親の遺言状は…」

今回の全ての発端である。

虎之介は煙を吐き出してから答えた。

「さあ。今頃、燃えてるんじゃないかねえのか？」

どうしてもよさそうに、虎之介は燃え続ける自分の家を眺めた。

服部と別れ、虎之介は屋敷から出た。

「虎之介様。ご無事でしたか」

騒ぎに揉まれて先に外へ避難していた小柴が、息せき切って虎之介に近付いてくる。

虎之介は僅かに焦げ付いたスーツを叩き、焼けた屋敷に目を送る。

「父さんの具合は？」

淡々とした口調で虎之介は訊く。

小柴は何も言わず溜息を吐く。

『相変わらず、眠ったままです』と吐いた溜息から聞こえる。

虎之介は目を屋敷に向けたまま僅かに顔を綻ばせる。

「今日はなかなかいい趣向だったな。…派手なハロウィンパーティーに、父の嫌っていた先代好みの純日本邸の破壊。私は随分親孝行だと思わないか？小柴。まあ、ここに本人が居ないのは残念だが」
屋敷から吐き出される燻った匂いが、煙草に手を伸ばした虎之介

月の裏であいましょう。

にまわり付く。

「テツ。起きろ。朝だ」

テツは頭を抱えながら、目を開けた。

「痛ッッー。ん？ここは？」

「何言ってるんだよ。テツの家だよ。昨日の事覚えていないの？」
服部は溜息を吐いて答える。

「オレ、どうしたんだ？」

「酔っぱらって、僕がここまで運んだんだよ」

テツは頭を抱えながら昨夜のことを思い出そうとした。

「オレンジジュースで酔ったのか？」

もちろん、唯のオレンジジュースではない。

ウォッカと睡眠薬入りである。

「他の人達、どこか行っちゃたから僕一人でここまで運んできたんだよ」

怨みがましそうに服部はテツを見た。

「本当に？」

テツの真剣な眼差しにほんの少し罪悪感を覚えたが、とりあえず頷くしかなかった。

「アレ？あの衣装は？」

焦げた後や破れた忍者の衣装を着たままでいられるワケがなく服部は処分していた。

「酔っぱらいに、べつとりとお酒だのなんだので汚されたから捨てたよ」

罪悪感を感じつつも、また嘘を付く。

「テツ。帰っているのか？」

大きな声が玄関から聞こえる。

長谷川警部、テツの父親だ。

どたどたと足音が聞こえたと思ったら、すぐそこに来ていた。

月の裏であいましょう。

「親父」

頭を抱えながら、テツは顔を上げる。

「怪盗ハットリは捕まったのか？」

長谷川宣雄は何も答えず、やかんを火に掛け、テレビのスイッチを付けた。

「テツ、これからまだ仕事がある。夕飯はいらないから用意しないでいいぞ」

テレビのニュースは昨夜の大道家の爆発騒ぎを伝えている。

「また、逃げられたのか」

つまらなそうにテツは呟き、服部をチラリと見て息を吐いた。

長谷川宣雄は何も答えず、一気に自分で用意したお茶漬けを頬張った。

10秒で空になった茶碗を置き、独り言のように呟いた。

「オレはハットリを少し買い被っていたようだ。アイツは確かに人の物を盗むが、何故か憎めないというか、悪いヤツじゃないような気がしていた。だが、はつきりしたよ」

服部は黙って、長谷川宣雄を見ていた。

「今回の事件で幸い死者は出なかったが、一歩間違えれば、多くの人の命を奪う結果になりかねなかった。アイツは犯罪者だ。そんな事は分かっていたのに、オレは何故かヤツが好きだったよ」

「親父……」

「怪盗ハットリはオレが必ず捕まえる。アイツは最低な犯罪者だ」
最低な犯罪者。

心臓を素手で握りつぶされたような痛みを服部は感じていた。

File 4 : LAST PRESENT (完)

大道グループ会長逝去のニュースが流れたのは、クリスマスの飾り付けが街のあちこちで見られるようになった頃だった。

アレ以来ロビンは忙しいのだろうか、テレビ画面で一度大道虎之介の顔を見ただけだった。

「うぐ。寒い」

すっかり落ち葉が落ちきった公園の木々の下を、一人体を震えさせ服部は歩いていった。

足下から伸びる長い影が幾つも行き交う。

少し気の早いサンタクロースが子供達に風船を配っている。

パッパー

クラクションに振り向くと懐かしい顔がにこやかに手を振っている。

「ロビン！いいのか？今日は葬式じゃないのか？」

「そうよ。やっと抜け出してきたんだから」

甘ったるい声に長い髪のこの美女が、アノ経済界の権力者だとは誰も信じないだろう。

服部は今後の日本経済を憂いながらロビンを見る。

「遺言状は、無事だったのか」

ロビンは少し頷いて、遠くを見つめた。

「…『全ては、大道虎之介に一存する』だって。意識不明のまま死んでいったわよ。つまり、それが最後のメッセージ。もっと気の利いたモノを残せばいいのに。」

最後の取って置きのプレゼント。

揶揄するロビンの瞳からは真実が見えない。

服部は暇な筈のないロビンに短く訊く。

「何か用か？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「アルって誰？この前、訊きそびれたのよね。どうして、人の家壊してくれたのか、ハットリなら知ってるんじゃないかなって。唯者じゃないでしょ。偽ハットリに気を取られ過ぎたとはいえ、私の家に忍び込んで、あの規模の爆発物を仕掛けるなんて。しかも、相手は私が、ロビンが虎之介だって知っていたんでしょ」

「アルとは、ロビンが来る前にオレと6年間パートナー組んでいた人の上手な殴り方から鍵の開け方、ほとんどアルから教わった。爆弾のことも。ロビンが来るまではオレ達の存在が表に出ることはなかったけどな」

「ふう〜ん。で、どうして人ン家、爆破したの？」

「それは、おれも知りたい。じいさんを探しても見るからなしな」
「ハットリもわかんないのね。私も捜してるんだけど見つからなくて」

「あのじいさんとは長い付き合いだけど、ロビン以上に謎だらけだ。オレはじいさんの本名すら知らないからな。でも、今日もちよつと事務所に寄ってくる。もしかしたら、いるかもしれねえし…」

「暫くは、休業ね」

「暫くつて。おい」

まだ、お前は続けるつもりか。

服部はマジマジと嘘みたいな美女を見遣る。

残念そうに溜息を吐くロビンは何ら以前と変わらないように見えた。

ロビンが去り、歩きだそうとする服部を、また誰かが呼び止めた。

「捜したよ。ハットリ」

「アキラ。無事だったんだな」

アキラとも、あれ以来の再会だ。

「まあ。オレはしぶといから。死んだり捕まったりしないよ。何てたって、未来のアーティストだからな」

「アーティスト？」

月の裏であいましょう。

「言わなかった？オレ、ゲージユツカになるんだ。専門にも行ってる」

アキラは抱えていた袋から一枚の絵を取り出し服部に見せる。アキラの描いた“微睡みの少女”だ。

「ずっとハットリに見せたかったんだ。今日はたまたま持っていたから、ちようどよかったよ」

「綺麗だな…。ずっと、見てみたかったんだ」

桜の中で微笑むように眠る少女は、服部に束の間の安らぎを与えた。

「ところでさあ。アノ爆弾騒ぎはハットリがやったんじゃないんだろ？ニュースでは怪盗ハットリの仕業だって報道されているけど…」

「ああ。オレじゃない」

「だよな。ダチ怪我してさ。全くひでえよな。不法侵入したのはオレ達だけ。でも、世間じゃ、すっかりお前は悪者だな」

「…そうだな」
服部の瞳に漂う、夕暮れの赤い光がゆっくりと闇に奪われていった。

『日本占い師協会本部』には、老人の姿はなかった。

夜の中にすっぽりと埋まってしまった公園には、先程とは違って変わって人影はなく、服部はさらに寒さを感じる帰り道をトボトボと歩く。

不意に左の頬に冷たさが走る。

「雪か…」

見上げると、次から次へと夜の空から白い雪が服部に向かい舞い降りて来る。

闇からの雪はまるで服部の奥から沸き上がる様々な感情の様に降りしきり、やがて積もっていく。

肩に積もった雪を軽く払い歩き出そうとした服部の目に、白い髭を顔中に生やしたサンタクローズが微笑み掛けてきた。

「メリークリスマス。風船はいらんかね」

赤い風船を服部に差しだしサンタクロースは服部に近づいた。

「あ、ありが…」

熱い。

サンタクロースの手から闇へと放たれた赤い風船が、服部の目に白い雪と重なる。

あの闇の向こうには何があるんだろうか？

ああ…。

雪ってこんなに熱いのか。

ドサツ

サイレンサー付きの銃口から放たれた硝煙の嫌な臭いが辺りに広がる。

腹を抱えたまま、地面に倒れ込んだ服部の目にサンタクロースの黒い長靴の色と、鮮やかな赤い液体がぼやけて写る。

「本当は僕のかわいい教え子をこんな簡単には殺したくはなかったんだけど、これもビジネスだからね」

薄れる意識の彼方、遠い昔から知るイギリス人の声が聞こえる。

「ああ、そう言えば、フジイが日本に…」

それ以上は降り続く雪に吞み込まれ何一つ服部の耳に届かなかった。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

ただ、自分の体内から流れ出る血液の音だけが体中に響いていた。

この夜、白い雪が何もかも純白に埋め尽くした。

音も。

光も。

血も。

服部の存在も。

何もかも…

File 4 : LAST PRESENT (完) (後書き)

次回からは、最終章 (File 5) です。
最後まで読んでいただけると嬉しいですよ
| | m

月の裏であいましょう。

File 5：ホシノヒカリ（1）

一番、古い記憶。

それは金切り声のジャパニーズイングリッシュと、アクセントの強い北部訛りのアメリカンイングリッシュとの激しい怒鳴り合い。

原因は、ボク。

そして、最後の怒鳴り合いも、原因は、ボクだった。

「もう、イヤ。日本に帰るわ。エディ。あなたとは、やっぱり分かり合えないのよ」

「オレもそう思うよ。もう、たくさんだ。出てっくれ。その薄気味悪いガキも連れてな」

2ヶ月前からダディであるエドワードエディは皮肉な笑いを浮かべボクを指差す。

「そのガキは、正真正銘あの男のガキだよ。あの悪魔のガキだ」

「この子には、何の罪もないわ」

「見るよ。このガキのこの眼。悪魔の眼だ。オレ達の会話をジツと聴いてやがる。まだ、二歳にもならないのに、完璧に英語と日本語を理解しているんだ。この間もどこかのお偉い博士とやらが、IQが何とか言っ来てたぜ」

「あなたも最初は喜んでいたじゃないの。この子は頭がいいって」

「限度がある。昨日も勝手にオレの書斎にあるコンピューターの端末を弄っていたんだ。鍵が掛かってあるファイルが開かれていた」

「ほんの悪戯じゃないの。まだ、子供なのよ。よく分かってないのよ」

「子供か。オレは2ヶ月間このガキが泣いたのを見たことがない。

子供は子供でも、悪魔の子だ。そのガキを早く連れてっくれ」

月の裏であいましょう。

ボクは悪魔…。

母は、ボクを連れて日本へと向かった。

「まこと。日本に帰ろう」

ボクの名は何度か変わった。

一番古い名前は、藤井真理^{まこと}。

日本は冬だった。

初めての日本。

初めての雪。

ボクは浮かれていた。

母は開店したての真新しいおもちゃ屋にボクを連れていった。

その日はクリスマスだった。

イブにプレゼントを貰いそびれた子供達がおもちゃを真剣に選んでいる。

ボクは沢山のおもちゃに囲まれ幸せだった。

川岸にそびえる十階建てのビルの屋上には、その当時、日本で最大のクリスマスツリーが飾られていた。

ボクはぼかんと口を開けてツリーのてっぺんを見上げた。

口の中に冷たい雪が忍び込んだ。

母の手から伝わる温もりに安心したボクの悪戯心が、顔を覗かせる。

ボクはこっそりと母のバッグからピアスケースを盗み出した。

もちろん、すぐに返すつもりだった。

その温もりが消えてしまった事に気付くまでは。

おもちゃ屋は沢山の子供達の夢と共に閉店した。

ボクは雪の降る闇に一人放り出された。

ボクは母さんにも捨てられた。

月の裏であいましょう。

川の水面にボクが写る。

悪魔の子。

エディの声が頭に響く。

悪魔の子供だから、ボクを捨てたの？
当てもなく雪の中を歩いた。

ずんずん、ずんずん雪が積もる。

ずんずん、ずんずん…。

頭にも、肩にも、白い白い雪がボクを埋めていく。
体中の神経が何も感じない。

寒いとか、冷たいとか、悲しいとか。

母さん。ボクを捨てないで…

ぼやける意識。

積もる雪。

母さん…

「太一。朝よ、起きなさい。学校遅れるわよ」

ああ、母さんの声だ。良かった。

今、起きるよ。

早く起きないと。起きないと…

雪は、まだ、やまない。

「太一。太一」

違う。これはボクの母さんじゃない。

服部太一の母だ。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「おばさん、太一君、まだ目が覚めないんですか？」
テツは心配そうに服部太一の母親を見た。

「ええ。院長先生自ら執刀していただいたらしいから、手術はほぼ成功したらしいの。でも、さっき手を握ったら、母さんって呼んだ様な気がしたの。気のせいかしらね」

テツは集中治療室にいる服部を見ることは出来なかった。

「世間じゃ、もうすぐクリスマスだっていうのに、せめて犯人捕まるといいですね。轢き逃げって訊きましたけど？」

「ええ。院長先生がそう言っていらっしゃったわ。車に轢かれた傷だと」

今の、夢？

母さんの温もりは、嘘のように冷たい雪に消えた。

もう、どのくらい歩いたろうか？

住宅地の路地みたいだ。

家々の窓から零れる暖かそうな光は一層寒さを募らせる。

ボクは雪にかすむ光を見ないよう歩き続けた。

雪は何も言わず降り続ける。

どうして歩くのだろう？

ボクは知っていたのに。

どんなに歩いてても、母は見つからない。ボクには行く所なんてないのに。

それでもボクは歩く。

どうしたら、ボクは許してもらえるの…

誰か教えて、ボクはどうして歩くの…

「ボクはどこに行くのかね？」

低い声が、ボクの足を止めてくれた。

「母さん…、を、捜している…」

ボクの口から出た言葉にボク自身が驚く。

そんなボクの心をまるで見透かすように微笑みを浮かべるその人は、サンタクロースよりも少ない白い髭のお爺さんだった。

お爺さんは西の方角を指差し、ニツコリと笑い言った。

「ここから、先へ5分ほど歩くと、一組の夫婦に出会うじやろう。

君の新しいお母さんとお父さんだ」

「新しい？」

「その夫婦には子供が出来ない。しかし、とても心のイイ夫婦じや。安心するがいい」

ボクは首を捻った。

お爺さんの日本語が理解できないのだ。

「君は頭のイイ子じや。ホホホ…。ワシにはほんの少しだけ未来が見える。じやが、これは全て偶然じや」

「偶然…」

『偶然』の意味は知っている。

でも…、それが偶然と言うのだろうか？

「そして、6年後の今日、君が8歳になる頃、ワシとお前は偶然ここで会うじやろう」

「なぜ？」

「ボクは、知りたくなるじやろう？自分が何なのか。しかし、6年で見付けることが出来れば、偶然はないじやろう」

「言っている意味がよく分からないよ」

お爺さんはそれ以上何も語らなかつた。

そして、疑問と微笑みを残し、ボクの前から姿を消した。

ボクの足は西へと向かつていた。

そして…

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

その夫婦は『服部』という名字で、ボクに『太一』という名をくれた。

今度は悪魔じゃなく人間の子供になろう。

服部太一になろう。

その時、ボクは二歳にもなってなかった。

だから、ボクが生まれつき服部太一だと信じているところの善良な夫婦は疑わない。

いや、ボクが信じたかっただけかもしれない。

藤井真理まじこという悪魔ではなく、服部太一という唯の人間だと。

File 5：ホシノヒカリ（2）

二週間前。 ロンドン。

街中はクリスマススのイルミネーションにキラキラと輝き、家々の窓からはツリーが間近なクリスマススを待ちかねている。

藤井はベーカーストリートで地下鉄を降り、ロンドンの冷たい風に襟を立て1件のパブに入った。

「随分久しぶりじゃないか、フジ！」

顔に年の分だけ皺を蓄えたバーテンが藤井を迎えた。

藤井は落ち着いたパブの変わらなさに安心しカウンターに腰を下ろした。

「この界限も随分変わったな」

でも、ここは相変わらずだ。

そこまでいう前にバーテンは藤井にワンプイントのギネスを出した。

ギネスの黒い夜の色に月の色をしたきめの細かい泡が藤井を懐かしい気分にさせる。

「覚えてくれていたんだな。オレのオーダー」

「これは、オレの奢りだ」

年期の入ったロンドナーであるバーテンが、ウインクし懐かしい友人に笑いかけた。

藤井は短く礼を言うと地下鉄のスタンドで買った新聞に目を落とした。

王室のくだらないスクランダルを読み流すと、隅にJAPANの文字を見付けた。

「サムライとゲイシャは元気か？」

藤井は新聞から顔を上げた。

バーテンの笑顔に、自分の両親について訊ねられた時、そんな冗

月の裏であいましょう。

談を言った事を思い出した。

この島から出た事のないこのバーテンは、サムライ、ゲイシャ、フジヤマという日本の知識しか持ち合わせていなかった。

もちろん、藤井の冗談を冗談とは思ってないらしい。

だから、ニツコリ微笑む。

「元気だよ」

「それは良かった。クリスマスはどうするのか。日本に帰るのか？」

「そうだな。ヨーロッパのクリスマスは独り者には淋しいからな。」

日本に帰って息子の顔でも見てくるかな」

「フジに息子がいるとは初耳だな。息子は何をしているんだ」

藤井は読んでいた新聞を折り畳み、ニツとバーテンに笑って言った。

「ニンジャだよ」

どんなに強くこんな家庭を望んだのだろうか？

ボクは幸せだ。

なのに、ボクの脳裏に焼き付いたあの言葉がボクを不安にさせる。

悪魔の子

ボクは人間の子を演じ続けた。

普通の日本人の男の子を演じ続けた。

しかし、それがボクの息を詰まらせる。

6年が過ぎた。

ボクは演じ続ける日々に、ワケが分からなくなる。

ボクは人間を演じる悪魔？

誰か教えてくれ。

誰か：

何の目印もない唯の十字路。

バカだ。

月の裏であいましょう。

そう思いつつボクは、6年前に出会ったお爺さんを待った。
お爺さんはボクを見付けた時、あの時と同じ笑顔をボクに向けた。
しかし、黒い瞳に僅かに淋しげな色が加わっていた事をボクは見
逃せなかった。

そして、ボクは、演技ではないもう一つの顔を手に入れた。

それは、人の物を盗むドロボーだった。

確かに、その時だけ、ボクはボクでいられた。

幸せなはずの家から出た時、ボクは息が出来た。

素性の知れないイギリス人がボクに沢山の事を教えてくれる。

小学校で習う下らない授業に散々な思いをさせられているボクに
は丁度いい刺激だった。

ボクがボクでいられる。

確かにボクはそう考えるが、そのボクが何なのか結局分からない。

じいさんは言った。

いつか、分かると。

ボクはそれを、本当の父親に会えることだと思っていた。

本当の“悪魔”に会えば、自分が悪魔か何者が分かる気がした。

『真理まこと…』

そう、藤井真理を創った悪魔に。

なんてバカなことを…

ボクはバカだ。

『太一、起きなさい。朝よ』

朝？

朝…。

どうして、ボクは朝に起きないんだ。

なんてバカなんだ。

もう、何もかもが…。よく分からない。

月の裏であいましょう。

ちよつと疲れたな。

もう、起きたくない。

ずっと、こうして眠っていたい。

『朝よ。朝よ』

起こさないでくれ。

『学校遅れるわよ』

そんなのどうでもいい。

全てどうでもいい。

お願いだ。

ほつといてくれ。

『ここ、ファミリー・トイ・ストアには、沢山の家族連れが、おもちゃを買いに訪れています。この店の名物のジャンボクリスマスツリーはオープンしてから13年間、沢山の子供達の目を楽しませています』

リポーターはオーナーにインタビューをし始めた。

『このクリスマスツリーの飾り付けは、13年間、一度も変えられていないとお伺いしましたが、何か意味があるのでしょうか？』

オーナーは、背の小さな垂れ目の中年の男だった。

『あの中には夢が詰まっているんですよ。夢はそんなにころころ変わるモノではないでしょう』

小首を傾げるリポーターの後ろには華やかなクリスマスツリーが見えている。

テツはテレビのスイッチをオフにし、未だに眠っている服部を眺めた。

「テツ君、リンゴ貰ったけど食べる？」

服部太一の母親がそう言ってリンゴを剥き始めた。

月の裏であいましょう。

集中治療室から出て今は個室で眠る息子を切なげな瞳で母はなぞる。

ナイフを持つ手がいつの間にか止まっている。

「太一って学校ではどんな感じ？家では特に我が儘言っただけを困らせた事もないし、なんて言うか…、特技もないし、でも、不得意な事もない。テレビゲームが好きなどどこにでもいる子。そんな認識しかこの子に持ってない事に今更気付いたわ」

らせんを描いたリンゴの皮がぼとりと落ちる。

「やだ、私ったら、何をテツ君に言っているのかしら」

「学校でも普通でしたよ。唯、僕には彼が普通すぎて不自然な気がしました。4年間、彼とクラスが一緒でしたが、どの教科も常にテストの平均点を取るんです。体力測定にしても彼はいつも平均値をキープしていました」

「そう…」

生返事の向こうで、病室のドアが開き今度は父親が入ってきた。相変わらず眠っている自分の息子を哀しそうに見つめ、近くの椅子に座る。

「許せないよ。この子を轢いた人間。この子が何をしたと言っただけ。独り言のように父親は未だ捕まらない轢き逃げ犯に憤りを感じていた。

もっとも、その轢き逃げ犯は存在はしないのだが、それを知る者はこの部屋には居ない。

File 5：ホシノヒカリ（3）

院長室。

「いつも無理言って済まないね」

「頭を上げて下さい。貴方には昔随分お世話になりましたから。それより、あの少年の怪我は射創です。弾は急所を外れていましたが、発見が遅かったからか、多量に出血していました。侵入痕から見て近射ですね。貴方には心辺りが有るのですか？」

老人はコツクリと頷いた。

院長はコーヒーを老人に勧めてから、ゆつくりと老人が座るソファの正面に腰を落ち着けた。

老人は勧められるままにコーヒーカップに手を伸ばす。

「1年前までワシのところにはいたイギリス人を覚えていたかね」

「ええ。16年近く貴方のところにいましたね。…まさか、彼が？」
老人の哀しそうな顔に院長は答えを聞くまでもなかった。

コーヒーから放たれる香りが院長室を包み込み、老人は忘却し得ない邂逅に引きずられる。

「院長は戦時中の事を覚えているかの」

「…貴方は急に行方不明になりましたね」

「視えてしまったんじゃよ。日本の敗戦が。戦後、日本人は大日本帝国からのマインドコントロールから解き放たれ、結局、迷い始め、また、新たなマインドコントロールを無意識に求めているように見えた。或の者は過去の人間が作り出した常識にそれを求め、或者は外からの新しい価値観にそれを求めている。戦争を知らない子供達。そして、その子供達。遺伝子は我々に何を伝えているのか。ワシにはさっぱり分からんのじゃよ」

「親子は愛し合うモノ、弱き者は助けるモノ。そんな先入観すら貴方には無意味ですからね。遺伝子が伝えないモノは自分で手にしない限り意味を為さない。いい加減、貴方も人類がゆつくりと培って

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

きたマインドコントロールぐらいには掛かったらどうですか？その方が楽に生きられるんですよ」

「…既に違うモノに洗脳されているのかもしれない。自覚する間もなく脳が蝕まれ、腐り落ちているのはワシの方かもしれない。そしてあの少年の父親も、また…」

老人はコーヒークップをコトンとテーブルに置いた。

コーヒーは一口も減っていない。

「少年の父親ですか…？」

老人は頷き、少年の父親を遠い記憶から手繰り寄せる。

「ワシが20年前に出会ったのはつまらないコソ泥じやった。ワシは男を連れ、アメリカ、ヨーロッパ、中東を巡った。ソイツはある意味で天才だった。そして、ワシの僅かな先見を最大限に生かし、その裏世界で知らない者はいなくらいに泥棒としての名が広まった。何でも盗んだ。宝石、絵画、武器、情報。時には人の命さえも。“悪魔の仮面”と名乗って。ふざけた名前じゃろう？だが、人々は欲しい物があれば、金を積めば、全てが手に入ると我々を敬い恐れ」

柔らかな夕日が、窓から差し込み院長室はオレンジ色に染まる。

老人は未だに遠い過去に一人で踏み入り彷徨っていた。

「ある日、ロンドンの下町でストリートキッズを仕切っていた少年に出会った。ワシ等は彼を連れてバブル膨らむ日本へ戻り、三人で仕事を始めた。そして、元からのパートナーである男は一人の女に出会った。しかし、日本は男にとって狭すぎ、女の妊娠を聞く一人姿をくりました。それから16年、その男はワシの前に姿を現しておらん。ただ、女が捨てた少年だけがワシの前に現れた」

老人は冷めたコーヒーに、あまりにも深く、そして、果てしなく遠い闇を見つめていた。

「どんなに年を喰っても何一つ分からぬ。したり顔で世間を斜めに見たところで、本当のモノは、見えぬどころかその存在すら分かん。ワシは何に洗脳されてしまったのだろうか？有りもしない夢

月の裏であいましょう。

を未だに見続けているのは、ワシだけなのだろうか？それとも、自分だけが、という事こそ単なる思いこみで、孫にお年玉を与えている彼等も、一皮剥けばワシと同じなのか？彼等も深い沼で藻掻いているのか」

どんなに見つめてもコーヒーが創る間には何も映り出されはしない。

老人を見ていた院長は、コーヒーカップをコトンとテーブルに置くと思ひ出したように言った。

「そう言えば、ここにあの少年をここに運んで来た人は……」

院長の言葉は、内線電話から鳴り響いた院長秘書の声に遮られた。『院長。503号室の患者の様態が急変しました。急いで向かって下さい』

二人は顔を見合わせ、服部太一の病室へと向かった。

「先生。急に太一が苦しそうに息し始めて」

太一の母親が取り乱したように院長に訴えた。側にいる父親が必死に息子に語りかけている。

「太一。どうしたんだ？苦しいのか？」

「落ち着いて下さい」

院長はチラリと血圧計を見遣り、的確に看護婦に指示を与えてから、自ら服部の脈を取る。

ジツと服部を見ていたテツがハッと気付いたように言った。

「おばさん。何か言ってる」

服部の口元が僅かに動いている。

それは確かに何か言っているように見える。

服部の母親は服部の手を握り必死に問いかけた。

「何？太一。何が言いたいの？」

父親も院長に振り向き精一杯訴える。

「院長先生。お願いです。太一を助けて下さい。本当に良い子なんです。この子は本当に親思いの良い子なんです」

月の裏であいましょう。

老人は部屋の片隅でその光景を黙ってジッと見ていた。僅かに動く服部の口を部屋にいる全員が注目した。

「太一。起きて。早く」

母親の目から涙が溢れる。

息子を想うその目から止め止めもない涙が流れる。

「…つい…て…つく…」

苦しそうな息使いと共に辛うじて服部の声はその口から漏れる。

額からは次から次へと汗が流れ落ちる。

「何？太一。何が言いたいの？」

服部の口元にテツも耳を集中させた。

「…とい…て…くれ」

「何？」

「…っといてくれ。オレなんかほっといてくれ。ほっといて…くれ！」

服部の声が病室に響き、そして、沈黙だけが広がる。

徐々に目から入る光をうざったそうに、服部は受け入れる。

オレンジ色の光に広がる静寂の中、自分に向けられた幾つかの視線を服部はようやく感じる事が出来た。

開いたばかりの目に光が形へと姿を変える。

服部太一の母親。

服部太一の父親。

テツ。

その三つの視線に宿る困惑。

ここは、…？

服部太一の世界だ。

ほっといてくれ…

自分から出た言葉に、苦笑せずにいられない。
今まで両親にそんな口の聞き方などした事などなかった。

「オレ、…僕、どうしたの？」

そう言う側から、脇腹の痛みを感じ忽ち記憶を取り戻す。

長い邂逅から、急速に現実を理解していく。

ああ、そうだ、…アルに撃たれたんだ。

アルに…

「君は轢き逃げされて、この病院に運ばれたんだよ」

「轢き逃げ？」

院長の言葉に眉を顰めたが、視界の片隅に老人の姿を認め服部は
全てを理解した。

院長は服部の両親に優しく言った。

「お父さん。お母さん。太一君にはまだ安静が必要です。目覚めて
まだ冷静さを失っているようですし、今日のところは帰っていただ
けませんか」

テツは帰り道釈然としない面持ちで、服部の両親に呟いた。

「…何かあの院長、気に食わない。大体、いくら腕がいいからと言
つて、あんなに年喰った院長なんて自ら出てくるかな。ねえ、そう
思いませんか？」

「え？ええ。そうねえ」

テツの質問を訊いているのか、いないのか母親は未だぼんやりと
考え事をしているようだった。

「それに、あの端にいたじいさんは、誰ですか？」

「じいさん？いたかしら」

「……。じゃあ、僕の家、こっちですから」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

テツは、軽く会釈して自分の家に帰った。

テツを見送った父親が初めて口を開いた。

「ねえ。母さんは太一が泣いたのを覚えているかい。私には思い出せないんだ。太一が取り乱して泣いたり、怒ったりするのを。あの子を拾ってから13年過ぎたが、私はあの子の何を見ていたのか。太一の全てを分かっているつもりだったよ」

「私も、同じことを考えていた。あんな風に太一に言われた事今まで無かったなつて。本当はあんな風に親を突っぱねたりなんて、普通なのに。私は今までの太一が普通だと思っていた。バカね」

「ああ。バカだったよ」

File 5：ホシノヒカリ（4）

「バツカみたい。ここに来たって何が分かる訳でもないのに」
建築中の純和風の大道家を見上げながら、理真は大きく溜息を吐いた。

大道家は二ヶ月前爆破され全焼したのだ。

理真はほんの二ヶ月前に、ハットリに逢えるかもとの僅かな望みを掛けここに忍び込んだ。

勿論目的は遺言状だったが、理真の一番の目的はやはりハットリに逢いなかった。

結局ハットリには逢い損なった。

しかし、この新しい当主は何か知っている。

大道虎之介は確かにハットリを知っていた。

あの夜、理真が気を失っていたのは束の間で、混乱に乗じて、警察から逃げ出している。

財界のプリンスと、一応犯罪者である泥棒との繋がりは何なのか。理真はどんなに眺めても答えの出ない大道家を後にした。

その後ろ姿を蒼い瞳が追った。

「あれは、確か…」

夏のある一日が、そのブロンドに隠された脳に過ぎる。

昔の事をやたら思い出したな。

夕日は既に地平線の彼方に消え、その暖かみを持った光だけを未だ地上に名残惜しそうに残していた。

遙か遠くのクリスマスツリーが、残った深いオレンジ色の光を受け、頼りなさに自らも光を放ち出した。

月の裏であいましょう。

放つ光は病室の服部には届かない。
思い出した筈の記憶のジグソーパズルが一つ欠け落ちている。
そんな気がしてならない。

この不確かな歯痒さに、何が思い出せないのか考える自分に対し、
服部は心の奥で苦笑いを噛み殺した。
どうでもいい事だ。少し眠りすぎたようだ。

「じいさん。オレ、どのくらい寝てた？」

天井の正確に並べられた細かな穴を、眺めながら服部は訊いた。

「3日間。明日はクリスマススイブじゃ」

側の椅子に座っていた老人は服部に向かい一綴りの書類を服部に
投げた。

服部は片手でそれを掴むと、その英語で記された十数枚の書類を
ばらばらとめくり、顔を強ばらせた。

老人は静かに立ち上がり、服部を背にして窓辺へ移動した。

「ワシを捜しておったじやろう？アルがお前を狙うわけを訊ねるた
めに。随分時間が掛かったが、何とか答えを見付けることが出来た
よ」

「…やつぱり。知っていたんだな。あの爆弾もオレを狙っていた。
そうだろ？」

「もつと早く言うべきだったんじゃが…」

窓辺に佇む老人の瞳は外に広がり始めた深い夜の向こう側を映す。
そんな老人の後ろ姿を暫く見やっってから、服部は書類を改めて読
み始めた。

不意に服部の目が立ち止まり、その瞳は老人を越え、遠く窓の外
へ向けられる。

失っていた記憶の欠片を見付けたのだ。

7年間、服部は人のモノを盗み続けた。

じいさんが持ち掛けた仕事を、アルと嗤いながら続けた。

じいさんは詳しい事を何一つ話さなかったが、敢えて訊こうとはしなかった。自己防衛の為だ。
盗まれる人の心から、出来るだけ目を反らした。
それは、13年間の内に無意識に身に付いてしまった。
ジツとしていると体が疼いた。
動いていないと体が腐りそうになる。
人を欺き、獲物を手に入れる時、体中の細胞が騒ぐ。
快感だった。

7年間、走り続けた。
立ち止まると余計な事を考えてしまう。
この細胞の正体は？
考えていないつもりで考えていた。
心に止まない疑問が降り積もる。
雪は自分を振り返させる。
雪は深々と降り積もる。
春も夏も秋も、雪は降り続く。
変わることなく…

不意に冷たい風が服部の頬を伝う。
「夜か…」
いつの間にか眠っていたらしい。
シンと静まった病院内から服部の耳に足音が滑る。
夜中に数度の看護婦の見回りだろうと、服部は上半身を起こした。
足音は徐々に遠ざかる。
鼓膜から足音の余韻が消えると、服部の目が窓の外へ向かう。
夜の闇から月が顕れ服部の顔を照らし出す。
何処にも欠点の見当たらないスキリとした顔に僅かに残る幼さが、月光が創る陰影によって浮かび上がる。

月の裏であいましょう。

キリキリと脇の傷が痛んだ。夜の闇は月明かりに蒼く冴える。

冷たい風の音は人々の心臓を貫き、何事もなかったように闇へと消えていく。

そして、繰り返し続く風の音を聴きながら、一台のフェラーリがブレーキを止めた。

「やん。伝線しちゃった」

ロビンは体をひねり、ふくらはぎ付近の黒いストッキングにスツと伸びた一本の線を怨みがましそうに見た。

そして、その拍子に被っていた帽子が風に流された。

「あー！」

黒いロビンの帽子は闇の中をフワリと風に運ばれ、スラリと伸びた綺麗な指に捉えられた。

ロビンは黒い艶のある髪を掻き上げ、帽子を手にした金髪のイギリス人を見た。

ロビンはニツコリと微笑み、お礼をする。

「ありがとうございます。助かりましたわ」

帽子を差し出すイギリス人もロビンに負けない笑顔を見せ、流暢な日本語で答える。

「いえ。貴女のような美しい方とお話が出来るとは夜風に感謝しなければいけませんね」

「そんな。恥ずかしいですわ」

聞くだけでも恥ずかしい台詞にロビンはわざとらしく顔を赤らめ帽子を受け取る。

そして、艶のある瞳をイギリス人に向け訊ねる。

「こんなお時間に、どなたかのお見舞いですか？」

ロビンは月明かりの下に不気味にその存在感をアピールする白い建物を見上げた。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「ええ。知り合いが入院してしましてね」

「まあ。それはお気の毒に」

「いえ。でも、どうにか回復したようで安心しましたよ」

「それは、よかったですわね」

ロビンは聖母の如く微笑みを暗い闇の中に振りまく。

イギリス人は優しく微笑みを返す。

「それでは、私は、これで失礼致します」

そう言っつてロビンに会釈をし、病院に背中を向けたイギリス人は不意に何かを思いだしたように振り向く。

そして、爽やかな笑顔を崩さずに言う。

「また、いずれ、お会いしましょう。家を破壊したお詫びをしますよ。虎之介さん。失礼、今はロビンの方がいいかな」

「いえ。お詫びなど結構ですわ。アレは私の不注意でしたことですから」

月明かりの下、ロビンの微笑みが一層美しさを増す。

File 5：ホシノヒカリ（5）

空に漂う闇に見え隠れする月が、定まらない服部の心の際に入り込む。

月光と闇とが交互に服部に囁く。

視界の隙間に不意に弱い光が射した。

星かと一瞬疑ったが、それは、遠くのおもちゃ屋に立つクリスマスツリーからの光だと思いついた。

ツリーの光は星よりも確実に輝いている。
冴えた服部の脳にツリーの光が張り付く。

光は遠い過去を連れ戻す。

初めて盗んだモノは、実母の小さなピアスケースだった。
本当は何でも良かった。

唯、母を驚かせたかった。

母の目をバグから反らし、そっとピアスケースを掴んだ。
全く気付かない母に、益々上機嫌になり気付かぬ内に母の手を離していた。

手に残ったのは、ピアスケースだけ…

シンと静まり返った廊下に、ロビンのハイヒールの音が規則正しく鳴り、やがて止まる。

「ハットリの具合はどうですか？」

ロビンは声を低め老人に尋ねた。

「峠は越した。順調に回復へ向かっておる。…ロビンにも知る権利はあるじゃろっ」

老人は服部に渡したのと同じ書類をロビンに手渡した。

月明かりは老人の顔に深い皺を刻む。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

音のない夜には無機質な世界ばかりが広がる。

廊下の窓から入り込む月明かりを頼りに全ページを読み終えると、ロビンは深い溜息を吐いた。

「ふん。つまり、ハットリの命を狙っているのは、有力な次期アメリカ大統領候補、トム・ローガンと言うワケね」

「おそらく。13年前、コンピュータープログラマーだったエドワード・ブロック、つまりハットリのアメリカの養父が偶然見付けたローガンの汚職に関するデータをネタに、ローガンを強請ったことが、始まりじゃ」

「それで、そのエドワードは？」

「既に殺されておった。それも、おそらくアルじゃろう」

「ハットリの実母は？彼の奥さんだった」

「行方不明じゃ。今、調査してある。もしかしたら、もう既に…」

「でも、13年前つて言ったら、ハットリは2歳にもなっていないはずでしょ。そんな2歳の子供の記憶のために殺し屋を雇うかしら」

「現に、ハットリは二度も殺され掛けておる」

「でも…」

不意にロビンの脳裏に青い瞳が過ぎる。

月明かりの下、何処までも透き通るアルの青い瞳。

そして、それとは対照的な黒い老人の瞳は深淵を覗き込む慈悲深く、冷たい色。

その瞳からは老人の心の中を視ることは不可能だった。

深い闇の色がゆらりと動き、低い老人の声はロビンの耳に響く。

「おそらく、ハットリが生きていることが分かればアルは、再びハットリの命を狙うじゃろう」

「もう、知られているわ。さっき、玄関で逢ったの」

それは十分な可能性があったため、老人は特に愕く事もなく、その事実を受け入れる。

「でも、今夜、何故彼はハットリを殺さなかったのかしら…。今のハットリはまともに動く事も出来ないのに」

「オレなら動けるぜ」

そこには今日の午後、目覚めたばかりの服部が何事もなかったように立っていた。

「大丈夫なの」

ロビンは心配そうに服部に近づく。

「アルが来てたのか？」

黒い帽子を握りしめロビンは頷く。

服部は暫く何かを考え、老人をジッと視た。

「じいさん。最後に盗みたいモノがあるんだ」

「最後つて？」

ロビンは服部の言葉に愕然とした。

大道虎之介と言う表の顔を持つているにも関わらずロビンはこの仕事を続けるつもりでいたのだ。

しかし、老人は黙って頷く。

「お姉ちゃん。最後つてどういう事？」

「あら。理真は嬉しくないの？あんなに嫌がっていたのに」

絵里は意外そうな顔で自分の妹を眺めた。

「まとまったお金が手に入るから、そろそろ潮時かなって思っただけよ」

「まとまったつて？大道の弟はお金を出すの？手引きまでさせたい結局遺言状は手に入らなかつたわ」

理真は不敵に微笑む絵里を見て、どうやら上手く相手を丸め込む手を思い付いたんだろうと検討が付き、安堵と共に僅かな罪悪感が心を痛める。

「私は彼に唯、運命のお話をしただけだもの。あの夜、遺言状が貴方の運命を決めると」

大道家は火に包まれたにも関わらず、耐熱製金庫に入った遺言状は無事に日の目を見ることが出来た。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

遺言状の内容は財産の事については触れられていなかった。

ただ、息子に全てを任せるとの内容だと健次郎氏から聞かされた時、絵里は首が繋がったと喜ぶ健次郎氏の愚かさに僅かに同情した。「大道虎之介が社長を務める大道ホールディングスの副社長に大道健次郎の名が候補として上がったとの情報を掴んだの」

身内の健次郎氏よりも早くこんな情報を仕入れる麻美は中学生である。

二人をまるで無視するように黙ってパソコンに向かっていている麻美は姉の引退宣言を止める風でも喜んでいいる風でもない。

絵里は言葉を続けた。

「その情報を旨く利用して、全て霊の導きつてヤツにしたの。遺言状の事も含めそうなる運命で、最後は貴方に幸運がやって来ると。幸運って言うのは、つまり、副社長の事なんだけど。まあ、そんな事を旨く言ったのよ」

それが幸福であるかどうかは本人の問題である。

自分の義兄によってその息子の掌に乗せられた健次郎氏は、いつでもその掌で握り潰されてしまう立場を理解していない。

理真は姉の口から、詐欺にも似た呪文を捧げられる客に今更ながら同情した。

麻美はパソコンの画面から理真の顔に目を移す。

「大道虎之介は非常に頭の切れる人間です。もしかしたら今度の事で大道健次郎が一役買った事を掴んでいるかもしれませんね。もし、そうだとしたら財産分与の事を含め、健次郎氏は大道虎之介の忠実な駒になります」

麻美はそれだけ言うともた画面に向かう。

理真が姉の引退を素直に喜べない理由は、一つしかない。

この世界から遠ざけば、二度とハットリには会えないような気がしたからだ。

この仕事のお陰でハットリに会えたのだ。

しかし、理真は大道虎之介の事を絵里にも麻美にも言う気がしな

かった。

絵里は不意にあの秋の夜を思い出す。

「それにしても、あの爆弾騒ぎは何だったのかしら？本物が偽物に怒って仕掛けたのかしら？」

「ハットリがあんな事するわけないでしょ」

間髪入れずに絵里の言葉をきっぱりと否定した理真に、麻美は小さな溜息を吐いた。

「理真お姉さまはハットリをご存じなのですね？」

「な、な、なーに言ってるの??？」

どつと冷や汗が理真の顔から吹き出る。

今度は絵里の口からも大きな溜息が漏れる。

「とにかく、もう終わり。私はこれから最後の仕事に行つて来るわ。

明日はパーティーでもしましょ。私が料理作るから」

もう、会えないの？

「ちよつと、理真。聴いているの？」

理真の心にハットリ君の仮面の笑顔が過ぎる。

その下に隠された本当の笑顔をまだ一度も見た事がない。

思い出せるのは自信に満ちた弧を描く口元。

初めて出会ったのは、春。

理由もなく、必ず逢えると信じていた。

季節は巡りに巡つてもう、冬だ。

もう一度逢いたい。夢でもいいから…

現実には、理真は学校で毎日服部の素顔を見ていた。

しかし、真実を知らない理真にとって、それは無意味な現実。

窓から遠くに見えるツリーのイルミネーションが、理真に心細げに瞬く。

午前零時を回り、その光は静かに消えた。

File 5：ホシノヒカリ（6）

そして、クリスマスイブ。

消えた光の残像が服部の瞳に僅かに瞬いていた。

突っ走るアルを止めるには、そう考えた時、一つの星が服部の記憶を絡め取る。

鍵は欠け落ちていた小さな記憶。

13年前。

オープンしたてのおもちゃ屋はオーナーの夢であった。

クリスマスの夜、屋上で解体が始まった真新しいツリーを見上げオーナーは亡き娘の写真を見つめ繰り返し呟く。

「これは、夢なのだ」

あの人がそう教えてくれた。

ツリーがここにあるのも娘が死んだのも。

全ては夢なのだから、あなたはあなたの夢の続きを見続けなさいと。

不思議な手相見だった。

娘と妻を事故で亡くし時間が過ぎるに連れ、周りは自分の人生、自分のために生きると、力強く説得した。

ならば、死んだ娘が見たいと言った大きなクリスマスツリーは壊してしまおう。

娘が見たいと言ったから作ったのだから。

完成間近なおもちゃ屋を見上げ、そう笑った時、周りは繰り返し言った。

現実を見ると。

不思議な手相見だけは、こう言った。

月の裏であいましょう。

夢を見ていなさいと。

以来、私は夢の中で、おもちゃ屋を経営している。夢の中で、会計し、営業し、販売している。いずれ、時が現実という名の不確かな恐怖を洗い流す、その時まで優しい夢の中で笑って娘を見ていよう。現実と戦う必要などない。

「雪が降りそうだな。そろそろ君達は帰っていいぞ」

明日は12月26日。
ホクシンググレイ

欧米ではクリスマスに貰ったプレゼントを開けるといってお楽しみの日だ。

屋上の飾り付けのなくなったツリーを見上げ白い息を吐いた。店内には未だ蛍の光と共に閉店のアナウンスが響いている。

寒さに体を強ばらせながら屋上から出ていく従業員を見送り、自分も最後に屋上から階段を下りようとした。

カタン

小さな物音に振り向いたがそこには何もなかった。

オーナーは静かに休憩室へ下りて行った。

「大丈夫かな」

幼い声が僅かに蛍の光に混ざり、小さな影がオーナーの後ろ姿を確かめ動き出す。

その手に握られている箱は、シガレットケースの半分程の大きさであるが、幼いその手にはやけに大きく見える。

小さな体にはちよつと長い階段に息を弾ませ、辿り着いた前にある重い扉を開ける。

キラキラ光るデコレーションが雪を避けツリーの木の下に寄せられていた。

月の裏であいましょう。

靴下。

りんご。

トナカイ。

沢山のおもちゃの中で、小さな心が一際動いたのは大きな星だった。

雪の中をトボトボと歩き、その小さな手が大きな星に触れた。

五つの鋭角を持つ星には、切れ目と思われる細い五本の線が入っている。

小さな手でその切れ目をこじ開けようとしたが、力が足りなかった。

暫く辺りをキョロキョロと見渡し、ほんの少し考えていたと思ったら、すぐに、もと来た階段を下りだした。

そして、オーナーが消えた道筋を辿る。

幼い子供が『休憩室』と確かに書かれた文字を読めるかどうかは分からないが、確かにそこに大きな目を上げる。

いつの間にか蛍の光は消え、沈黙が暗闇を引き立てている。

「お疲れさまです。オーナーもお帰りですか」

「ああ、駅まで一緒に帰ろうか」

背の低い垂れ目のオーナーは若い女性の店員と共に従業員用出入口に向かう。

「君は、明日は早番だったね。私は遅れるから鍵とカードを渡しておくよ」

女性が手渡されたカードキーをセキュリティシステムに差し込み、暗証番号を打ち込む。

ピーと音がした時、小さな影が優しくそうなお姉さんの膝に抱きついてきた。

「あら、どうしたの？」

「…ママ。いないの」

「たいへん。迷子かしら。店内に迷い込んでいたのね。きっと、お母様が捜しているわ」

月の裏であいましょう。

「ボク、名前は？」

首を何度も横に振る。

「小さいから無理か。私は近くの交番に行くから、君はこの子を見ていてくれ。まだ、お母さんがこの辺で捜しているかも知れない」

小走りに掛けていくオーナーを見送り、女性は膝き低い目線に合わせニツコリ微笑む。

「大丈夫よ。すぐに見つかるわ」

優しい目線が外された時、小さな口元に笑みが浮かぶ。

そして、女性を呼ぶようにバツグを引っ張る。

「なまえ、ボク、たなか…」

女性は嬉しそうに目を輝かす。

「田中って言うの？よかった。ボク偉いわね。交番に知らせた方がいいかしら。でも、子供を夜空に一人放って置くわけにもいかないし。ここを放れるわけに行かないし。こんなとき、携帯電話があったらよかったのに…」

困ったように独り言をいう親切な女性に、

「ボク、ひとり、へいき」

ニツコリ無邪気な笑顔を作る。

「ボク、偉いね。じゃあ、お姉さん、10秒で戻るから、ここ動いちゃダメよ」

走り去る心優しいお姉さんを笑顔で見送る。

ここで子供がいなくなってもお母さんが見つけたと思うだろう。

捜したとしても、まさか、鍵を掛けた筈のおもちゃ屋に戻っているとは思っ筈がない。

小さな手にはカードキーと鍵が握られている。

背を伸ばし鍵穴に鍵を差し込む。

カチツと音を立てて殺風景な従業員ドアが開く。

そして、ピーピー煩い鉄の箱に椅子を持って近付き、カードキーを差し込むと、とりあえず不快な音は静まる。

月の裏であいましょう。

小さな指が覚えたばかりの暗証番号を打ち込むが、どうやら違うらしい。

セキュリティーを解除する番号は別物だと悟り、鍵の中から一回り小さな鍵を取りだし、箱の横にある小さな穴に差し込む。

ビンゴだ。

蓋を開くと、幼い顔が少し紅潮する。

配線を暫く眺め、ニンマリと頬を緩め配線を弄る。

内部にある小さなキーを用心深く押すと、ピピッと軽快な音と共にディスプレイに『カイジヨ』の文字が浮かび上がる。

フウツと息を吐き椅子から飛び降り、テーブル上にある果物ナイフを持ち部屋を飛び出る。

屋上に戻り、再び星を手に取った。

星の切れ目を指でゆっくりとなぞり、持ってきたナイフを突き刺す。

1センチ程入ったところで、クツとナイフを捻る。

パカツと音を立て星は開いた。

思った通りこの星は幾つかのパーツに分けられ組み立てられていたのもだった。

持っていたピアスケースを中の空洞に入れる。

外した星の欠片をピツタと詰め込むため体重を掛けて押し込む。

「たなかクーン。ボク」

優しいお姉さんの声が遙か下から冷たい風に運ばれる。

寒い空の下、彼女は幼い子を思いやり懸命に声を張り上げる。

体重を掛けた星がキシキシと掠れた音を立てる。

「バカ。タナカって誰だよ」

「田中さくん。いますか」

今度は母親を捜すつもりらしい。

「どこにもいないよ。そんな人。ボクは捨てられたんだから。優し

いお姉さん」

ボクは捨てられたんだ。

だから、ボクも捨てるんだ。

ボクが捨てたのは、返す当てのないモノ。

星の中に捨てたピアスケース。

盗んだ鍵は返せるだろう。

でも、盗んだピアスケースは誰にも還らない。

それでも、ボクは泣かない。

泣いた記憶がない。

星は掛けた体重の重みにより、パチリと音を立て元の星に戻った。
五つの鋭角を持つ星に。

その星にしまい込んだワケは単なる気まぐれだった。

手の届かない天辺の星にはきつと二度と触れる事はないだろう。

欠け落ちた記憶は、ピタリと当てはまり完全となる。

星を頂点に頂くツリーは13年間何も語ることなく、その時期が
来ると子供達の目を楽しませている。

そして、毎年欠かすことなく、服部の瞳にも映っていた。

月の裏であいましょう。

File 5：ホシノヒカリ（7）

窓から広がる夜の景色はいつもと変わらない。

遠くに見えていたツリーの光は既に夜に溶けていた。

午前零時を回ったその時間はクリスマススイブと呼ばれる時間である。

ロビンは自分の息の掛かった窓のガラスを細い指で撫でる。

長い沈黙の後、老人の低い声が静かに流れた。

「分かった。ハットリの言う通りにしよう。決行はクリスマスじゃ服部の話をよく聞いた上で老人は決意し、そして、黒い瞳はロビンの答えを待つ。」

ロビンの瞳は服部に向けられる。

「いいの？体は？」

ロビンの心配は当然の物だ。

「どっちみちアルには、オレが生きていることは知られているんだ。早い方がいい」

雲をかたどる闇は時間を掛け月の形を奪って行き、やがて空に輝く光を全て呑み込んだ。

夜の闇は三人にも静かに影を落とす。

「分かった。私もハットリの言う通りにするわ。：ハットリ、そろそろ休んだ方がいいわ。私も今夜は帰るわ」

そう言って二人から離れようとしたロビンを老人が呼び止めた。

「一つ、ロビンに行っておきたいことがある」

ロビンと服部は老人の真剣な眼差しに、固唾を飲む。老人はゆっくりとロビンの足下を指差して言った。

「ストッキングが伝線してある」

月の裏であいましょう。

「はあ〜」

クリスマススイブ。

桜田門の警視庁庁舎の六階に大きな溜息が響き渡る。
特殊犯捜査一係の刑事達は、ぼんやりと窓の外を眺める長谷川宣雄を見てこそこそと話し始めた。

「長谷川警部。最近ずっとあの調子だな」

「あの事件から、一向にハットリから音沙汰無いもんな」

「結局、大道家の事件も解決していないし、何の手掛かりも掴め無い。あの大道虎之介に、協力を断られても仕方ないよな」

「天下の警視庁捜査一課もお手上げってか？爆破事件から公安に事件が廻ると噂があったが、どうなることやら」

「まあ、俺としては去年みたいにクリスマススイブの夜に働くのはゴメンだからな。何も起こらないことを祈るまでさ」

「俺も〜」

二人はすっかり腑抜けになった鬼平をもう一度見た。

視線の先には相変わらず、ぼお〜と外を眺める長谷川宣雄がいた。

「警部宛にクリスマスカードが届いています」

部下の一人がデスクの上についての間にか置かれていたカードを長谷川に渡した。

ぼんやりとした眼のまま長谷川はカードを受け取り、裏を返す。

裏にも送り主の名はない。

「まさか…」

嫌な予感に声を上擦らせたのは、長谷川の部下の方だった。

長谷川の腑抜けた顔に生気が蘇る。

長谷川は急いで封を開ける。

「あ〜」

長谷川の叫びに部下は一斉に長谷川を見た。

「警部。やはりハットリからですか？」

ブルブルと長谷川の手が震えている。

月の裏であいましょう。

「な、何故切手が張ってない…？」
よく見れば、確かに郵便ではない。
「やだなあ。いつものことですよ」
ほのぼの笑う部下に長谷川の血管がプツンと切れた。
「ばっつかも〜ん」
その声と共にカードがびりびりと音を立てる。
「わ〜。警部。カードが！」
虚しく部下の声が響く。

終業式が終わり、門を出る高校生の群に服部の姿はなかった。
「テツ」

川沿いを一人で歩くテツを呼び止めたのは理真だった。

「服部君の具合は？ 轢き逃げした犯人は捕まったの？」

「服部はもう大丈夫だけど。轢き逃げ犯はまだ、捕まっていないよ」
「ふう〜ん。何か可哀相ね。世間じゃクリスマスイブだって言うのに」

理真の眼に遠くからでも見えるクリスマスツリーが止まる。

「懐かしい。まだ、あつたんだ…」

理真の視線をテツは追う。

側を歩く川の上流に位置した十階建てのビルの屋上に備えられたツリーは、テツが物心付く頃から、毎年見ることが出来た。

暫くこの土地を離れていた理真にとっては懐かしい代物である。

月の裏であいましょう。

“ D E A R 鬼平ちゃん。

メリークリスマス！

夜空に、一番輝く星を頂きます。

FROM 怪盗ハットリ

何とかカードを繋ぎ合わせようやく中身を読んだ長谷川が首を捻る。

「何だこりゃ？」

「イタズラでしょうか？」

部下も小首を傾げる。

「まったく怪盗ハットリは何を考えておる！これじゃあ捕まえられないではないか！」

いつもの場所や時間を予告していた予告状に対し、今回の意味不明な予告に長谷川はがっくり肩を落とした。

「この追伸はどういう意味でしょうか？」

「ラスト クリスマス？最後のクリスマスって…」

理真はテツと別れ、クリスマススイブを楽しそうに歩く家族連れをぼんやりと眺めながら足を止めた。

「どうしたのですか？」

理真は聞き覚えのある声にドキリとして振り返った。

「あ、あ、あ、アイアム…」

突然現れたイギリス人に理真は慌てて英語で答えようとした。

忘れもしない夏休みの補習授業が理真の脳裏に蘇る。

「あれ？日本語？」

発音のしつかりした日本語が理真の頭の中でようやく理解された。

「久しぶりですね。リマさん」

File 5：ホシノヒカリ（8）

「ロビン。お前も暇だな。昼の仕事は不景気なのか。オレ達の仕事は明日の夜だろ」

「暇なわけではないでしょ」

「ロビンは肩をすくめる。」

忙しい仕事の合間を縫ってわざわざ来たのだ。

「ところで、お前また予告状出しただろ」

「ロビンはいつもの極上の笑みを零す。」

極上のその笑みは虎之介の物とは明らかに違う。

雰囲気すらガラリと変えるロビンは二重人格者と言うより、女の時は女に成り切らないと気が済まないらしい。

これは、性格にかなり問題があると思えない。

呆れ顔の服部に揶揄するロビンの顔が近づく。

「だって、私の楽しみだもの。でも、大丈夫よ。今回は警察だけにしかも絶対に分からないように出しておいたから。失敗したら困るでしょ。何しろハットリの命が掛かっているんだから」

次の瞬間、ロビンの目から笑いが消えた。

真剣な顔は服部に虎之介を思い出させる。

「でも、その中に本当に13年前、ハットリが隠したピアスケースが入っているの？」

「たぶん。13年間、本当に一度も飾り付けが替わっていないのならな」

服部は病室の窓から遙か遠くに見えるクリスマスツリーを見つめた。

月の裏であいましょう。

「アメリカの養父の家にいた頃、オレの楽しみはエディのパソコン、特にデータが入ったファイルの鍵を壊すのが楽しみだったんだ」

服部の瞳に徐々に夕日に包まれ始めたクリスマスツリーが、小さ

く写る。

「ピアスケースにはその汚職の証拠が入っているって言うわけ？」
「いや。オレが入れた訳じゃない。母親がこっそりとエディのデスクから一本のフィルムを取りだし、ピアスケースに入れるのを見ただけなんだ。それがローガンの汚職に関する何らかの証拠が入っている保証はない」

「ハットリが言い出したのよ。そのフィルムを盗み、反対にローガンを脅せば何とかなるかもって。汚職の内容は覚えてないの？」

「知らないよ。確かに開いたエディのファイルにローガンに関する何かが入っていたような覚えはあるけど内容までは覚えてないよ。だから、これは勘だよ。でも、アルに手を引かせるにはそれしかないだろ」

警察に届けるわけにも行かない。

アルを殺すこともできない。

服部にはそれしか思いつかなかった。

「母さんは最後にはエディを憎んでいたから、エディが大事に持っていたそのフィルムを盗むことで、憂さ晴らしでもしたかったんじゃないかと思うんだ。エディはそのフィルムをとて大事にしていたから……」

服部は嗤い、窓の外へ視線を移す。

「オレ、ずっと忘れていたんだ。ピアスケースを盗んだことなんかじいさんが調査した書類を見て思い出したよ。ツリーは毎年オレの瞳に触れていたのに」

皮肉にも差し迫った危機にようやく思い出したのだ。

服部の目は未だに遠くに在る何かを見ていた。

服部から目線を外したロビンの目に夕日が赤く染まる。

物心付いた頃から神童と呼ばれ、常に別格扱いを受けていた虎之介でも、二歳の時の記憶などそんなにはっきり残っている訳がなかった。

月の裏であいましょう。

虎之介は実母を写真でしか知らない。

しかし、虎之介の継母は厳しいが優しい人だった。

虎之介にとつて実母は『虎之介を産んだ』事実以外、何の意味も持っていない。

しかし、服部にはくつきりと濃い影を落とし続けている。

「帰るわ。今夜はパーティーがあるの」

ロビンは入れ違いに入ってきた服部の母親に軽く会釈をし、出ていった。

「太一、今の方は、誰？」

「病院で知り合った人だよ。母親が入院してるみたい」
何度目の嘘だろうか。

服部の顔には何の後ろめたさも、もはや表れることはない。

「…そうなの。そうだ。太一、外泊許可が出たわ。早く支度して」

「え…。いつまで？」

家に帰れば外に出にくくなる。

未だ怪我をしている服部には両親は特に慎重になるだろう。

服部は外泊許可を出した老人の知り合いである院長を恨まずには
いられない。

「26日の朝までよ。でも、正月までには退院できると院長先生も
言っていたわ」

服部は黙って支度しながら、万が一のための嘘を考え始めていた。
表に出る事のない罪悪感は何処へ行くのだろうか。

何処にも行きはしない。

一つ一つゆっくりと降り積もるのだ…

久しぶりの家は何も替わってはいなかった。

「嬉しくないの？」

「え？」

母親の不安そうな顔に、キリキリとした痛みが服部の心臓に喰い込む。

いつもの年より、深い痛みが心臓から内蔵の全てを食い尽くして
いるみたいだ。

「嬉しいよ……」

どうしてそんな顔するの？母さん。

ボクはどんな顔してる？

息が詰まる……

「どうした？太一」

テーブルに豪華に並べられた夕食の向こう側から父親が笑顔で訊く。

「病み上がりだからな。あんまり無理して食べる事ないぞ。でも、院長先生が太一の回復ぶりに舌を巻いてたぞ」

出血は酷かったが、腹の傷自体は大したことはない。

銃弾は内蔵を外れていたのだ。

それは、この人達には知りようのない事実。

いつもより、痛いのは、思い出したせい？

脳に刻まれた現実が痛みを際立たせる。

痛みは涙となって流れることは叶わず、ひたすら血液となって体を循環し続ける。

イタイ

嘘で固めた服部太一。

「太一……。どうしたの？」

母の不安そうな顔。

イタイ

心臓の痛みがさらに深く食い込む。

「母さん。もう、いいじゃないか。太一は疲れているんだ」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

イタイ

「でも…」

「母さん！」

語調を強めた父から笑顔が消えた。

イタイ イタイ イタイ イタイ

どうして？

どうしてそんな顔するの？

それは、ボクのせい？

「ボク、何か悪いコトした？」

二人の顔がさらに不安で歪む。

ヤメテ…。

そんな顔しないで。

お願いだから…。

体中の細胞が震え始める。

ドウシテ？

「どうして、そんな顔するの？」

ボクは、悪魔…

「ボクは、悪魔？」

クリスマス・イブ。

幸せな人間には最高の日、それ以外の人間には、これ以上に最低の日はないだろう。

File 5：ホシノヒカリ（9）

光は冷たかった。

大道虎之介を乗せたエレベータは最上階で止まる。

家を焼け出された虎之介は、家を建築中、マンションで一人暮らしをしていた。

もちろん、家が火事になる前からマンションは幾つか所有している。

虎之助は、特にセキュリティが万全なこのマンションを愛用していた。

「何だよ。朝帰りかよ」

東から降り注ぐ朝日を容赦なく顔に浴びている虎之介は、自室のドアの前で顔を膝に埋め縮こまっている服部を見付けた。

「このセキュリティ会社にクレームをつけなければ、と思いつながら、答えた。

「イブの夜に一人で過ごすほど、オレは無粋じゃないからな」

「よく言うよ。去年の事は忘れたか」

服部は顔を膝に埋めたまま皮肉を言う。

「ハットリこそ、こんな朝早く人の家の前で何している……」

そう言いながら、服部を立たせようと腕を掴んだ虎之介は顔を強ばらせる。

「まさか、一晩中いたのか？」

服部は冷え切っていたのだ。

虎之介は冷たい服部の両腕を掴み、服部を立ち上がらせようとした。

早く部屋に入れなければ。

無理矢理虎之介に両腕を掴まれ、服部は顔を上げた。

無防備な服部の顔が朝日に照らし出され、虎之介は息を飲んだ。

月の裏であいましょう。

「泣いているのか？」

「とうとう帰ってきませんでしたね。絵里お姉さまがクリスマスパーティーしようなんて事を言うからです」

麻美が冷ややかに言う。

「何の関係があるのよ」

絵里が顔をひきつらせて返す。

「しかも、絵里お姉さまが料理するなんて言うからです」

麻美はさらに冷ややかに言う。

「どういう意味よ」

絵里がさらに顔を引きつらせる。

目の前の冷え切った料理を挟み、二人は落ち着かない様子で向き合っている。

「つまり、人が珍しいことをすると、こんなことに…」

「とにかく、どうして理真が帰ってこないのよ。あの子が私に何の断りもなく外泊するなんて信じられないわ。まさか、誘拐？でも、家にはお金なんてないわ」

「怨みなら、定期預金したいくら貯め込んでいますけど」

「今の時代、定期預金したところで大した利子なんて…。なんて事を言っている場合じゃないわ。だいたい怨みを貯めても素性を知られるほど、私はへまな事していないわ」

「昼まで待って、それでも帰ってこないようなら警察に届けるしか在りませんわね」

警察の世話にはなりたくなかったが、理真の行き先は麻美にも絵里にも見当が付かない。

あらゆる情報網を持っていたとしても、自分の家族である理真の居場所はその情報網の範疇には入ってはいない。

麻美は無表情だったが、麻美らしくない饒舌な皮肉が麻美の焦り

月の裏であいましょう。

を物語る。

絵里にはそれが解る分、さらに焦りが募る。

突然絵里が立ち上がった。

「彼に頼むわ」

それしかない。

冬の空の下、冷たい石が幾つも並んでいる。

石の下に眠るのは、さらに冷たい無機質な白い骨。

石の前で手を合わせるのは残された者の慰めの儀式。

「早いものだな。あれから一年も立つんだな」

長谷川宣雄は石に刻まれた娘の名を瞳に写す。

『美雪』と刻まれた両側に冬には珍しい向日葵の花が添えられている。

おそらく美雪を産んだ母親が供えた花だろう。

テツは黙って父親の隣に立っていた。

「あの夜。美雪が言った事、覚えているか？」

「あの夜？」

テツは聞き返す。

長谷川宣雄はぼんやりと娘の思い出に浸るように呟いていた。

「ハットリは宝物だと、最高のバースデープレゼントだと言った」

「親父……」

長谷川宣雄にはその言葉の意味は分からなかった。

しかし、本人すら気付かない内にハットリに対する認識がその夜から変わっていったのは事実だった。

長谷川は娘の思い出からゆっくり目を醒ます。

「怪盗ハットリから予告状が届いた」

「それで、次はいつ、何処で、何を盗むんだ」

テツは父親に詰め寄る。

宣雄は肩をすくめ継ぎ接ぎだらけのクリスマスカードを出す。

「何だ、これは？」

テツもさすがに意味不明のクリスマスカードに顔を顰めた。

夕刻、二人が家に帰ると同時に電話が鳴った。

『テツ君？服部太一の母です。テツ君のお父さんは確か警察の人でしよう』

焦りの混じった声にテツは眉を寄せる。

「そうですね。何かあったんですか？」

『太一が、昨日の夜から帰ってこないの』

「服部が？」

「これは三階の霊媒師殿ではございませんか。どうなされました？」

「こんにちは占い師さん。実は貴方に頼みたいことが在ります」

「ワシに、ですか。これは珍しい事も起こりましたな」

老人は白い髭を弄りながら、この霊媒師がただ事では済まされない状況に陥っていることを容易に察した。

「理真がいなくなりました。貴方ならおわかりになるのではないでしょうか」

「理真が？」

絵里は頷く。

老人の嫌な予感が漆黒の瞳にさらに深い影を刻む。

絵里は両手を握りしめ声を絞り出した。

「お願いします。お祖父さん」

老人は僅かに眉を動かす。

「やはり、知っていたのか……」

「……祖母は何も話してはくれませんでした。こんな仕事していると色々な事が見えてきます」

妻子を捨てたのは50年以上も昔の事だ。

妻とまだ幼い娘を捨てた。

その娘の子供たちがこうして半世紀をかけて戻ってきた。
妻には、不思議な力があつた。
その力が働いているのだろうか…

「祖母には不思議な力がありません。霊能力者としての祖母が残してくれたお客様のお陰でこうして生きていられます。もともと、私たちには何の力もありませんから、苦労しますが…。何の力もないからこそ、様々な情報をかき集めて仕事をしています。だから、わかつてしまったのです。恐らく麻美も知っています。あの娘も私もあなたに似ています。でも、理真は違います。あなたの血を継いでいるとは思えない程真つ直ぐな心を持っています」

「そうか…」

どんなに皺が増えても何一つ得る物は無いように思えた日々が老人の中で沈殿していく。

建物の影になり見えない筈のクリスマスツリーをまるで見るかのように、顔を上げその方角を老人の瞳が射した。

「理真を探してください」

「クリスマスが終わる頃、ツリーの下に…」

老人はそれ以上何も言えなかった。

何も視えて来ない。

視たくてもその漆黒の瞳には闇のみが犇めいていた。

「いいのか。天下の大道虎之介が一日中オレなんかにつき合っていて」

「だから、いいわけないだろ」

虎之介は一日中ソファに蹲ったままの服部に何度目かの溜息を吐いた。

「ロビンは二重人格だよな。女の時は結構優しいのに…」

「優しくして欲しかったのか？」

月の裏であいましょう。

「……」
「素顔の時に男に優しくするのは性に合わないからな。それより、今夜は行くんだろ。ハットリ」
「……もう、どうでもイイ」

「私の家、お金ないわよ。怨みなら定期預金で貯金したいくらい貯まってるけど……」

理真は引きつった笑顔を元英語の先生に向けた。

生粋のイギリス人はさらにさわやかな笑顔を見せる。

「うん。知っているよ。窃盗罪。不法侵入罪。詐欺罪。君もなかなかやるね」

「あ、ありがとう」

冷や汗が理真の顔を伝う。

訳も分からず無理矢理、英語の先生だと思っていたイギリス人に拉致され一晩が過ぎた。

並大抵の事では驚かないと思っていた理真だが、この状況はさすがに理解に苦しんだ。

「でも、僕が欲しいのはお金じゃないんだ。君は、餌だよ。大物を釣るためのね」

「私が餌？……ちなみに先生の釣りたいお魚って何ですか？」

「怪盗ハットリだよ」

「どうして……ハットリの？」

突然鳴り始めた携帯電話に、アルはニッコリ微笑んだ。

「さて、ミスターはどう出るかな？」

「もしもし。大道です。……貴方ですか。ええ、ハットリならここにいます」

虎之介は携帯電話を握りしめたまま、服部に目を向けた。

月の裏であいましょう。

その顔には険しさがこもる。

分かりました、と最後に言う。と虎之介は携帯を切り、それを服部の向かいのソファに放り投げた。

そして、その手で服部の襟首を掴む。

服部は突然の虎之介の行動に目を見開く。

「いい加減。目を覚ませ。一体いつまで、親離れ出来ないガキみたいに拗ねているんだ」

グツと近づいた虎之介の顔には、明らかに今の服部への怒りが満ちていた。

虎之介は服部を乱暴にソファに投げつけ、窓の外に広がる夜を睨み吐くように言い放った。

「アルが理真を人質に取った」

File 5：ホシノヒカリ（10）

川側に面した十階建てのビルの屋上は、高さ2メートルのフェンスに囲まれ、中央には未だ飾り付けが付いたままの10メートル近いクリスマスツリーが立っている。

冷たい風は徐々に速度を増しツリーを揺らす。

アルは黄金の髪を揺らし、フェンス向こうのツリーを眺めた。

その隣で理真は30メートル下の川を恐る恐る見下ろした。

「本当にハットリは来るの？」

「餌が気に入ればね」

「じゃあ。来ないかも。先生が何を勘違いしているのか分かんないけど、私とハットリは特に親しい訳じゃないもの」

「そう。でも、彼は今日、元々、ここに来るつもりだから、ついでに助けしてくれるかもしれないね」

「…ついだって。まあ、それなら可能性は…。…ねえ。先生は怪盗ハットリとどういう関係なの？」

「うるさい人質だな」

アルは内ポケットから掌に収まる大きさのスプレーを取りだし、一吹きで理真を眠らせてしまった。

フェンスと30メートルの奈落に繋がる縁には一メートルの幅がある。

理真はその僅かな幅に寝かされた。

「待たせたな」

アルは待ちに待った恋人でも見るように微笑みながら振り返る。

フェンスに立っていたハットリは軽々とフェンス外側に飛び降りアルに歩み寄る。

「理真は？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

アルは顎で後ろの理真を指した。

「ちよつと眠っているだけだよ」

風は音を伴い地上30メートルの空間を別世界へと引き離す。

ハットリは足下に広がる夜の世界を見下ろすこともなく、アルを真っ直ぐに見据える。

理真を後ろにアルは一步一步ハットリに近付いて行く。

容赦ない風は、ギシギシとフェンスを軋ませ、ハットリの頬を叩き付ける。

ギシッ。ギシッ。

手を伸ばせば届く範囲に入る。

青い瞳にハットリの口元が弧を描く。

ギシッ。

ハットリの口元が描いた弧にアルはハッと息を止め、後ろを振り返る。

理真の姿は既に無く、代わりに服部が立っていた。

もう一度アルは先程まで見ていたハットリを振り返る。

アルは楽しそうに笑い出した。

「タイチの相棒って訳かつ」

言い終える前に、アルは目の前のハットリの首を掴んだ。

その勢いにハットリに変装していたロビンは倒れ、アルはロビンの首を掴んだまま、ロビンの腹の上に跨った。

アルはハットリの顔を剥がし露わになった虎之介の顔を睨んだ。

「ロビン！」

叫んで走りだそうとした服部にアルが目を向けた瞬間。

ロビンは自由になる右足でアルの首に蹴りを回した。フェンスに叩き付けられたアルは素早く身を立て直す。が、即座に足を払われる。ニツと嗤い虎之介は目で服部を促そうとした。予定通り自分がアルを惹き付けている間にツリーに、と。金網に手を掛けた服部を蒼い視線が一瞬捉えると同時に、銃声が響いた。

ロビンは銃弾を素早く避けたものの、バランスを崩す。真横には足を踏み出せない場が広がっている。その隙にアルは身を躍らせる。形勢はまたもや逆転し、アルはロビンの腹に跨る。

ロビンは首を掴まれ宙に頭を晒された。

ロビンは右足を上げた。

「同じ手が通用するか」

アルは振り向きもせずロビンが振り上げた右足を撃ち抜いた。

金網を掴んだまま固まってしまった服部は自分の体から全ての血の気が引いた音を聴いた。

「アル。やめてくれ！ロビンには関係ないだろ。オレ達はローガンの汚職に関するデータを握っている。ここでオレ達を殺せばそのデータは自動的にインターネットを通じ全世界に流れる様に仕組んでおいた。だから……」

勿論、服部の出任せである。

さらに足を進めようとする服部にアルは冷たく言い放つ。

「来たら撃つよ」

服部の言葉など聴いていないかのようにアルはロビンの顔を見つめる。

右足の激しい痛み、整った虎之介の顔が歪む。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

「今の君の顔も綺麗だが、僕は女性の君の方が好みだな」
虎之介の苦痛に歪む顔の背後には、30メートル下に闇を飲む深い川が流れる。

蒼い瞳にはそこに広がる闇が映し出される。

ロビンは首を掴まれたまま、その顔だけが空中に浮いた状態になっていた。

「次は、その顔」

アルはロビンの右足を撃ち抜いた銃をその額に押し付けた。

二人の足下にロビンの鮮やかな赤い海が広がりを見せる。

「アル。もう、やめよう。オレが死ねば、全て終わるんだろう」

服部は川の写す闇からキラキラと放たれる光を見つめる。

「ハットリ。お前、何するつもりだ」

闇を見つめる服部にロビンは震える声で、訊く。

服部は僅かに視線をロビンに向ける。

「これ以上、アンタに付き合わせるわけにはいかないよ」

ロビンには痛いほど解っていた。

服部にとって、死とは、それ程の重みはない。

その一歩を踏み出すことは、そこに唯立っている事よりも遙かに簡単だった。

ギリギリと額に喰い込む銃口を感じながら、ロビンはアルを見据えた。

「撃てよ」

ロビンの眼光が、アルの蒼い火を煽る。

しかし、蒼い熱は目の前の男から服部に矛先をかえる。

「…タイチは、何か勘違いしているようだから教えてあげるよ。タイチを殺害するように、依頼したのはローガンではないよ。いくら何でも、当時2歳で、その後、行方不明になった子供をわざわざ殺し屋に殺させるわけが無いだろう。タイチの養父であったエドワードは僕が殺したけどね」

「じゃあ、どうしてアルは…」

服部の問いに、アルは僅かに口を動かす。

「悪魔の子」

風よりも静かな振動が服部の心臓を瞬間に冷凍する。

それは、服部の深淵だけに巣くっていたはずの膿んだ傷。故意に見ずに生きてきた冷たい傷。

「タイチ。君の實の母親に依頼されたんだよ。悪魔の子を殺して欲しい、と」

凍り付いた心臓はあまりに脆く、粉々に砕け散る。

確かにこのツリーの下で感じた温もり。

凍り付いた心臓の奥に隠し、でも、13年かけても溶かし切れなかった想い。

服部の瞳にさらに深い闇が漂う。

この闇は13年間の年月、流れることなく、その瞳に留まり、腐り続けてきた。

アルの優しい声が、滑らかに風に乗る。

「月に住んでいるよ。タイチの母さんは」

今夜、月は何処にもない。

しかし、虚空を見つめるアルの瞳は、月が浮かぶ湖を想わせる。

湖面はキラキラと静かに波打つ。

波が、ぐらりと立つ。

ぴちゃん。

赤い血が、弾けた。

ロビンの額を押し付けていた銃はその瞬間川へ消えた。

アルは右肩から溢れる血を押さえ、僅かに呻き声を上げた。

月の裏であいましょう。

「アル。お前はワシに復讐したいんだろ」

奥に響く低い声。

それに反応した微妙に掠れる声は風に乗リ服部にも届く。

「これは、ビジネスです…」

「なら、お前はとつくにハットリを消しておる。爆破事件といい、至近距離で外した銃弾といい。ハットリを殺す気などないだろう？」

静かな蒼が憂い自嘲する。

「その様ですね…」

ビジネスと割り切り服部に手を掛けるつもりが、無意識に別の方向へと感情が流されていた事を、漆黒の闇に否応なく気付かせられる。

そして、少しずつ狂い出していた事を。

「今まで僕自身を支えてきた価値観を壊されなくなかったのかも知れない」

「だから、か？」

だから、敢えてビジネスとして服部を殺す事で自分の価値観を守ろうとしたのか。

「貴方を慕う気持ちも、タイチを想う気持ちも、認めたくはなかった。…つまらない感傷でした。子供と同じです。あなた達に家族を視ていたのかもしれない。だから裏切られるのが怖かったんです。タイチが来てから、貴方は変わりました。それは私にとっては裏切りでした。貴方は価値観を静かに変えていった。人の命さえも依頼品にすぎなかったあなたの価値観は、6年の歳月を掛けゆつくりと変化し、そして今尚変わり続けている。でも、結局、僕も変わっていったんですね…」

狂ってしまったのか、狂気から覚めたただけのか？

「永遠など、ありはしない…」

夢を見たのか、夢から覚めたのか？

「ア…ル…」

月の裏であいましょう。

服部の眩きに蒼く深い湖面から滴が零れる。

零れた滴はロビンの頬に落ち、蒼い瞳は滴に濡れたロビンをつめる。

「君に嫉妬したよ」

ロビンを見る蒼い瞳が、静かに瞼を閉じた。

「つまらないショーでしたね……」

それは、故意だったのか、またはそうでないのか。

アルは音もなく、川に消えた。

蒼い湖は深く漆黒の川に流された。

冷たい風だけを残して。

月の裏であいましょう。

File 5：ホシノヒカリ（11）

カシャン。

服部は、一度激しくフェンスを殴りつけた。
この感情は怒りなのか。

服部にはこの結末が理解できない。
消えるべきは自分だったのではないか。
アルに巣くう闇は自分と同質ではなかったのか。
アルの言葉は服部には理解できない。
何が変わっていたというのだ。
6年の内に何が変わったというのか。

そして、さらに16年の年月アルと共に生きた老人は動くきつかけを待っていた。

きつかけはロビンが作った。

「じいさん。病院行きたいんだけど。オレ、明日大事な会議あるから」

ロビンは右足を庇いながらフェンスを駆け上がり、ぶつきらぼうに言葉を投げた。

そして、それは老人を現実に引き戻す。

老人は重い口を開いた。

「ハットリ……。お前の母親は精神を患い、病院におった。子供を捨てた罪悪感に正気を失い、やがて“悪魔”を夢に見るようになった」
「月、Luna……。精神病院、つまり、Lunatic asylum、ってわけか。それで、悪魔はオレ？」

「いや、本人は“悪魔から私の子を助けて”と言っているらしい。
おそらくアルはエドワードから、昔、幼いハットリを悪魔と罵って

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

いた事を知ったんだろう」

「…次期アメリカ大統領に命を狙われるって話よりホントっぽい作り話だな」

「その手にしなければ信じられないのか？」

「さあな」

月の光は狂気を誘う。

昔からヨーロッパ人は月が人間の精神に悪影響を与えると信じてきた。

皮肉に笑った服部は、月があるであろう方向に目を向けた。

月はない。

雲に隠れているのであろう。

「ハットリ」

突然、フェンス向こうから、ロビンはハットリ君のお面を投げる。

片手でそれを受け止めると、ロビンはニツと笑う。

それはいつのもロビンであり虎之介でもある。

「怪盗ハットリの予告状、忘れてないよな」

夜空に、一番輝く星を頂きます。

視線はツリーの頂上に輝く星を射す。

「まあな…」

手に持つハットリ君の微笑みに、僅かに服部の表情が緩む。

老人はゆっくりと黒い瞳を閉じた。

そして、再び開いた瞳にはロビンと服部がいる。

ロビンは服部に向かい、後はお前の問題だから、と言わんばかりに肩を竦めた。

そして、老人に付き添われ屋上から去っていった。

服部はゆっくりと屋上の淵を歩き始めた。角を曲がると、理真が未だに冷たいコンクリートの上で眠っている。

12月の夜中にずっと眠らせておく事は出来ない。

ロビンから受け取ったハットリ君のお面を被り、ゆっくりと理真の上半身を起こした。

「理真……」

何度か揺ると、理真はようやく重い瞼を開ける。

「……ハットリ？」

トロンとしたその目は、まだ夢の中にいるようだ。

理真は夢の中で嬉しそうに手を服部の掛けたお面に手を伸ばす。

「……オレは、……何者なのか？」

ピクツと理真の手が服部の声で止まる。

「それは、私の台詞でしょ。あなたは誰？」

幸せな夢の続きを見ているような理真は、無邪気にお面に手を掛け、それを取った。

「……服部君？ハハ……。やっぱり変な夢……」

理真はまた眠り始めた。

全てを夢だと思っているのか、そして、それはよほど良い夢なのかうつすらと幸せな笑みを浮かべる。

静かな足音に顔を動かすと、見知らぬ二人の女が立っていた。

一人は大人の女性、一人は自分より若い少女、どこかで逢ったような気がした。

しかし、どうでもいいことだ。

「理真は生きているのよね？」

服部は小さく頷いた。

月の裏であいましょう。

二人は理真を抱き上げると屋上から姿を消した。服部は特に二人の素性は気にしなかった。

二人の表情を見れば訊くまでもない事だ。

一人残された服部は星を見上げる。

今夜、一番天辺に輝く星を。

13年前に返しそびれた想い。

今からそれを手に入れても意味のない事に思われた。

それでも、…ロビンの笑顔を思い出しお面を顔に掛ける。

これは怪盗ハットリの最後の儀式。

最後の盗みになるだろう。

服部は木を掴んだ手にグツと力を込めた。

月の裏であいましょう。

File 5：ホシノヒカリ（12）

縦の木に咲く冬の花。

それは、子供達の目を楽しませる、キラキラ光るデコレーション。その中を服部は持ち前の運動神経で軽々と登る。

そして、その星に13年の時を超え、そっと手を触れた。

その時、

「怪盗ハットリ！」

耳に慣れた声が足下から響く。

テツ！

下からテツが服部を目指し上ってくる。

「『一番輝く星』それはズバリ、一番高い所にある星、つまりここだ。オレ様って超勘イイぜ。ハットリも年貢の納め時だ！」

と、何やら聞き覚えのある叫びを意気揚々と吐きながら、一歩一歩近づいてくる。

「冗談」

声にならない眩きを漏らした時だった。

このツリーは当然屋上に生えているわけではなく、人が上る為に立っている訳でもない。

二人分の体重が先に行くにつれ、ツリーはバランスを崩す

そして、

「うわわ〜」

月の裏であいましょう。

テツの叫びとともに、川とは反対の方へ徐々にしなる。

服部の目にも地上十階からのアスファルトが写る。

「あっ！」

テツからさらに上がった叫びに、服部はお面の狭い視界を星へと戻す。

手に触れたと思った星がツリーから外れ、屋上の淵に弾けた。

闇に広がるのは、

星？

二つの光の欠片、それは凍り付いて砕け散った想いなのか。
イミテーションの星から弾き出されたのは、一对のダイヤモンドのピアスだった。

そして、ピアスと共にケースから飛び出した一本のフィルム。
それは、そのまま全てアスファルトへ吸い込まれた。

瞳に放たれた輝きの余韻。

溶けることのない想い…

ギシッ。ギシッ。

ツリーの軋む音は、徐々に音を強める。

服部は宝石が消えたアスファルトに、走り寄る小さな影を見付けた。

「テツ！」

遠くから聞き覚えのある長谷川宣雄の声に、服部から溜息と共に嗤いが漏れる。

月の裏であいましょう。

おい、おい。長谷川オンパレードか？

「親父？…うあっ！」

その瞬間、テツが掴んでいた枝が折れ、テツの体がツリーから離れる。

テツの背後に広がるのはアスファルト。

服部は自分の足下の枝を片手で掴み、グッと押さえ、その反動を利用して、一気にテツの近くの枝へ跳躍する。

お面は邪魔だったが、今はそれを取る余裕さえない。それでも、間一髪で服部はテツの腕を掴む。

しかし、その反動は、

バキッ。

無情にも根元からツリーを折ってしまう。

ツリーは音を立て傾く。

「テ、テツ！」

ビルの下で長谷川が状況を理解し屋内へと走って入る。

片手にテツを掴んだまま服部は咄嗟に身を捻り、ツリーを掴んでいた方の手を離しフェンスを掴む。

かなりの衝撃が腕に走る。

虚空に晒されたテツの体重は、引力に従い二人を闇に引きづり込もうとする。

フェンスに掛かる手は襲撃に耐えきれず血にまみれ、金網に食い込んだ指は鈍い衝撃を伴いつつ下へ下へと引きずられる。

ついに服部の体は屋上の淵に叩き付けられ、服部の右手に全て預

月の裏であいましょう。

けたテツの足下に、30メートルの空間が口を広げる。

「痛っつ〜」

脇腹が熱い。

角に押し付けられた脇腹の傷が開いたらしい。

目の前に、雪がちらつく…

服部の片手を必死に掴むテツの目の前が、赤く染まる。

それは脇腹から溢れる服部の血だ。

血を浴びたテツの顔は蒼白になる。

「ハットリ。血が…。無理するな」

…ちらつく雪。

「じゃあ、この手、離していいか？」

…この木の下、確かに感じた手の温もり。

「いいわけないだろ。死んでも離すな」

言っていることが支離滅裂だ。

クスツと服部から息が漏れる。

激しい動きにも関わらず、ハットリ君のお面はしぶとく服部の顔を離れないでいた。

テツはハットリが服部だと気付いているのだろうか。

脇腹の激痛と手の痺れにぼんやりと考える。

「テツ！」

月の裏であいましょう。

長谷川宣雄が十階から顔を覗かせ、テツの体重が服部から彼の父親に移る。

ハットリ君のお面が空に微笑み、空に飛んだ。
汗にグツシヨリとした服部の顔が顕れる。

服部の瞳に夜が広がる。

「服部……。お前、やっぱり……」

夜の彼方から、テツの小さな呟きが聞こえたような気がした。

そして、服部の体重が地球の重力の中に放たれた。

月の裏であいましょう。

File 5：ホシノヒカリ（13）

アスファルトに散らばった宝石を、一人の男が見つめ、ふと空を見上げる。

空から、雪と共にハットリ君のお面が降ってくる。

男はそれを受け止めた。

「服部いーーーーー」

テツの叫び声が遠くに聞こえる。

何だよ。

結局、落ちるのはオレだけか。

服部の目の前に、全てがスローモーションのように、雪と共に舞い降ちる。

…ちらつく白い雪。

あの夜、確かに感じた手の温もり。

闇に放たれたダイヤモンドの輝き。

蒼い瞳に浮かぶ月。

…眩しく輝く、美雪の笑顔。

雪の如く舞い散る桜の中で、微睡む少女。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

少女に秘められた印象的な瞳。

ロビンの極上の笑み。

天辺の星。

温もり。

父の笑顔。

母の優しい声。

一人、雪の中。

白い髭のお爺さん。

不確かな偶然。

全てが、

全てが…

『起きろ』

全てが、

『ハットリ』

ボクの偶然。

今夜の雪も…全て。

冷たい雪が服部の頬を撫でる。

頬の冷たさを確かに感じ、服部は目を見開く。

…生きているのか？

十階から落ちて生きているのか？

もし、生きているとしたら、ソイツは、

「悪魔、か…」

嗤おうとした服部は脇腹からの激しい痛みを感じた。

脇腹を押さえた掌に血が滲む。

服部は白い息を吐く。

「痛つてえぞ…」

どこか朦朧とする視界の片隅に雪の白さに鮮やかな色彩が混じる。服部の周りから解き放れたように上へ上へと、色とりどりの丸い風船が天に向かいゆつくりと昇っていく。

服部が落ちたのは、トラックの幌の上だった。

服部が幌の中央に落ちた為にシートを繋いでいたひもが切れ、服部の重みに引きずられたシートの隙間から大型トラックに詰められていた風船が、幾つも幾つも服部の瞳に写っては暗闇へと吸い込まれていく。

「何か盗れたか？」

唐突に聞こえた声に服部は見向きもせずに応えた。

「アンタが悪魔か」

地獄に向かうべき自分を迎えに来たのか。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

初めて聞く声に服部はどこか虚ろに訪ねる。

「悪魔？それは何だ？」

落ち着いた低い声だった。

「物を盗むヤツか？人を傷つけるヤツか？法を破るヤツか？周りに嫌われるヤツか？人と違うヤツか？」

「分からない……」

服部は血の付いた両手の甲で両目を覆う。

「分からないから、知りたいんだ」

「オレは悪魔だ。オレの言う悪魔は、傷つけないモノを傷つけるヤツだ。それはオレが言う悪魔だ。お前はオレじゃない。ホントの事など始めから無いんだ。真実はお前が決める。捜すんじゃない。知るんでもない。決めるんだ。自分で決めるんだ。真理まじこ」

服部は指の隙間から空を見つめる。

色とりどりの風船は徐々に遠退き、やがて消える。

鮮やかな色彩に奪われていた瞳は改めて白に気付く。

暗闇から幾つもの白い欠片が大きさを増しながら服部の瞳に向かう。

「お前の中に在るモノの中から真実を決める」

真実が知りたかった。

本当の事が知りたかった。

自分が何者か知りたかった。

自分の中に在るモノ？

何が在るんだ？

「早く医者に行った方がいい」

それだけ言くと声の主は消えた。

服部は落ちた状態のまま仰向けで、手を広げた。まるで、空に広がる闇を抱き占めるように。

闇から次々と生み出される白い欠片。
それは、今は見えない月からのメッセージなのだろうか。
月にいる誰かからの…

綺麗だ。

雪はこんなにも綺麗だったのか。

ああ、全然知らなかった。

脇を抱えながら、降りしきる雪の中を服部は歩き出した。

どんなに押さえても血は止まらなかった。

白い雪に赤い血が点々と跡を付ける。

おもちゃ屋からのこの道は、13年前に、通った道。

降り止まない雪。

お爺さんに逢った十字路。そして、西に5分歩くと偶然…、

「太一！」

ほら、新しいお父さんとお母さんだ。

バシッ

服部は殴られた左の頬を押さえて、父さんの怒った顔を初めて見た。

「心配掛けるな。病院行くぞ」

「救急車、呼んだほうがいいわ」

母さんの声だ。

脇腹から流れる血に戸惑いながら、父さんがコートを脱ぎ重傷の息子に掛ける。

その拍子に父のポケットから、あるモノが落ちた。

ハットリのお面だった。

服部の父が落ちたお面を拾い上げ、ほんの少し微笑んだ。

「さっき、道で変な人に会ってな。クリスマスプレゼントだと言っ

月の裏であいましょう。

「渡された」

救急車のサイレンが耳を打つ。

「そうね。変なこと言っていたわ。盗まれないように、気を付けて下さいって」

サイレンの音はさらに音量を増し、やがて激しい赤い光が迫ってきた。

服部の瞳にゆらゆらと赤い光が点滅していた。

「逮捕しないのか」

テツは残された赤い血を見つめながら父親に言った。病院に連絡を入れ、服部の無事を確認した後だった。

「誰を？」

無表情な父親の顔に、思わずホツとしそうになる顔をテツは隠した。

長谷川は残された服部の血をジッと見た。

「別に怪盗ハットリはここに来るとは言っておらん」

テツは弾かれたように父親を見て、そして、その背をポンツと叩いた。

「なあ。親父はどうしてここに来た？」

「お前。何やら考え込んでいたと思ったら、予告状を投げて、『ツリーだ』と叫びながら飛び出して言っただろ」

「そうだったっけ？」

「それにしても…、このオーナーにさっき電話したんだが、彼はお客様です。不法侵入ではありません。と言われたよ」

おもちゃ屋の向かいにそびえるビルから、二人を見下ろす中年の男がいた。

垂れ目で小柄な男はゆっくりと受話器を下ろした。

「これで、いいですか？」

月の裏であいましょう。

そう言つて、隣に立つ老人に笑いかける。

「ありがとうございます」

「いえ。私には何故あなたがこのような頼み事をされたり、ツリーの片付けを一日延ばして欲しいと頼まれたかは分かりませんが、訊くことは思いません」

垂れ目の男はさらに目尻を下げた。

年老いた手相見の深い瞳に空から降る雪が次々と通り過ぎていく。

月の裏であいましょう。

次回、最終回です。

File 5 : ホシノヒカリ (13) (後書き)

File 5：ホシノヒカリ（完）

年が明け、透き通るような青空がこれから続く寒い冬を忘れさせようとする。

昨夜、降った雪がうつすらと木々を白く染め、アスファルトからの冷えた空気が、服部の足下にまとわりつく。

今日から始まる新学期にウンザリしながら足を進める。

後ろから軽い足音が聞こえたと思ったら、理真の声が響く。

「服部君。大丈夫？」

心配そうに服部を覗き込むその目は特に何も語ってはいない。

理真は少し笑いながら話し始めた。

「なんか、変な夢を見たの。何だと思う？」

「僕が、怪盗ハットリだった夢？」

「え？どうして分かったの？」

理真はキョトンと立ち止まった。

そして、そのまま視線は服部の背後に移る。

自分の背後に向けられた理真の視線に気付き服部は振り返る。

「ロビン…」

口に手を当て、服部はロビンが立っている所まで走った。

あの日以来だった。

ロビンはフェラーリの前で長い髪を掻き上げてから、小さく手を振る。

「大丈夫なのか？」

大道虎之介は次の日から平気な顔して仕事を始めていたのだ。

周りの者は誰も虎之介が重傷を負っている事に気付いていない。

ロビンは極上の微笑みで肩を竦める。

「いやね。私を誰だと思っているの？」

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

それは、あまり考えたくない。

「なによ。その顔。あの日泣いた顔はあんなに可愛かったのに」
服部はロビンから顔を背ける。

どんなに記憶を遡っても泣いた記憶はあの時、一度だけだ。

唯一、服部の逃げ込めた場所がロビンの所だった。

「うるさい。オレは元々可愛いんだよっ」

服部は照れたような、怒ったような中途半端な表情を浮かべた。

「あら。お言葉ね。あんなに優しく慰めて挙げたのに」

「アレが、優しくだと」

服部は優しくされた覚えはないと言わんばかりにロビンに詰め寄る。

笑いを堪えるロビンは、ポカンと口を開けこっちのやり取りを見ている理真に気が付いた。

「優しくして挙げたじゃないこんな風に…」

ルージユの似合う顔がグツと近づいた。

変装の得意なロビンだが、ロビンの顔は、実際、素顔の虎之助の顔に薄く化粧しただけだった。

「ちよっっー。ロビッ…」

理真のあつけにとられた顔を服部の肩越しに見ながら、ロビンは笑い出した。

ようやくロビンから解放され、服部は叫んだ。

「オレには、そんな趣味はない」

そう言って走り出した服部にロビンは追い打ちを掛ける。

「ママが恋しくなったらいつでもおいで」

朝の光はロビンの華やかな微笑みを、明るく照らす。

全くアイツは何を考えているんだ！

だが、アイツには一生敵わない。

服部は確かにロビンに救われている。

アルは結局見つからなかった。
それらしき遺体が発見されたと言うニュースも聞いていない。

服部の両親は何一つ訊こうとしなかった。
いづれ二人にいろいろな話をするところがあるだろう。
そして、それは遠い未来ではない。

「オッス。元気か？」

いつもの声が服部の鼓膜を振るわす。

「昨日会っただろ。全く毎日毎日、我が家まで来てくれてご苦労様だよ」

「嬉しいだろ？怪盗ハットリの尻尾を掴むまでは、何処までもついて行ってやる」

冬休みの間中、聴かされた文句にウンザリしながら、徐々に暖かみを持つ太陽を眩しそうに見る。

「服部。いい加減、教えろよ。あの夜、何しにおもちや屋に…」

「テツ。知っているか？クリスマスって…」

テツのいつもの追求を逃れようと会話を変えた服部に今度はテツが溜息を吐く。

「冬至だろ。太陽が一度死んで、生まれ変わる日。去年聞いたよ」

朝の太陽がうつすらと木々に積もった雪を溶していく。

溶けかけの雪は光に反射し、キラキラと輝き始めた。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

そして、季節は巡る。

「怪盗ハットリは、まだ見つからんのか！」
鬼平の声が響き、少年のシルエットは月に浮かぶ。

完

エピソード

いつから人は偶然のことを運命と呼ぶようになったのじやろうか。

ワシがそう訊くと男は肩を竦める。

16年ぶりに逢うひねくれた友人は深い皺を顔に刻み笑って言った。

「面白いです。私にも、盗めないモノがありました。一度捨ててしまったモノです」

捨てたモノ…。

ワシはこの男がよく分かる。

ワシとコイツは同類である。

「二度、息子に会いました。一度は公園で、腹から血を流し倒れていました。二度目はおもちゃ屋の側で、空から降ってきた息子をトラックで受け止めました」

そう言って藤井は嗤う。

ワシは黙って彼から写真の束に目を移した。

藤井がピアスと共に拾ったマイクロフィルムを現像したモノだ。

「私は初めて見ますよ。ミスター」

藤井は決して戻らないモノを後悔混じりに呟きながら、ようやく幼い息子の笑顔から目を離した。

その時、ワシはフィルムのケースに刻まれた小さな文字に気が付いた。

“ LOVE MY ANGEL ”

愛する私の天使。

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

若い服部を写した写真は彼の養父のモノだった。
ワシは人の不思議さに目を細める。
僅かに見える運命にワシ自身が引きずられる。
この友人が残してくれた偶然はワシの記憶の一部となり、これか
らもワシを変えていくじやろう。

File 1 (Winter) No. 051 ダイヤモンド (偽物)
File 2 (Spring) No. 064 絵画 (名称及び作者不明)
File 3 (Summer) No. 079 角膜
File 4 (Autumn) No. 080 自筆遺言状
File 5 (Winter) No. 081 マイクロフィルム
File 6 (Spring) No. 0XX X XXXX..... .

老人は、ファイルをゆつくりと閉じた。

エピローグ（後書き）

長い間、この愚作にお付き合い下さいまして誠にありがとうございました
ましたm（――）m

タイトルの「月の裏であいましょう。」は、ORIGINAL
OVEの曲「月の裏で会いましょう」からいただきました。
機会があれば、是非、聞いてみてください

また、番外編で「ツキヨミ!」「Blue Moon under
the Bridge」も掲載しています。宜しくお願いします。

では、皆様の明日がステキな一日でありますように

山田木理

月の裏であいましょう。

月の裏であいましょう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1024e/>

月の裏であいましょう。

2009年5月18日19時15分発行